

60401

教科書文庫

6
810
46-1949
01304 49656

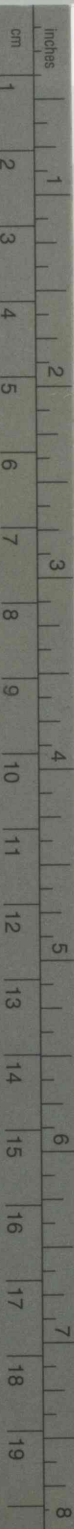
S25
70

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

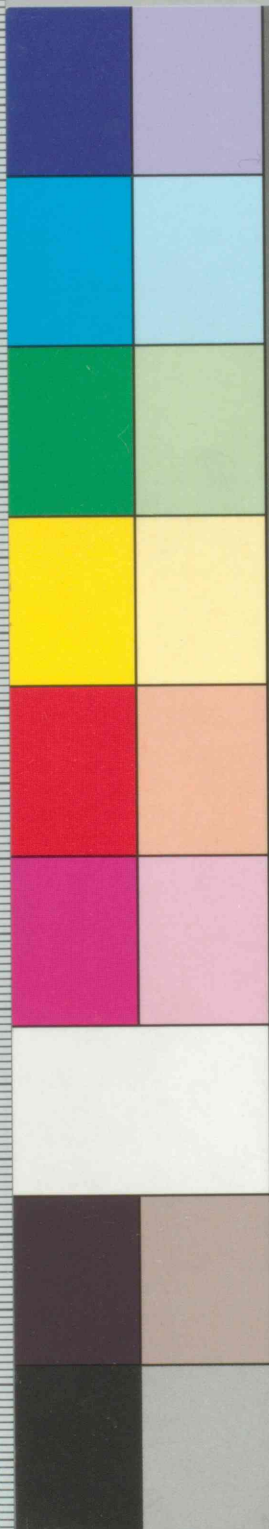
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教育部
資料室

文部省検定済教科書

私たちの國語研究会編

おれおれの國語

三

13	高國 1202
秀英	

高KC
Sh992



寄

中央図書館

われわれの國語

三



広島大学
教育学部図書

昭和二十四年十月十日
文部省検定済
高等学校國語科用

広島大学図書

0130449656





目次

一 学者の態度	一
二 科学	八
〔一〕 ペニシリン出現の背後にあるもの	九
〔二〕 泥炭地の物理	二十
三 万葉集と現代短歌	二十七
〔一〕 万葉集抄	二十八
〔二〕 現代短歌	三十三
四 藝術家とその作品	三十六
〔一〕 漱石の作品に現われた女性	三十六
〔二〕 小説と「人間」	四十七
〔三〕 作歌けいこの思い出	五十七
〔四〕 伊丹万作論	六十一
〔五〕 シューベルト	七十一



五 俳句俳文.....	七十五
〔一〕 蕉風二十句.....	七十七
〔二〕 春風馬堤の曲.....	七十八
〔三〕 奥の細道.....	八十
〔四〕 批評と解釈.....	八十四
六 歴史.....	八十九
〔一〕 歴史への関心.....	九十
〔二〕 福沢諭吉の歴史観.....	九十九
七 源氏・平家・西鶴.....	百十一
〔一〕 雨夜の品定め.....	百十四
〔二〕 小督.....	百二十
〔三〕 大晦日はあはぬ算用.....	百二十四
八 社会.....	百二十六
〔一〕 老漁夫の詩.....	百二十七
〔二〕 生活の探求.....	百三十

一 学者の態度

森 戸 辰 男

一 学問に対する三つの態度

哲学者ということばは、その生國のギリシアにおいては、今日普通という哲学者のほかに、数学者・自然科学者・社会科学者をも含めてあまねく学者を表わす語として用いられていたのであるが、語原的には、「知識を愛する者」または「知識の友」を意味するということである。また、ピタゴラスは、知識は神々にのみ許されるもので、人間にはたゞ「知識への愛」と「知識への努力」が許されるのだ、と言ったと伝えられているし、同じ考え方からプラトンも、ソクラテスをして、知者という名まえは古い神々にふさわしきもので、現に知者と呼ばれている人々には「知識を愛する者」といったふうな名まえの方がむしろ適当であろう、という意味のことを語らせている。それはともあれ、学者をもって「知識の愛慕者」「知識の友」となすこの考え方のうちには、現代における科学者の態度を考察するにあたって、きわめて重要な示唆が含まれているようである。

学者と学問との関係は、後者を擬人化すれば、最も適切に愛人または友人の間からたとえられよう。古いことばかり引くようだが、アリストテレスは、かれの倫理学において友情を論ずるにあたり、相手から得られる効益を目あてにする友情と、それから得られる快樂を目ざす友情と、相手の人格そのもののために結ばれる友情との三種を分かっている。効益または快樂は性質上可變的であり、しかも相手がいつでもこれを供與するとは限らないから、相手の人格そのものでなく、それから得られる

一 学者の態度

これらの偶然的な收穫を目的とする友情は、その純粹性と持続性とに欠けるところがある。のみならず、効益のための友情は往々商人根性に墮することがあり、比較的に眞の友情に近い快樂のための友情すら、時には青年を放肆・遊蕩におとし入れる危険をはらんでいる。これに反して相手の人格そのものために結ばれる友情は、有徳者間の友情である。そして徳が性質上持続的であり、且つ人格の本質的要素をなすものであるに照應して、かゝる友情はその持続性・純粹性において最も完全なる友情といふことができよう。

私は学者の学問に対する態度を友情に擬したが、上記の三種の友情に関する見解は、また移して科学者の学問に対する態度にも適用することができるのではなからうか。すなわち、科学者の学問に対する友愛関係は、快樂・興趣を中心とするものと、効用・利益を中心とするものと、学問そのもの、眞理そのものの敬愛を中心とするものとの三つの型に分かたれうるのである。

二 効益をねらう科学的研究

効益を旨さず友情が存在しうるように、科学者の学問に対する態度もまた、学問以外の効用・利益を目的とする場合がありうる。しかもそれは單にありうるという程度にとゞまらないうで、実際にはかなり支配的であるかもしれない。

学生諸君が専攻の学科目を選ぶに際しては、自分の能力や学科の重要性などもむろん考慮に入れるけれども、同時に、消極的には將來における個人的生活の安定を、積極的には個人的榮達・致富を、おもな目標とするのがむしろ普通なのではないかと思われる。事実においても、医者がもうかる時には秀才が医科に殺到し、技術者が景氣のよい時代には工科は押すな押すな盛況を呈し、ドイツ法科が

官吏の登龍門であれば法科生はこゝに蟬集し、資本主義の繁榮期は經濟学科を異常に膨張させるが、これに反して榮達・致富の機会少ない文科や理科は、これらの各時期を通じてしばしば定員にも満たぬさびしさを呈している。その善悪は別として、かくのごときが資本主義社会における知識階級の生活態度の一面の露出であることは争われない。

ところで、これと幾分あい似た関係が、往々学者生活の選択に際して現われて来る。すなわち、学者の地位は、学問に対する眞の愛からよりも、むしろそれが保障する生活の安定、榮譽の地位、もしくは致富の機会のために求められるかのようなものである。純然たる民間学者の存在が困難であり、学者の地位が、だいたいにおいて官私大学の教授または大研究所の研究員の地位、特に前者と合致するところでは、とりわけさような場合が多いようだ。そういう所では、たとえば大学教授の生活は、しばしばその仕事が高尙且つ自由であり、その地位が社会的に尊敬せられ且つ安定的であることのために、時々は実業界や政界へ進出するのに屈竟な足場であるために選ばれることが決してまれではないらしい。そしてこれらすべての場合において、科学者を学問に結ぶおもな紐帯は、学問を媒介として得られる個人的な効用であり、利益である。したがって両者の関係は外面的であり、経過的たらざるをえぬ。というのは、かれらが常に眼中に置いていたところの、そして学者生活を手段としてねらっていた目的が達成されれば、かれらはいつまでも学問に恋着して、時には弊履のごとくこれを捨てて顧みないこともあるであらうから。かゝる態度・心構えをもって科学に對することは、科学者として許すべからざることであり、あるいは少なくとも感心したことではないであらう。また、かような人を科学者と呼ぶことは科学の尊嚴の冒瀆であるかもしれない。それにしても、科学者と呼ばれている

人々の間にかような意味の「知識の愛慕者」が絶無であるとだけ断言しえようか。

しかし、かくいうことによつて人々は生計の手段としての、すなわち職業としての学生生活を貶してはならない。というのは、資本主義制度の下においては、有産者以外の者には相当の生計費を求めようとするのは避けがたきことであり、したがつて生計の道としての学者生活をば不純の理由で排斥するとすれば、学問研究は結局有産者の独占に歸し、その結果、学問は他の方面からのより恐るべき影響にさらされることになるであらうから。それゆえ、科学者がかれの学問において生活確保の手段を、生活欲望充足の手段をも認めることは全く正当のことである。たゞそれにおいてもつばら營利・致富への手段、権力・榮達への手段を見いだそうとするところに、かれの逸脱が始まるのである。それはともあれ、学問そのものをでなく、それから得られる直接・間接の個人的効益を主要目標として学問に対することは、いかなる場合にも、科学者にとつて最も望ましき態度ということではできない。

三 興趣としての科学的研究

研究者を科学と結ぶものが快樂であるという第二の場合には、両者の関係は第一の場合に比べてより純粹であり、より内面的である。が同時に、その持続性においてはより不安定なことが多いであらう。科学における快樂は、普通には研究における興趣として、特殊の事情の下では創造の歡喜として現われる。が、そのいずれにおいても、それは感覺的快樂を越えた高尚な快樂であり、所有欲の満足などに比すれば、多くの場合、社会的にもはるかに有益な快樂なのである。

そのうち科学的研究における興趣を端的に表わすものは、「興味の研究」ともいわれるべきものであつて、その際、研究者が学問に求めるものは、何よりもまず興味であり、快樂である。(もつとも、

このことはかゝる研究における眞理生産の能力を少しも否定するわけではないのであるが。)しかし、このいわゆる趣味の研究は、多くの場合仕事の轉換より來る「労働の歡喜」を追求するところの生活の余裕あるディレッタントの余技としての科学的研究に、時には骨董(こつどう)いじりに墮落した科学者の研究にもあてはまるのであつて、本格的の科学的研究はかゝる意味の興趣を目的として行われるものではない。

だから科学者がその研究において快樂を追求するとすれば、それは個々の労作過程そのものにおいてではなく——それらはしばしば農夫の労働のごとく、粒々辛苦であるから——それらに潜在して、やがて創造の歡喜として經驗せられる科学研究上の法悦または三昧境(さいまいきやう)においてであらう。かような純粹のエクスタシーこそ科学の興えうる最高の快樂であり、すべての科学者はこれを享受する正当な権利を有しているのである。

だから科学的創造の歡喜は、造物主が科学者に與えた最も高貴な特権であつて、かれらが科学的研究においてこれを享受することは少しも不当ではないであらう。だが同時に、かゝる快樂がきわめてまれにしか恵まれないものであるのではなく、人生における幸福と同じように、眞剣な努力の余慶としてのみ興えられるものであつて、これを目的として追求する場合には、かえつて達成されがたいものだ、ということも忘れられてはならない。それゆえに、こゝでもまた、学者と学問との関係は、まだなお外的であり、可動的であつて、したがつて科学者の科学に対する最も望ましき態度を示すものとはいえないのである。

四 眞理のための科学的研究

第三の種類の友情が相手の人格そのものを目あてとして結ばれるのに対応して、学者の学問に対する態度の最後のものを特徴づけるものは、学問そのもの、真理そのものへの愛である。ポアンカレは、このことを強調して次のように言う。「真理の発見、これが吾人の活動の目的でなければならぬ。吾人が活動の目的とするに値するものはこのほかにはない。疑いもなく、吾人はます人生の苦痛を軽減することを努めなければならぬ。しかし、それは何のためか。苦痛のないことは単に消極的の理想であつて、これは世界の破滅によつてかえつていつそ確実に達せられる。吾人がます人生人類をして物質的の不安を脱せしめようと欲するのは、一にかくして回復せられた自由を、真理の研究と考察とに用いるためである。」すなわち、「科学のための科学」の主張である。そしてかゝる真理の探求において、学者は個人的利害を離れ、快・苦を超越して、ひたすら研究に打ちこむのであるから、かれと学問との間の関係は内的に緊密であり、かれは純粹な形における「知識を愛する者」または「知識の友」と呼ぶことができよう。かれは孟子の語を借りていえば「富貴も淫すあたはず、貧賤も移ふるあたはず、威武も屈くあたはざる」志操をもつて学問に身をささげ、したがつてかれと学問との関係もまた、事情や移り氣によつて変更されることなき恒常性を帯びて来る。しかる時、学問の研究はもはや学者にとつて生活の手段ではなく、生活そのものの核心を形作るに至るであろう。

しかし、真理の探求、科学の研究は、それ自身において学者の全人的傾倒に値するものであるか、それともそれが人類にもたらす恵沢によつて尊きものとされるのであるか。より具体的に考へて、たとえば明らかに人類にとつて有害なテーマの研究も、科学の名においてすれば、学者の全人的傾倒に値するものとなることができるか。こゝに眞摯な学者の必ず一度は当面しなければならぬきわめて

て嚴肅な根本問題が横たわつてゐる。すなわち、標語的な表現をもつてすれば、それは「科学のための科学」か、それとも「人生のための科学」かの問題、「純粹思惟としての科学」か、「力としての科学」かの問題にはかならない。

私は今これらの対立する二大科学觀の正否の審判者とならうとは思わない。實際、この勝負を判定することよりもむしろ、それらがそれらの立場において科学的研究における学者の逸脱・墮落を防止して、それを正道に推進するところの匡正の理念であることの意義を闡明することの方がよいたいせつなのであるまいか。すなわち強力の干渉や利益の誘惑が真理の探求を攪乱せんとおびやかす時、学者はこれが防衛のために「科学のための科学」の理念を確持すべきであり、これに反して学問における逃避・偷安・自慰・好事・驕慢等々が戒められねばならぬ場合には、「人生のための科学」の理念が高揚せらるべきであらう。それゆゑに、これら二つの科学觀は、扨一的によりも、むしろあいまって作用する時、真理のための科学的研究を完璧ならしめるものと考えられる。かくてわれわれは、科学者の学問に対する眞実なる態度が、純粹無雜なる精神をもつて科学的眞理の探求に傾倒し、科学的眞理によつて人生に奉仕することに存するゆゑんを理解しうるのである。 (学生と科学)

研究

一 ギリシア語の「哲学者」の語原は、現代に

おいてはいかなる意義を持つてゐるか。

二 学者と学問との関係は、学問を擬人化する

一 学者の態度

ば、何にたとえられるか。

三 科学者とは、どういう範圍の学者か。

四 「効益をねらう科学的研究」とは、やさし

く言えば、どういふ研究か。

五 「興味としての科学的研究」の追求する興味とはどういふものか。

六 「標語的な表現」とはどういふことか。

七 「科学のための科学」「人生のための科学」

とはどういふことか。「真理のための科学的研究」は、この両者とどういふ関係にあるか。
八 真理のための科学的研究は、効益・興味のための科学的研究とどういふ関係にあるか。

二 科学

こゝには、ペニシリン出現の経路を分析して、その発見の契機、その治効力を発現させた学問の傳統、それが薬品として社会に廣く利用されることができるようになった大量生産の技術といった問題について考究した論文と、北海道の泥炭地開發問題をどう解決すべきかを物理学者の立場から論じた随筆とを載せた。これらにより、科学的、合理的態度とはいかなるものか、われわれはどのような態度を身につけているかどうかを考えるとともに、科学や技術は日本の再建にどのように役立てるべきか、先進國の諸研究は、どのように採り入れて眞にわが國の科学の水準を高めて行くべきかなどの問題について、眞剣に考えてみよう。なおまた、自然科学などを論じた文章はとかく無味乾燥になりやすいといわれるが、この二つの文章の持つおもしろみについてもよく味わって参考にしよう。

〔一〕 ペニシリン出現の背後にあるもの

秋元壽恵夫

私はこれより少しくペニシリンについて物語ろうと思ふのであるが、あらかじめおことわりしておかねばならないのは、こゝでは、ペニシリンという薬にはどんな種類があるか、その單位はどうして定めるか、それはどのようにして培養され、且つ生産されるのか、それからこの薬はどんな病氣にきくのか、また、どのように用いたらいいのか等々については、いさゝか触れていないことである。

もちろん、これらの事項はすべて重要なことであるには相違ない。しかし、こういうことに関しては、すでに多くの人々が競って、いろ／＼な雑誌に書き立てていることでもあるし、それに、ありていにいうと、こういう知識は、いくら豊富になつたとしても、それは結局のところ單なる物知りになるだけのことだ、これによって自らの研究に拍車がかけられるといったような、新しい分野に開拓のくわを入れる原動力となることはまれである。

いずれにしても、ペニシリンはすでに出現してしまつたのだ。われわれとしては、たゞその成果を利用すればいいのであるといふのであれば、話は簡單である。そのためには、できる限りすばやく、かの地の文献を入手して、できる限り詳しくこれを紹介すれば事足りるのである。しかし、それではいつまでたつても、わが國の医学研究にひとり立ちの發達は望めない。われわれは、ペニシリンばかりでなく、すべて海外の新研究を紹介する場合には、常に自國の研究に何かある指針を與えうるよう、換言するならば、なせわが國にはこのような研究が育たないのかについて、深い反省ができるように

し向けるべきであると信ずる。

私はかゝる観点に立って、ペニシリンという新薬剤が出現し、これが実用化されるに至った過程を、次の三つの段階に分かつて述べてみようと思う。すなわち、ペニシリンはまず第一に、発見されなければならなかった。第二に、それは治効力を持つものでなければならなかった。そして第三に、その大量生産が可能にならなければならなかった。

二

まず、第一の段階について述べる。ところで、われわれが多くの発見物語を読む場合に、しばしば氣づく特徴的な話の運び方は、その動機の説明に当たって、偶然ということばが好んで用いられていることである。ことに、当面の問題に深く立ち入って考えてみたこともない者が、子引き孫引きのつまりは借りものの知識で、ものをいう場合には、ほとんど常にといついていくくらいにこの論法が用いられる。もつとも、そうした場合の裏の裏を探ってみると、しばしば述者の眞の意図は、結局、偉大な人間というものは偶然の機会をすかさず捕らえ、かくもみごとな成果にまで到達しうるものである、さすがに天稟の資質は争えぬ、といったような含みを持たせ、かくして当の発見者の名譽をたえ、且つその物語にいっそうの光輝を添えようという効果をねらう、一種の常套手段であることもないではないが（また、そうした場合には、えてして奇蹟的だとか、運命的だとかといった形容詞をつけたがる）、しかしよく考えてみると、これほど不用意な、安易な、同時に危険な取り扱いはないのであつて、実は発見の動機を單に偶然ということばであつさり片づけてしまつていような物語は、それから先発見された事実について、いかに微に入り細をうがって敘述されていようとも、そうした

知識の堆積は、要するに耳学問の程度を越えることはできない。読者をして單なる物知りに育て上げることができさえしたらわが事成れりというのなら話は別であるが、そこに語られている他人の経験を眞の意味における他山の石となし、將來は自らもその道を進んでみようという發奮の心を読者の胸裡に燃え上がらせるための血肉のかたを與えるさすがには断じてなりえない。のみならず、このような物語は、詳細に語られれば語られるほど、精神的に一種の落し穴の中に読者をはめこんでしまう危険性を多分に藏しているのである。というのは、読んで行くうちに知らず知らず、読者をして、かゝる大発見はとうてい自分などには及びもつかぬ高嶺の花であり、しよせんは與えられたものとしてありがたくちようだいするよりほかはないのであるという、あきらめというか、少なくとも自分と発見者の間にある距離を常に感じさせてしまふおそれがあるからである。

——かくすることが、発見者の榮譽をいやが上にも高めさせるゆえんであると、述者の方でかりそめにも考えているとしたら、われまた何をか言わんや、と嘆くのほかはない。

三

ペニシリンの発見についても、すでにそうした傾向を持った物語が幾つか現われた。しかし、血清学者アレキサンダー・フレミング博士がペニシリンの作用を認めたのは、はたして偶然だったのだろうか。

周知のように、かれがはじめてペニシリンの作用を認めるきっかけとなつたのは、平板培地の上で發育していたどう状球菌の集落に異変が起つたという事実である。一九二九年「イギリス実験病理学雑誌」第十卷六月号に掲載されているかれの論文「ペニシリウム株の培養液の抗細菌性作用につ

いて。あわせてインフルエンザ菌の分離に際してこれが用いられる点に特に論及す。」は、ペニシリソンの殺菌作用に関する最初の報告であるが、その冒頭において、フレミングは淡々とした筆致で次のように語っている。「ぶどう球菌のいろいろの変種を調べるに当たり、多数の平板を実験機の上に放置し、時々その発育を検査した。その時はどうしても培地を空気に一時さらさないわけにはいかなかった。培地はいきおい各種の雑菌でよごされた。そうしたもののうちで目立っていたのは、混入したかびの大きな集落のまわりのぶどう球菌の集落が透明になっており、明らかに融解を起しているということであった。そこで、このかびを更に培養し、このかびの培養液にしみ出して來るに相違ない、ある種の細菌融解性の物質の作用を確かめる実験にとりかゝった。その結果、このかびを室温で二週間培養したブイオンは、ぶどう球菌以外の各種の病原菌に対しても著明な発育阻止作用・殺菌作用、および溶菌作用を呈するようになることがわかったのであった。」

こゝで注意せねばならぬ点は、培養平板の上にかびが集落をつくったということと、そこに現われた異変にフレミングの目がとまったということは、嚴に峻別して考えなければならぬということである。

なるほど、一九二八年か二九年の四月以前のある日に、フレミングの実験室の実験機の上に並べられてあつた培養平板の上に、今でいうペニシリウム・ノクターツムという青かびがはえたということは、確率的な意味で偶然のできごとであつたといえるかもしれないが、その青かびがはえた平板上のぶどう球菌の集落に起つた異変にフレミングの目がとまり、それが何を意味しているかがかれに理解された過程には、もはや、偶然性が入りこむ余地はちり一すじもないのである。この二つの事象を

明瞭に區別することは、きわめて重要である。なんとすれば、この両者の相関にこそ研究というものの眞の实体が隠されているのであつて、われわれはこゝにこそ注目せねばならぬからである。

かびの大きな集落のまわりのぶどう球菌の集落が透明になつていて、明らかに融解を起しているという事実は、かれの論文の書きぶりからもうかゞえるように、当時のかれにとってはなんら奇蹟的なことでもなければ、また驚異に値することでもなく、実はきわめてなじみの深い現象であつたに過ぎず、しいていうならば、せいふのところで、かびにもこの性質があつたのかと、自分の知見を新たにすることができた喜びの対象になりえたというにとゞまったに相違ない。ということは何を意味しているか。こゝが最も重要な点であるが、つまり、当時のかれは、こうした現象に日夜思いを潜め、同様なことがらを廣く自然界に探し求めていたさいちゆうであつたからである。

ペニシリソンの発見についてわれわれが学びとらねばならぬ教訓の第一は、この一事でなければならぬ。そして、これを帰納して、一つの心構え、すなわち、科学を志す者は、すべからず、何事であれ、自己の追究目標を明確に定立し、その見地に立つて万象に臨む態度を堅持すべきであるという、一般妥当性を有する身の処し方に導くことこそ、フレミングの経験を眞に自己の問題としてわが身にじかに結びつける道であろう。科学の世界には、宝くじを引き当てるような、一攫千金の幸運などというものは決してありえない。氷山は常に、そのほんの一部を海面上に現わしているだけで、龐大な実質はすべて視界には姿を見せていないことを、深く思いみるべきである。

四

では、当時におけるフレミングの追究目標はどういうものであつたのだろうか。

かれが一九〇八年以前にはいかなる仕事をしてきたかは、資料が不足で、今のところ不明であるが、その年以後になるとほゞわかつている。ちなみに、一九〇八年には、かれはすでにロンドンの聖メアリ病院の研究室に籍を置いていた。したがって、爾來四十年に近い長い間、かれは同じ研究室において仕事を続けているわけになる。かれのおもな仕事は、最初是人血清の殺菌性に関するもの（これには、同國人でかれと同じ領域における研究に従事していた先輩ジョージ・ナットールの廣汎な実験がある）、それから人間の涙に含まれているたんぱくの血清学的特異性に関するもの、人血液から白血球だけを分ける方法に関する考案などであって、それにまさって、元來、聖メアリ病院でのかれの職務が予防接種係であつた關係上、ワクチン療法・ワッセルマン反應に用いる抗原に関する研究報告なども出している。

一九二二年、かれは「イギリス実験病理学雑誌」第三卷十月号に「各分泌液・各組織中に見いだされる溶菌性物質（溶酵素）」という論文を発表した。細菌を溶かす物質としては、それまでにすでに、抗原抗体反應によつてできて来る各種の溶菌素と、それから常に菌の發育とともに増強し、その培養濾液中に含まれているいわゆるバクテリオファージとが知られているが、フレミングが報告した溶酵素は、これらとは系統を異にした物質である。引き続きてかれは、一九二四年の「ランセット」六月二十八日号に「卵白の殺菌力について」と題する論文を掲載した。この論文の中では、現在生長ホルモンの問題、菌發育促進因子並びに阻止因子の問題に関連して、新たに重要な研究主題の一つとして取り上げられるに至つた卵白と卵黄との間にうかゞわれる拮抗作用が、いち早く論じられているのであるが、いずれにしてもフレミングは、これを溶酵素の一種として取り扱つていたのである。

溶酵素は、涙・唾液をはじめ各種の分泌液、一般の動物の各組織・各臓器、それから数種の植物樹液の中に少量ずつ含まれていて、いずれもぶどう球菌・連鎖球菌・髄膜炎菌・チフス菌などを溶かす力がある。オクスフォード大学病理学教室のエイチ・ダブリュー・フロレイ博士は、その翌年の一九二三年、それがどのように分布されているかを、各分泌液、多数の動物の各臓器について精密な検索を行つて、その成績を発表している。（フロレイとフレミングとの仕事のつながりは、すでにこの時から生じていた。）

爾來、フレミングのおもなる関心は、この溶酵素の存在を更に廣くつきとめることであり、その性状を明らかにすることであつた。いわば、かれは、「溶酵素」なる旗じるしを高く掲げていたのである。われわれは、この事実をしっかりと脳裡に刻みつけなければならぬ。世の中には、言われてみればじめて氣がつくということがよくある。毎日毎日通る町々の商店の看板も、その氣になつて順序を追つて数えてもしてみない限りは、決して三つとはそらんじられるものではない。それと同じわけで、目の前でどんなにあり／＼と一つの事象が動いていても、目（考察）がお留守だと、何がなんだかいつこうに物覚えさえないのがあたりまえである。

五

さて、ペニシリンはこのようにして発見されたというものの、たゞそれだけでは、現在しきりに喧傳せられているような新藥劑ペニシリンの出現ということにはならぬ。現に、フレミングが一九二九年に發表した論文の中では、ペニシリンということばは、「かびをはやしたブイヨン培養液の濾液」という煩わしい言い方を避ける意味で命令されたのであつて、これはペニシリンに敏感な細菌類に感

染した箇所塗るなり注射するなりすれば、あるいは防腐剤として有効かもしれぬ、とは言っているもの、かれが主としてもくろんだのは、このものの適用によって、ペニシリンに抵抗する菌、たとえばインフルエンザ菌のようなものを純培養することができるといふ点にあった。

これが細菌性傳染病に対して驚異的な治効力を發揮しうることが判明するまでには、いま一つ重要な契機が必要であつた。

新藥劑ペニシリン出現の背後にあるものとしてわれわれが学び取らなければならぬ第二の教訓は、その契機に關してゐる。これを一言にして盡くすならば、學問の傳統を確立するといふことがいかに重要であるかをよくよく考えよと言へば足りる。

従來わが國の医学は、主としてドイツの學風を受けて發達して來たので、ドイツ以外の諸國では、どのように医学研究が進んでゐるかに關しては、ほとんど傳へられていなかった。イギリスにおける医学研究についても、その弊にわざわいされて、ごく少数の人々を除いては、全くの風馬牛で看過されて來たのであるが、かの國における實驗医学、ことに細菌の物質代謝をもつばら研究対象とする細菌化学の發達には、まことにめざましいものがあつたのである。

ズルフォンアミド劑は、周知のように、ドイツのある染料会社附屬研究所の主任であつたゲルハルト・トッド・マーク博士が、一九三五年に公表したプロントジールという藥から口火が切られ、近代における化学療法法の王座を占めるに至つた新藥劑の總稱であるが、さて、この藥がきくのはどういふからくりによるのであるかといふ問題に關する研究は、そのころすでに學問の貴重な傳統があしき政治によつてすたすたに寸断されつゝあつたドイツの國ではついに結実しようもなく、主流は海を越えたイギ

リスとアメリカとに移つてしまつた。

ズルフォンアミド劑の作用機序に關する研究は、一九四〇年以來、ひたすらその巨歩を歩み続けたが、問題の焦点は、漸次、細菌の物質代謝を支配している必須代謝物、およびこれに關與する幾つかの酵素環の分析、それをめぐつて細菌發育促進因子、並びに阻止因子の闡明に集中せられるようになった。これが今私という學問の傳統である。この傳統にさゝえられて、ペニシリンは改めて時代の脚光を浴びるに至つたのである。ペニシリンが発見されて以來、その治効力が確認されるまでにほん十年余の年月が経過したといふ事實は、このように理解してはじめて意味深いものとなるであらう。

ペニシリンの治効力は、一九四〇年、オクスフォード大学のフローレイ教授およびその協同研究者によつて確認されたのであつたが、かれらがその動物實驗の成績を發表した八月二十四日附の「ランセット」誌上の報告によれば、近來、化学療法といへばもつばらズルフォンアミド劑に限られてゐるようだが、菌發育阻止物質といふ点から考えれば、廣く自然界に存在してゐる多数の微生物やかび類に見いだされる殺菌性物質にも、大いにその可能性がある、また、われわれがかね／＼行つてゐる溶解素に關する實驗から見て、これらの物質の化学的並びに生物学的な性状を系統的に調べてみることは決してむだではあるまい。それで、まず手始めにフレミングが一九二九年に記載したかびの産物を取り上げてみた、と書いてある。フローレイの溶解素に關する研究がすでに一九二三年に始まつたことは前述の通りであるが、それが今やズルフォンアミド劑の作用機序に關する研究の進展と結びついて、こゝではじめてペニシリンが治療劑として浮かび上がつて來たわけである。

ペニシリンが新薬剤としてはなほ、しく治療界に登場しうるまでに経なければならなかった段階は、以上では、その条件が満たされたといつてよいが、まだ残されているものが一つある。それはペニシリンの大量生産が可能にならなければならぬという条件である。このことに関しては、ジョン・ホプキンス大学医学部のペラン・エイチ・ロング教授が、一九四六年二月十一日に、シカゴで「戦時中の医学の進歩と医学教育」と題して講演した中で、「ペニシリンの大量生産は、今では十分可能なのであるが、この功績はかつて、イリノイ州農学研究所（ペオリア）の研究者たち、およびアメリカ製薬工業、化学工業、蒸溜工業界に職を奉じている人たちの努力によるといつてさしつかえなく、その研究のみごとな組織力、生産工程に現わされたかれらのすばらしさは、ペニシリンの恩恵に浴する人々から最高の賞賛を受けてしかるべきであると思う。」と、誇りやかに自國の貢献をたゞえている通り、これには何よりもまず絶大な工業力の基礎が裏づけられていなければならぬのである。

以上、私は、新薬剤ペニシリンが出現するに至った過程を三つの段階に分けて考察することによって、今後われわれが進むべき道について、それなほ学ばなければならぬ教訓を導き出した。

現在では、ペニシリンに類似の薬物は、「生きた細胞からつくられる抗微生物剤」という意味で、「抗生物剤」なることばで総称され、それらのうちでも二、三のもの、たとえば、ロックフェラー研究所のルネ・ジエール・デューボス博士のグラミチン、デューボスの示唆を受けて同じ道に探求の歩を進めて行ったニュージャシー農事試験所のワクスマンとメルク製薬会社、メーヨークリニックとの協同研究になるストレプトマイシン、また、ソヴェート連邦トムスク國立大学の生物学者ヴェロトキン教授のフィトンチドなどは、すでにその声價は定まったと言つてもいい。中でもデューボスの研究は、

むしろペニシリンの研究の先駆をなしているともいえるので、フロレーイがペニシリンを取り上げた時には、同時にデューボスの仕事に念頭にあつたことは、かれの報告を読めば明らかである。

思えば、一八五七年八月三日、リールの科学協会において「乳酸醱酵はっこうに関する報告」を発表し、醱酵の微生物説をはじめて世に問うて以来、パスツールは数次の報告の中で次のような着想を強調した。すなわち、醱酵にはそれなほ特別な酵素があつて、それらは形態学的にも異なっているばかりでなく、阻止物質に対する抵抗によつても区別される、また、有機化合物の非対称性という特質は、生理的な化学反應を変化せしめることから考えれば、自分が見た選択的醱酵の際の特異性は、おそらく生物学的にも大きな意味を持つたろうと。

今や、かれの考えは、化学療法に関する新知見にさへえられ、新たに「抗生物剤」の出現となり、ますます多望なその前途を嘱望させるに至つたのである。

ペニシリン出現の背後にあるものを追究しつゝ、私がいまだき続けたたいせつなる願望は、わが國の研究者たちがこれに追いつき、これを乗り越える日の一日も早く來たらんことをしたのであつた。

（雑誌「國民の科学」）

研究

一 「すべて海外の新研究を紹介する場合には、常に自國の研究に何かある指針を與えようよ
う、し向けるべきである。」というのは、どう

してか。

二 発見物語には、その動機の説明に偶然といふことばがしばしば用いられる。どうしてこ

のようなことはが用いられるのか。このような物語を読む場合にはどういふ点に注意すべきか。

三 ベニシリンの発見について、どういふ点を学び取らなければならないか。

四 「科学を志す者は、すべからず、何事であれ、自己の追究目標を明確に定立し、その見地に立って万象に臨む態度を堅持すべきである。」とはどういふことか。

五 「科学の世界には、宝くじを引き当てるような、一攫千金の幸運などというものは決してありえない。」とは、どういふことか。

六 フレミングがベニシリンの作用を認めたの

は、はたして偶然だったか。フレミングの研究過程を簡単にまとめてみよう。

七 「学問の傳統を確立する。」ということは、どういふことか。それはどんな重要性を持っているか。

八 ズルフォンアミド剤が、ドイツを離れて、イギリス・アメリカで研究の実を結んだ理由について考えてみよう。

九 ベニシリンが新薬剤として、はなん／＼と治療界に登場するまでに経なければならなかった段階を簡単にまとめてみよう。

十 筆者がこの論文で言おうとしていることは何か。簡単にまとめてみよう。

〔二〕 泥炭地の物理

中谷 宇吉郎

私たちは今度農業物理の研究所をつくろうとしている。その話を聞いて、友人のS君がやって来て、その研究所で一つ泥炭地の農業物理的研究をやってみないかという話を持ちかけた。

このごろ火のついたように食糧問題がやかましくなり、それについて新しい土地の開墾を奨励する声が盛んにあげられている。しかし、北海道のように廣い所でも、そうすぐ簡単に開墾ができるような土地はほとんど残されていない。今残されている所は、釧路や根室の湿地帯か、それでなければ泥炭地である。そのうち、湿地帯の方は、雨期には馬がおばれるような所で、とても急に手をつけるわけにはいかないが、泥炭地ならば、なんとかなるはずである。現に札幌附近の泥炭地などは、篤農家たちの三十年とか五十年とかの苦心の結果ではあるが、とにかく作物ができています。そんな時をかけないで、なんとかしてこの泥炭地の開発ができたなら、北海道だけで何万町歩という耕地が得られるはずだという話である。

これはたいへんおもしろい話で、農業物理学ではかっこうの問題である。気に入ったのは、三十年とか五十年とかの時と労力をかければできるときまっていることで、現にそれはできている。そういう問題を科学の力で時を縮められまいかという点である。それは科学を最も正当に使う道である。科学というものは、可能なことを実現するための学問で、たゞ全然科学を知らない人でやるよりも、むだを少なくして、時と労力を節約する点にその効能があるのである。

それでは一つ泥炭地の研究を始めようかという話になり、一体泥炭地がどういふ点で困るのかを聞いてみた。泥炭地がなぜ農耕に適しないかも知らないで、その研究を始めるといふのも大胆な話であるが、泥炭地の物理的または地球物理的な研究というものは、今まであまりないように思われる。そういう手のついていない問題ならば、やれば必ずやっただけのねうちはあるものである。これは研究の委託などを持って来られた場合に使うきまり文句で、ほんとうに困っている問題ならば、研究をすれば、先方が予期するような効果は出ないかもしれないが、やればやっただけの効果は必ずあるもの

である。

いろ／＼話を聞いてみると、結局泥炭地で一番困るのは、排水の問題と、無機質土壌（じむいしつど）の不足と、それに地温の低い点とに帰するらしい。排水はこのごろ流行の暗渠排水（あんきょすいすい）をやればよいし、無機質土壌の不足は客土をすれば済む話だと思われるかもしれない。しかし、暗渠を作るとか、客土をすればよいのか、問題の解決ではなくて、提出なのである。どういふ暗渠をどの程度の深さに埋めるか、どういふ土をどれくらい客土するのが一番有利か、それはおの／＼の土地の泥炭の性質と、地球物理的條件とによってきまるので、それが問題なのである。

S君は、もしこの研究をやってくれるなら、自分の所有している泥炭地を提供してもいいと言っているが、その土地などは、風の非常に強い所で、排水をしてあまり土をかわかしてしまつと、たいせつな無機質土壌がみな吹き飛ばされてしまつて、かえつて土地が悪くなつてしまふという話である。客土だつて、よい土をたくさん入れればいいにきまつているが、量と効果とは比例しない。必要な最小量の客土によって最大の効果をあげることが問題なのである。地温の上昇が、一番困難な問題で、しかも一番たいせつな問題らしい。この方は、農業物理的な研究によって解決される見込みがあるかどうか、まだはっきり言えない。しかし、その研究に採るべき道は、この問題に全然手をつけていない今の時期でも、はっきりと指示することができるよう自分には思われる。

考えようによつては、問題はきわめて簡単である。泥炭地の地表面近い所の地温は、太陽からの輻射熱と、地下からの地熱の傳達とによつて上昇し、冬の間には積もつた雪を溶かすに必要な潜熱と、大気中に奪われる熱とによつて低められる。このプラスとマイナスとの差によつて、地温が決定される

はずである。問題はプラスの方をできるだけ多くして、マイナスを少なくするように努力するのが唯一の道である。

マイナスの方について見ると、一冬の間には地表に積もる雪の量を左右することは、実際問題として当分は不可能である。それで大気中に逸散する熱をできるだけ少なくするように試みるよりほかに方法は無い。大気中に逃げる熱は、輻射や傳導はあまり問題でなく、おもなものは対流である。というたゞいふ学問的なようであるが、結局風があると冷えやすいということである。すなわち、防風林を作ればよいということになる。防風林は作物の育成にも直接必要なもので、いまさらいうまでもないが、防風林の高さと密度とその間隔とが、地熱の保持にどうきくか、一番有効の植林の方法はどうかというようなことも、まだあまりよく研究されていないように思われる。

もっと手近いところで、風がある場合、固体の表面から奪われる熱量と風速との関係は、熱工學方面では十分よく研究されている。しかし、それは平滑な面上を層流の風が吹く場合が詳しくわかつているだけで、畑の上を天然の風が吹く場合には、その公式は全然使えない。作物のある畑の上を吹く風は、常に渦流（うずりゅう）になつていて、そのうずの様子は、畑の條件によつてみな異なる。したがつて、熱の奪われ方もそれ／＼の場合によつて異なるはずである。もうたゞいふ以前に、ウィーン（ウィーン）のシュミット教授がこの渦流の研究をして、おもしろい結果を出しているが、その後、この方面の研究で画期的と思われるようなものはあまりよく知らない。秋の稲田に立つて、実つた稲の穂が風になびく姿を見た人は、穂が決して一様には動かず、時々へびがのたくるような形をして、田の面がきわめて複雑に動くことを見ているであらう。あれが天然の実際に吹く風の構造なのである。風があゝいふ複雑な構造を

してゐるとすれば、それによつて地表から奪われる熱の量も、そう簡単にはきめられないことがよく了解されるであらう。

風で奪われる熱よりも、なんといつても問題は太陽熱と地熱とである。そのうちで、太陽熱は結局地表に達する量だけしか利用できない。たゞ、その中でむだに反射されて逃げる熱量をできるだけ少なくすることが科学の務めである。反射で逃げる輻射熱で一番大きいものは、春さきの雪面からの反射であらう。三月の中ごろ雪がだいたい降りやんでから、五月にはいつてやつと雪が消えるまでの間地面は白い雪におゝわれていて、春さきの強いあの日射を大部分反射してしまうのは、いかにも惜しいことである。したがつて雪の溶け方もおそく、作つげが遅れて、北國の乏しい收穫をますます乏しくするのである。

融雪の促進という問題が、それで、泥炭地の開発には一つの重大な問題となる。この方はすでに研究が相当進んでゐるので、資材と労力さえ許せば、太陽熱の利用によつて二週間くらい早く雪を消すことは可能である。何百町歩という廣茫たる土地でも、雪上トラクターさえ使えば、その雪を消すことは十分見こみがあり、また、雪上トラクターもすでにできているものがある。今のところ經費だけの問題で、わが國ではそういう研究に金を出さないだけのことである。北國の春に特有なあの強い日射を、一箇月の間むだに捨ててしまわないで、半月の日射を利用して雪を消し、残りの半月の日射を黒土に吸収させたならば、泥炭地の地温上昇になんらかの寄與があることは確實である。その量がどれくらいになるかは、実験を試みなくてはわからない。

最後に残る問題は、地熱の傳達である。泥炭地はたいていは一望千里の廣漠たる平地で、それをさ

えざる立ち木もまれである。冬の間に激しいふぶきにさらされて、雪の積もり方も比較的少ない所が多い。豪雪地方ならば、融雪の問題だけ解決すれば済むが、寒さがきびしくて比較的雪の少ない地方では、土地の凍結という難問がある。北海道の泥炭の凍結はまだよく調べてないが樺太のツンドラの下にある泥炭層の凍結様式から考へてみて、やはり霜柱氷層がたくさんはいった凍結になることが多いただろうと思われる。霜柱と同じ成因から成る水の層が、完全に土から分離して、水平な水の板となつて凍つたものである。この種の水層は、下から水が吸い上げられて、土から分離して凍つてできたものである。それで溶かしてみると、余分の水が上すみ水となつて出て来る。

こういう余分の水が下から吸い上げられて、それが凍つて、たくさん水がでると、それが春になつて溶ける場合に、例の一グラムについて八十カロリーという潜熱を必要とするので、溶け方が非常におそくなるのである。そればかりでなく、この水の層が地熱の傳達に対しても断熱的作用をなすことが考えられる。その上やつかいなことには、春さきころいう凍土が太陽の輻射熱によつて上面から溶ける時に、下層に水を通さぬ凍結層が残つているために、上すみ水の行き場がなく、地表はぬかるみと化するのである。このぬかるみの水は、下から吸い上げられた水なので、肥料分を含んでゐる。それが結局流れてしまうので、土地はだん／＼やせて来るはずである。

こゝで排水の問題が再び検討を必要とすることになつて来る。この種の問題の解決には、泥炭の凍結様式の研究とか、熱傳導度と含水量との関係とか、透水度の測定とかいうような実験室内の研究がまず必要である。それと同時に、泥炭地の地中温度および水分の分布と、その季節による変化、特に凍結・融解の際の熱の傳導と水の移動の状態とを、天然の泥炭地について、氣象學的測定と並行して

通年行う必要がある。この実験室内における実験物理学的研究と、天然の泥炭地における地球物理学的測定と、その両者の結果を総合して、はじめて地温上昇に及ぼす排水の影響が科学的に闡明されることになる。泥炭地の排水問題を科学的に解決するには、ちょっと考えただけでも、これだけの順序を踏む必要がある。実際にやってみたら、まだ氣のついていない問題がたくさんできて来るかもしれない。政治的の解決ならば助成金をいくら出すという紙一枚で片がつくが、科学的の方は、世話のやける話である。

再建すべき日本に残されたわずか四つの島で、七千何百万という人間が生きて行く道は、結局科学にたよるほかに方法はない。泥炭地の開発などは、その中でもまっ先に手をつけるべき問題であろう。少しくらい世話がやけても、それくらいは当然のことである。

(春草雜記)

研究

- 一 科学が進歩したために、むだが少なくなり、時と労力とが節約されるようになった例は非常に多い。われ／＼に直接関係ある方面について考えてみよう。
- 二 「ほんとうに困っている問題ならば、研究をすれば、先方が予期するような効果は出ないかもしれないが、やればやっただけの効果は必ずあるものである。」という部分の文脈を

はっきりさせよう。

三 「暗渠を作るとか、客土をするとかいうのは、問題の解決ではなくて、提出なのである。」とはどういうことか。

四 「一冬の間に地表に積もる雪の量を左右することは、実際問題として当分は不可能である。」とはどういうことか。

五 「泥炭地の排水問題を科学的に解決するに

六 次のような題で作文せよ。

- (1) 「泥炭地の物理」を読んで
- (2) 日本の再建と科学
- (3) 科学の効用

は、ちょっと考えただけでも」以下「世話のやける話である。」には、筆者の心持がうかがわれる。この文の終りまで読んで、その心持を推測してみよう。

三 万葉集と現代短歌

こゝには万葉集の中から、代表的な作品を選ぶとともに、明治以後の作品を、「現代短歌」として掲げておいた。比較研究することが望ましい。なお、これらの鑑賞を通して、われ／＼も歌による表現力を身につけ、豊かな人生を送るようにならう。

万葉集以後、和歌は一時衰え、古今集の編集によって、再び隆盛におもむき、勅撰集だけでも二十一を数え、幾多の歌人を続出せしめたが、作歌における態度や、表現の上での理想には大きな変化があり、万葉集時代とは別のものになった。そしてこういう作歌の傾向は、だいたい鎌倉・室町・江戸という長い時代を経て、明治に至るまで続いた。

しかし、明治になって文学に対する新しい考えが生ずるとともに、伝統的な歌壇に対しても、あきたりなく感ずる者が出て来た。歌をほんとうに文学として、再び高めなければならぬと主張する人々が出、西洋の詩論に基礎を求めようとする者もあり、短歌の歴史的考察に立つべきだという者もあって、それ／＼論陣を張り、作品を発表した。そして、

はじめ、万葉をさほど高く評價しなかった人々も、次第に万葉のすぐれていることに気がつくようになり、大正の中ごろからは、万葉集ふうのものが大きな勢力を得た。もとより、鎌倉初期に源実朝、江戸末期に良寛・平賀元義・橘曙覧らのように、個々に万葉集を尊敬した人もなかったわけではないが、その人たちの作品も、実はその時代には認められず、明治以後に、万葉集とともに、正しく評価されるようになったのである。

〔一〕 万葉集抄

近江の國に下りし時、作れる歌

17 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで 道のくま い積
もるまでに つばらにも 見つゝ行かむを しばしくも 見さけむ山を こゝろなく
雲の 隠さふべしや

反 歌

18 三輪山をしかも隠すか雲だにもこゝろあらなむ隠さふべしや

大津皇子ひそかに伊勢に下りて、上り來させる時、
作れる歌

大 泊 皇 女

106 わがせこそを大和へやるとさ夜ふけてあかとき露にわが立ちぬれし

石見の國より妻に別れて上り來る時の歌、ならびに

短歌

柿 本 人 麻 呂

181 石見の海 角の浦回を 浦なしと 人こそ見らめ 濁なしと 人こそ見らめ よしゑ
やし 浦はなくとも よしゑやし 濁はなくとも いさなとり 海べをさして わた
づの 荒磯の上に か青なる 玉藻おきつ藻 朝羽ふる 風こそ寄せめ 夕羽ふる
波こそ來寄せ 波のむた かよりかくより 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の おき
てし來れば この道の 八十隈ごとに よろづたび かへりみすれど いや遠に 里
はさかりぬ いや高に 山も越え來ぬ 夏草の 思ひしなえて しのぶらむ いもが
門見む なびけこの山

反 歌

182 石見のや高角山の木のまよりわが振るそでを妹見つらむか

183 ささの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹おもふ別れ來ぬれば

旋 頭 歌

柿 本 人 麻 呂 歌 集

1291 このをかに草刈るわらはしかな刈りそねありつゝも君が來まさむ御馬草にせむ

羈 旅 の 歌

高 市 黒 人

270 旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほぶね沖にこぐみゆ

三 万 葉 集 と 現 代 短 歌

446 わぎもこが見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき

大伴旅人

貧窮問答の歌一首ならびに短歌

山上憶良

592 風まじり 雨降る夜の 雨まじり 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を

取りつゞしろひ かす湯酒 うちすゝろひて しばふかひ 鼻ひしゝに しかとあ

らぬ ひげかきなでて あれをおきて 人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻

ぶすま 引きかゞふり 布肩ぎぬ ありのことゝ 着そへども 寒き夜すらを わ

れよりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒からむ めこどもは 乞ひて泣くらむ この

時は いかにしつゝか 汝が世は渡る

あめつちは 廣しといへど あがためは 狭くやなりぬる 日月は 明かしといへど

あがためは 照りやたまはぬ 人みなか あれのみやしかる わくらばに 人とはあ

るを 人なみに あれもなれるを 綿もなき 布肩ぎぬの 海松のごと わゝけさが

れる かゞふのみ 肩にうち懸け 伏せいほの 曲げいほのうちに ひた土に わら

解き敷きて 父母は まくらの方に めこどもは 足の方に 囲みひて 憂ひ吟ひ

かまどには けぶりふき立てす こしきには くもの巢かきて いひかしく ことも

忘れて ぬえどりの のどよひをるに いとのきて 短き物を 端切ると いへるが

ごとく しもと取る 里長が声は 寝屋どまで 來立ち呼ばひぬ かくばかり すべ

なきものか よのなかの道

893 世のなかをうしと耻しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

1424 春の野にすみれつみにと來しわれを野をなつかしみ一夜ねにける 山部赤人

1422 うちなびく春きたるらし山のまの遠き木ぬれの咲き行く見れば 尾張連

1447 よのつねに聞くは苦しきよぶこどり声なつかしき時にはなりぬ 大伴坂上郎女

896 陸奥の眞野の草原遠けどもおもかげにして見ゆとふものを 笠女郎

中臣宅守に贈れる歌 狭野茅上娘子

3723 あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし

作者不詳

3314 つぎねふ 山城路を ひと夫の 馬より行くに おのづまし ちちより行けば 見る

ごとに ねのみし泣かゆ そこ思ふに 心し痛し たらちねの 母がかたみと わが

持たる まそみ鏡に おきつひれ 負ひなめ持ちて 馬かへわがせ

反歌

3817 馬買はば妹かちならむよしゑやし石は踏むともあはふたり行かむ

東歌

3452 おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひば生ふるかに
3537 垣越しに麦食むこまのはつゝにあひ見し子らしあやに愛しも

天平勝宝二年三月一日のゆふべ 春のそのの桃李の花を眺 眺して作れる歌

大伴家持

4139 春のそのくれなゐにほふ桃の花した照る道に出で立つをとめ

曉に鳴くきゞしを聞く歌

4149 あしひきの八峯のきゞし鳴きとよむ朝けのかすみ見ればかなしも

他田部子磐前

4407 ひなぐもり碓氷の坂を越えしだに妹がこひしく忘れぬかも

防人の妻

4426 防人に行くはたがせと問ふ人を見るがともしさもの思ひもせず

研究

一 長歌・旋頭歌・短歌の形式について調べよう。

二 反歌とはどういうものか。

三 長歌において、くり返しや対句について調べよう。

四 枕詞・序詞について調べよう。

五 普通の文語法では説明のできない語句を抜き出して研究しよう。

六 憶良の貧窮問答の歌について感想を述べよう。

う。

七 このうち、抒情にすぐれている歌、敘景にすぐれている歌をあげよう。

八 東歌の性質について調べよう。

九 平安時代以後の歌に比べて、万葉時代の歌の特徴を考えよう。

十 源実朝・良寛・平賀元義・橋曙覽らの歌を調べてみよう。

〔二〕 現代短歌

舞姫のかり寝姿ぞうつくしき伏見をくだる春のかはふね

興謝野晶子

春草の雨に小さき笛ぬらしわが詩吹く子もあれなと思ふ日

金子薫園

蒸し暑く閉ぢたるへやのガスの灯に検温器見る夏の夕暮れ

尾上柴舟

春ま晝向かつ山腹に猛る火の火中に生るる色の素紅さ

北原白秋

盛岡もりおかの中学校のバルコンのてすりにも一度われを倚よらしめ

石川 啄たく木ぼく

かひばかむ齒おとの快さ朝まだきの厩うま舎にまづ入るわれは

土岐 善ぜん麿まろ

白鳥はかなしからずや空の青海の青にもそますたゞよふ

若山 牧水

ひまはりは金の油を身にあびてゆらりと高し日の小ささよ

前田 夕暮

松の葉の葉ごとに結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く

正岡 子規

おり立ちてけさの寒さを驚きぬ露しとくと柿かきの落ち葉深く

伊藤 左千夫

落ち葉たきて寒き一夜のあかつきは灰に霜おかむ庭の土白く

長塚 節たかし

信濃路しなのはいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ

島木 赤彦あかひこ

めんどりら砂あびぬたれひとつそりとかみそりときは過ぎすぎ行きにけり

斎藤 茂吉

霜ふれば霜に枯れゆく山の上に濃き紫のりんだうの花

土屋 文明

白じろと経木さなだを編みためてうつゝなきかも草の上のをとめ

釈 迢てう空くう

稻を刈りぬれて帰るにわが妻はかばちやをあつく煮て待ちをれよ

結城 哀草果

上つ代の匂におひこほしみさ丹塗りの大き田ま柱に手を触りてみつ 法隆寺 佐佐木 信綱

研究

- 一 一首ずつ鑑賞して、批評討論をしよう。
- 二 写生的なよみ方をしていゝものと、空想的なよみ方をしていゝものとを分け、いずれに感銘深いものがあるか比較してみよう。
- 三 生活に即した歌を抜き出そう。
- 四 ことばの上の技巧に、注意すべきものがあるれば、それを指摘しよう。

五 明治・大正の短歌の歴史を調べ、その系統関係を表にしよう。

六 万葉時代には、その当時の口語を用いて歌を作ったといわれているが、今日でも現代の口語で歌を作ることが行われているか。文学語・歌語としての現代口語について考えてみよう。

七 正岡子規の歌論「歌よみに與ふる書」につ

いて研究会を開こう。

四 藝術家とその作品

こゝには漱石の作品を通じて漱石の女性觀を考察した論文、近代の外國小説作家とわが國の現代作家との間に見られる一つの差異を考察した書簡体の隨筆的論文、作歌生活についての思い出を書いた隨筆、ある映画監督とその作品との關係を論じた評論、異常な天分に恵まれた作曲家とその作品についての解説を載せた。

これらの五編を読むことによって、作者の個性により、または社会や時代の影響を受けて、作家たちがどんな態度を持つようになり、したがってどのような作品を産み出しているかを知り、作品を正しく理解するには、どんなことが必要であるかについて考えてみよう。こゝには文藝を主とするものが多いが、美術その他、廣く藝術一般について、それらの社会的な意義を考えてみよう。また、自分の心をひいたいろ／＼の藝術作品について思い出すとともに、その作家について、できるだけ調べてみよう。

〔一〕 漱石の作品に現われた女性

岡崎義惠

小説や戯曲に人間の性格が描かれるのは当然のことであるが、漱石は特に意識して性格描写に努力

した形跡が見える。「創作家の態度」という論文の中で、これまでの日本の作品は情操を主とし、忠臣・孝子・貞女・烈婦のような偽善的な人物を書いたが、これからは科学的精神をもって大胆に赤裸な人間の眞相を写さなければならぬと言っている。その方法として、第一に性格の描写や解剖、第二に心理解剖、第三に容易に注意を拂っておかなかつた現象、したがってめつたにないことに新しい材料を求めること、その他人の氣のつかない因果關係、類型を脱した個性を書くことなどをあげている。

この主張にもとづいて多くの長編小説を書いたと見られるので、その主人公たちはいずれも特殊の個性を持った人間として描かれ、その性格の人なみでないような点が細かく解剖されている。それが多くは内面的な深さにまで及んでいるのであるから、心理解剖の精緻という点では、他のいかなる作家をもしのいでいるのである。

漱石は初期の作品ではさまざまに変わった性格を描き分けようとしているのである。まず「吾輩は猫である」の中で、変屈な学者はだの苦沙彌先生を中心とし、迷亭・独仙・寒月・東風という変人を四人も出し、その他いかなる端役といえども一風変わった人物を表わしている。それが「草枕」になると縹渺たる藝術家の活躍になり、「野分」になると烈々たる道徳家の表現になる。「虞美人草」に來て、小野・甲野・宗近という三人物に、詩人・哲学者・外交家という、まるで変わった三様の性格類型を書き分けている。

しかし、これら初期の人物はなお類型的であつた。ところがこのあとで、かの「創作家の態度」を書いて、個性表現を主張するようになり、その後長編写実小説では、全く特異な個性の描写に力を注ぐようになった。特に「彼岸過迄」の須永、「行人」の一郎、「心」の先生に至つて、その筆はさえず

おるようになったと思われぬ。もつとも、これらの主人公は、一面からいうと非常に似通った点があつて、いずれも知識階級特有のハムレットの性格を備えており、それは「三四郎」から「明暗」に至る全作品を貫ぬいているものであるともいえる。「坊っちゃん」の主人公や宗近などのような壯快で闊達な人物は全く脇役にまわってしまったのである。これは晩年に向かうにしたがつて、個性というよりも普遍性を描こうとするようになったことを意味する。すなわち人間の中に巣くう利己心というものも、人間の原罪として摘発しようとする倫理的要求から、いつも個性を通じて普遍的なものに触れようとしたからであらう。

晩年の手記の中には、普遍性だけでも特殊性だけでも完全ではなく、特殊な場合を描いて、普遍的なものを表わすべきであると説いているものがある。それでもやはり、特殊の方に重点があるようではあるが、両者の結合を目ざしているのである。

女性の描写でも同様の趣がある。個性的な女を描いて行くうちに「明暗」などになると、女性の普遍性に触れて来る。「草枕」の那美さんはいふん変わった性格の女である。女で禪をやるなどというのは特殊の場合である。「一夜」の中の女や「虞美人草」の藤尾なども、普通には見られないような天才的女性で、那美さんと通ずるところがある。これは一種の新しい女とも考えられるが、どこかローマン的で、古いものが残っている。「三四郎」の美禰子に至って、極度に知性的な近代女性ができあがり、なぞのような性格の描写に精妙を盡くしている。その後も、「彼岸過迄」の千代子や「行人」のお直や「明暗」のお延など、いずれも多少の近代みを帯びた強い個性を備えた女性である。こういう変わった女を、あとからあとから書き分けて行くこととしたのである。

このような自我の強い、知的、意志的な女に対して、日本の女らしい情緒型の女をも描いている。「虞美人草」の小夜子、「三四郎」のよし子、「それから」の三千代、「門」のお米、「心」の静などがそれである。これは初期の夢幻的小説に出て来るクララとかエレーンとかいうような、純な恋愛をする女の系統である。かれんな内気な女である。ことに三千代とお米とは、他の女と違って、主人公の位置に立ち、作品の主調色をなしている。

漱石の描く女性はいずれも個性は持っているが、それを類型化すれば幾つかに分けられ、それを更に大きく総括すると、新しい型と古い型とに分けられる。新しい型の女はいずれも進んで恋愛を捜したり要求したりする。藤尾は技巧や意力をもって小野の恋を強要する。千代子は情熱により、お延は信念のようなもので愛に向かつて手を延ばす。けれどもいずれも成功しない。那美さんや美禰子は、恋愛の世界から超越したり、それを懐疑的に見たりする。お直に至っては、植えつけられた木のような、女性というものの運命にあきらめをつけて、忍従の中に悟り澄ましている。これらの女性は眞の恋愛のできない不幸な人間である。

それに対し古い型の女は、情緒の柔らかさがあるので、男の愛に殉じて容易にその中に没入し、自我を滅することができる。しかしこれもその愛は悲劇的になって、明かるとい愛の福祉を受けることができない。小夜子なども最後は幸福に終るが、それまでの生活はわびしいものであつた。「難露行」のエレーンは死骸になつて、ランズロットへの文を握つたまゝ、水の上を流れて行く。三千代もおそらく屍体としてでなければ代助の胸にいだかれることを許されないのであろう。愛に殉ずる女の運命もまた悲惨である。

漱石は自身恋愛の体験には乏しかったが、青年時代にいくらか片恋のようなものを味わったことがある。漱石の恋愛に対する考えはあまりに清い夢のようなもので、心霊の感應というか、宗教的な信賴というか、全く精神的なものである。現実的なところも欠けている。現実における男女の關係は、たいていこの恋愛の夢と反対なところに見いだされる。つまりあい結ばれるべきものでないところに成り立った夫婦關係が、現実における男女の結合の状態である。漱石の描く夫婦生活は、眞の愛がないために、仇敵が寄り合つて愛のような形で戦っているか、または夫婦になるために犯した罪惡のために苦難を受けているかである。多くは夫婦の間に愛がなく、眞の理解がないために、地獄のような世界に生きていなければならない。お直とかお住とかいう妻の生活は、この地獄の底に女らしくじつと忍従している者の姿である。

こういう女ばかり描いたとすれば、漱石は全く厭世的であり悲觀的であるといわなければならないが、しかし漱石は女性の世界にも則天去私という光を與えることを忘れなかった。

二

漱石の描いた女性の中には、上にあげたような主人公のほかに、作品の底に潜み、主人公の陰に隠れて動いているような人がいる。この著しい例として「坊っちゃん」の清という女を指摘してみたい。このばあさんは、坊っちゃんの家の中で、特別に坊っちゃんを愛して、その一生を坊っちゃんの守護のためにさげた女である。古いも古い、封建時代の遺物の代表である。そういわれるとあれかと思ひ出す人もあるだろうが、だれもあまり記憶していないようなみすばらしい存在である。しかし、これは漱石が心から尊敬している女のひとりである。

江戸っ子の坊っちゃんがいなかの中学校の先生になって、卑劣な教員や生徒に取り巻かれ、人間社會の醜惡さに憤慨した時、思ひ出すのはばあやのことであつた。「一体中学の先生なんて、どこへ行つてもこんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。おれにはとうていやりきれない。それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない、身分もないばあさんだが、人間としてはすこぶる尊い。今まではおんなに世話になつてべつだんありがたひとは思わなかつたが、こうして、ひとりで遠國へ來てみると、はじめてあの親切がわかる。越後のさゝあめが食いたければ、わざ／＼越後まで買ひに行つて食わしてやつても、食わせるだけの價値は十分ある。清はおれのことを欲がなくて、まっすぐな氣性だといつてほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方がりつぱな人間だ。なんだか清に会いたくなつた。」この感想は作者漱石自身の心持をも十分に表わしていると思う。

「坊っちゃん」の中にはマドンナと呼ばれる美人が出て來るが、漱石自身はこのハイカラ美人を聖母とも觀音とも思つてゐるのではない。東京のおいの家を寄せて、坊っちゃんが家を持つ日を待ちわびてゐる清こそ、「人間」としてはすこぶる尊いものと思つてゐたであらう。男性の側ではやまあらしとあだ名された数学の教師が人間らしいものとして描かれてゐるが、坊っちゃんはこの男から借りた一錢五厘の氷水代を、好意のしるしとしてもらつておくことにきめた。漱石はいろ／＼な作品の中で、借りた金を返さないでおくことを感謝の現われとして取り扱ひ、相手の不誠意を認めると、わざと返却するということを時々書いてゐる。坊っちゃんは清から三回借りてゐるのを返さないでゐる。清も返してもらふことをあてにはしてゐない。ふたりの間には他人がましい義理立てはない。清の心を疑ぐるのは、清の美しい心にはちをつけると同じことになる。心のうちでありがたいと恩に着るの

は、銭金で買える返礼じゃない。無位無官でも一人まえの独立した人間が、頭を下げるのは、百万兩より尊いお礼と思わなければならない。——坊っちゃんはどう思っているのであるが、これが漱石自身の心持であることは、他の諸作に照らしても明らかである。

清が坊っちゃんを愛したいろ／＼の行爲は、この作に欠けている女性的な愛の一面を補って、この作をたゞ壯快なだけのものではなく「あわれ」を催させるものにもしている。

坊っちゃんがいなかへ立とうとして清に会いに行き、北向きの三疊にかせをひいて寝ている清を慰める場面、出立の時、いつまでも立って汽車を見送る清のたいへん小さな姿、いなかへよこす清の手紙、みな「あわれ」である。最後に坊っちゃんは赤シャツ一党に天誅を加えて東京へ引き上げて來たが、心中のさびしさはさすがに想像されるのであった。坊っちゃんは下宿へも行かず、皮かばんをさげたまゝ、「清や、帰ったよ。」と飛びこんだ。清はぼた／＼涙を落し、坊っちゃんは東京で清とうちを持つことにきめた。その後二十五円の月給にありついた坊っちゃんは六田の家を借り、清はかねて希望のような玄関つきの家でなくても、しごく満足の様子だったが、氣の毒にも肺炎でなくなった。「坊っちゃんの寺へ埋めてください。」というのが遺言であった。「だから清の墓は小日向の養源寺にある。」というのがこの作の最後を結ぶことばである。

私はこの結末を読んで涙のさしぐむのを禁じえない。三千代の愛、エレインの恋をもつてしても、漱石は私を泣かせることができない。鷗外の「舞姫」「雁」「山椒大夫」などは読むたびに私を泣かせるが、漱石に泣いた記憶は、今のところこの「坊っちゃん」の結末だけである。漱石がどのように愛というものを高く評價し、またそれに憧憬したにしても、真にわれ／＼の心臓をつかむような人間や

場面や事件を創作しえなかつたことを私は感じてゐる。この清だけは例外である。

またこの結末が與える無限のさびしさというものは、「思い出す事など」における死を前にした生の寂寥と匹敵するものである。持ちまえの江戸っ子かたぎを發揮して、一直線に佞奸の徒と戦つた坊っちゃんが、心の友やまあらしと別れてひとり東京に帰つた時、勝利の悲哀に似たものを感ぜなかつたであろうか。われ／＼はまたこの時、いかなる戦いをもつても戦い盡くせない社会の不正、人間の利己心がお坊っちゃんの周囲に満ちてゐることを感じ、ぬぐい去ることのできないさびしさをおぼえないであろうか。この悲しみとさびしさを、母の慈愛によつて慰めてくれる人は、たゞこの清ひとりであつた。しかもこの老女性も身をもつて守り通した主人の、十分な成功の日を待ちえずして死んでしまつたのである。せめて未來で坊っちゃんに会う日を待っている清の家は、一基の墓標に過ぎなかつた。この清の墓は象徴的意義がある。漱石は死がいかなる生の瞬間よりも幸福であると言つてゐるが、それはこのような意味においてであると解することもできる。

三

漱石は恋愛をする女、愛を獲ようと奮闘する女、愛しえない女など、すいぶんいろ／＼な女を描いたが、愛というもののさびしい勝利、あるいはその完全な福祉を表現した例はそう多くない。清はその中では著しいものである。しかし、これが漱石の究極の理想であつたかという点、必ずしもそう断言することはできない。第一、清は、あまりに封建的な古い女で、主従という觀念の外に出て、人間の自由な愛に生きるということのできそうにない女である。このことは坊っちゃん自身にも氣がついていて、清がおいにまで坊っちゃんを崇拜させようとしているのを、「おいこそいつらの皮だ。」と

言っている。

もう一ついけないことは、清の愛に私があるということである。清が坊っちゃんを愛するのは偏愛であって、他の人を愛することを忘れていたのである。坊っちゃんのまっすぐな氣性をほめるのはよいとして、その欠点までも長所にしてしまうところがある。「自分の力でおれを製造して誇つて。」と、当の坊っちゃんさえ感じて、「少々氣味が悪かった。」と言っている。父や兄のいない時に限って物をくれるのも、坊っちゃんにはいやなことであり、「不公平」と感ぜざるをえなかったのである。漱石はこの偏愛を絶対にしりぞけた。それを和辻哲郎氏に漱石が言ったことはとして、「親の愛が平等でありえないくらいなら、むしろ平等に愛しない方がいい。」ということも傳えられている。「心」の中には、「女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切をうれしがる性質が、男よりも強いように思われます……。」という語がある。これは愛される場合であるが、女の愛は私の愛であることを指摘しているのである。母性愛というものの特徴の一面もここにあらわななかるうか。

漱石の最後にたどりついた則天去私の理想は、何よりも公平ということを尊ぶのである。清のような愛は、たゞ自身だけを愛する利己主義に比すると、没我的な尊さを含むが、ふたりだけの間の愛という点で、やはり私の延長である。三人を愛し、四人を愛し、家を愛し、國を愛するところまで行ってもやはりこの私の拡充である。利己心が大きくなっただけに、ます／＼悪いとも考えられないことはない。これを最大限に廣めて人類への愛としてみても、人類以外のものが残る。人道主義はまだ中途半端のものであるとも言える。絶対に廣くなった愛は、宇宙にまで及ぶであらう。けれども宇宙と

いうものを立てる以上、宇宙以外のもの、つまり無とでもいふべきものが残る。これをしも包攝する愛は、もはや無そのものである。漱石はそこまで考えるようになったと思う。

清の愛では漱石の理想にならないとすれば、どのような女がそれに当たりうるであらうか。「草枕」の那美さんや「一夜」の女のような、恋愛を経て、それから超越するような女も初期の作に出て来るが、技巧が多くてためである。「虞美人草」の糸子や、「彼岸過迄」の作という小間使なども、たゞ可もなく不可もないというだけで、まだ十分でない。しかし、これらの女性は愛にとらわれない純粹さがあり、たゞ信に生きる女として、や、理想に近い。それが「明暗」の清子になって、はつきり理想的になる。清子は清の書きなおしのような形で、主人公の津田を救うために出て来るようである。

清子もまたはじめ津田を愛し、また信じていた。自分の未來を津田にかけた。津田に何かを聞こうとする時、その目は「動いても靜」かであった。「信と平和の輝き」があった。この愛は三千代に似ている。けれども清子はどう思つてか、津田を離れて関という夫を持った。津田はお延を妻とし、お延が愛を得るために戦いをいどんで来るのに悩まされている。清子はお延と反対の女である。偏愛の具体化のようなお延と違って、戦いをもって愛を獲得しようなどは夢にも思わない。淡泊な自然のままの性格で、童心に似た素朴さを持つている。津田が清子に再会して昔の愛の復活を求めつゝ、迫るが、清子はむしろ超然としている。

清子が三千代のようなないたましい運命に陥るとは思われない。清のような偏愛の中に迷いこむとも思われない。清子はどのやうな方法によつて津田を則天去私の世界に導くか、それははたして昔日の信に近いものであらうか、それを愛と言いうるであらうか。清子はたゞ微笑しているというだけで、

「明暗」は中絶している。漱石から最高の教訓を受けようとする女性は、たゞこの清子を研究すべきである。まだ書かれていない清子を考へるべきである。(漱石と微笑)

研究

- 一 「類型を描く」「個性を描く」「普遍性を描く」とはどういうことか。
- 二 「個性を通じて普遍的なものに触れる。」とはどういうことか。
- 三 「どこかローマン的で、古いものが残っている。」とはどういうことか。
- 四 「天才的女性」「知性的な近代女性」「自我の強い、知的、意志的な女」とか、「日本の女らしい情緒型の女」とはどういうことか。
- 五 世上の夫婦関係に対して漱石はどう考えていたか。そういう夫婦関係はこれからの日本においてはいかに改善して行かなければならないか。
- 六 「坊っちゃん」に見える「女性的なもの」「あわれ」とはどんな感じか。
- 七 「人間の自由な愛」とはどういうことか。
- 八 「私の愛」とはどういうことか。
- 九 眞の母性愛はどういうものでなければならぬか。
- 十 「信に生きる。」とはどういうことか。
- 十一 則天去私の世界とはどういうことか。漱石の文学論について論じたものによって調べよう。
- 十二 「坊っちゃん」を読んで、みんなでその主題、組み立て、表現について話しあおう。また、この作中の坊っちゃんの態度で賛成できるものと不賛成なものとのあげ、みんなで話しあおう。
- 十三 漱石の作品をどれか一つ読んで、その中の女性について感想文を書こう。

十四 鷗外の作品と、漱石の作品とを読み比べ

てみよう。

〔二〕小説と「人間」

生島 遼 一

K君――

この前お会いした時、小説中の人間の書き方の問題について考えておけという御注文でしたね。あなたのお説では、日本の近ごろの小説では、人物の描き方が「風景描写のようにところどころに点綴して」ある感じで、ばらばらで、大きくまとまっていない、――私もそれに同感して、そういう不満を少々語りあいました。その後、実をいうと、あの時口から出まかせにしゃべったこと以外に、たいしたこと考えてはいません。小説の議論もたいいろいろなことが言われて、出盡くしたような気がします。一体、日本ほど小説論をやかましくいう所もないのじゃありませんか。月々の雑誌にいつも一つくらいそんな題目のものが掲げられている。先日、子供のゴムまり野球を見ていたら、打者が犠牲バンドをしたのがアウトかどうかといったことで、二十分も論争していた。その間プレーは中止です。そのあとも、走者が出るたびに、セーフ、アウトとやかましいこと。遊んでいるのかけんかが目的だかわからない。おとなのしかたをそのまままねているのでしょがね。小説論をあまりやかましくいうのも、この少年野球のような感じがします。暑いおりだし、改まっていうのもおつくうだから、ぞんざいな書き方だ思っていることだけ言わせていたゞきたい。

十四、五年前に、マルローをこのごろ訳している小松清君に、はじめてフランスから帰られた当時会ったことがあります。その時同君が、マルローはギリシア悲劇の人物のような人間を考へている、

そういうことを言っていました。古いことで、マルローだったかほかの現代作家のことだったかろう覚えですが、あの人だからたぶんマルローでしょう。そのことは記憶しています。現代の欧州小説家がみなギリシア悲劇や叙事詩の人物を心に描いているとは保証しませんが、何かわれ／＼の見慣れた小説人物よりも少し大形の雄壯な人間を念頭に持っているような感じはします。少なくとも、あゝ、いう普遍的な人間を考えた古典文学を背後に控えている意識は、そういうものをはっきり持たぬ日本人の場合とやはり違うのではないかと感じます。ギリシア・ローマは古い。が、御承知のように、古代文学の精神を復活させようと懸命だった時期は、その後何度もあります。近いところで十七世紀の古典主義——あの当時の古典派の人たちは、ギリシア・ラテンの古代文学がなせ理想的であるか、それは普遍的、一般的な人間を描いたから、千年、二千年もあらゆる國民に訴える力を持っている、そういう文学こそ模倣すべきである、と主張していた。十七世紀文学は普遍的な人間の文学である、といったことは、文学史の言い方をそのまゝわれ／＼はいつも受け賣りしているのだが、これはむずかしいことだし、なか／＼重要なことだと思えます。古典主義には反動も起つたし、現代の作家がみな古典派理論の信奉者でもありませんが、「人間一般」といった考えでは、あちらの文学者にやはりこういう血脈が傳わっているように思います。古典文学といっても十七世紀は二、三百年前で、そんなに「古」でもないのです。

日本では文学でも人間観でも、その他のことでも、普遍化・一般化に向かうより、いつも特殊、特殊と向かう求心力のようなものが支配します。よその國にもあるもの、あらゆる時代に通じるものを求めるより、この國のある場所、一つの時代にと限定された方向に——。國情がそうするのですが、藝

術の仕事をする人はこういう特殊にのみ向かう意識を一應警戒しなければならぬのではないのでしょうか。一般と特殊のバランスが破れることは、藝術のために致命的です。文学の國際性などということより、藝術の本質そのものから必ず一般性が要求されるという意味です。老人がひょうたんをたねねんにみがついていても藝術品にはならないでしょうから。こういう意味のことは、例のフロベールの手紙を見ますと、方々に、たいへん興味深く説かれているのです。写真主義時代には、一般的なものより事物の特殊相を描くということになった。フロベール自身も、路傍の小石や樹木の一つ／＼に個性を見いだして描写しろと言ったという話が、われ／＼に傳えられている。であります、そのフロベールが、やはり、個性描写一方に進んで一般的なものを忘れてはいけない、骨董趣味に陥るなど、たびたび警戒しているのを、なか／＼おもしろいと思えます。「ボヴァリー夫人」の中でナブキン・リンドを作っている收税吏などは、藝術家に似て非なるものの戯画なんでしょう。日本でも自然主義時代にはやはり特殊相を描くことが大いに唱導され、人間を描くにも個性的なものを書けと言ひ、類型化を排斥したのですが、これは確かにレアリズムだが、しかし特殊と一般のバランスを破ってしまつた傾きがあります。

ギリシア悲劇のことを言つたついでに思い出しましたが、小説の主人公のことを *hero* という、つまり英雄ですね。悲劇や叙事詩に現われる悲壯な、大きな型の人間タイプですね。西洋では、現代小説でも主人公というものはやはり *hero* である、そういうふうな考えられていると私は思います。普通人より一まわりも二まわりも大きな人間です。主人公を書くには副人物を書くのとすつかり違った意味があり、操作が行われている。モリアックの「小説家とその人物」という小冊子など、そういう

書き方の相違を説いているもので、あれはモリアックひとりの小説観であるだろうが、とにかく、あ
あいう小説人物の考え方は西洋小説家に共通なものだろうと思う。こういう意味では、日本の小説で
はとかく主人公も副人物なみに、同じ大きさ、同じ次元に描かれている印象を受けます。人間が風景
描写のように描かれているというあなたの感想も、このへんに関係するのではありますまいか。

この前お会いした時は、ちょうど秋声の「縮図」を読んだあとでした。あの小説の評判をいろ／＼
聞いて、遅ればせに読んだのですが、何はともあれ、こういう小説が好評である限り、自然主義小説
の引いている水脈もまだ当分絶えないという気がしました。秋声は、「足跡」「あらくれ」(またこの
「縮図」)その他で、女の一生のようなものを書こうと努力した小説家だと思います。しかし、この人
のような書き方では、結局、人間生活のミニマムのようなものしか書けないと思います。人間のいる
環境が細密に描いてある。日常の起臥の様子が反覆して書いてある。そういう中に人間の生命がばら
ばらになつてゐる。舞台のあちこちに並べた小道具みたいなものあいまから時々ぞく人間の姿を
目で追つて行かねばならない。多くの出入りする人物の間に遠近法的処理が欠けていて、主人公の動
きがつまらぬ詳細のために消されている——すべて、自然主義の平面描写手法のなごりと思われ
ない。こういうふうには、人間生命を一貫させず、寸断し分解することに眞実があるようにとるのは偏し
ています。それに、特殊の職業人が出て来るのはいいが、もつとその職業の性格的なものがとらえて
なければ、その人間の日常動作がいくらたくさん書いてあつても、小説人物としての役目をしていな
いのです。バルザックなんか、すいぶん特殊な職業人を書いたが、それ／＼典型的なものを書いてい
るでしょう。正宗白鳥氏が秋声の書き方を「事實に即し過ぎてゐる。」と評したことがあつたが、事

実に即するというのは、現実意識が強いというふうにもとれるが、そうではなくて、作者の経験や人
物の日常動作をあまり選択せずに無造作に書いてあることを意味している。もつと人間生活を作者の
意識で濾過して書かなければいけないと私は考えます。なお白鳥氏は、秋声の作品では「足跡」など
が一番いいという説らしいが、なるほどあれなんか秋声的手法——日本の自然派手法の極致のような
ものでしょうが、私はあゝ、いう小説は結局人間を殺しているのではないかと疑問を持ちます。

自然派以来、外面的な描写でとにかく小説の骨格をこしらえる、そういう小説の造型性のごときも
のが一般に過信されている。そういう描写で固めてあれば一應手堅く見える。心理を書くことなど少
しずつとすぐ目立ち、マンネリズムを指摘されやすいが、日常生活や風景描写のマンネリズムは目
立たない。やはり日本人は景色を書いたりする方がうまいのでしょうか、読む方でもそういう文章に
は寛大なのでしょう。西洋人は反対のようです。外面描写のごた／＼したのやマンネリズムはすぐ目
につくらしい。「足跡」「あらくれ」や今度の「縮図」にも、そういう意味で、日本人の目には目立たない
がマンネリズムといえる箇所はすいぶんあると、私は思います。日常的な記事で同じような反覆記述
や文章が相当多いのです。こういう作品から感じさせられる人生とか人間とかいったものは四、五十
枚に圧縮できる、それ以上はむだだと思つていますが、そういう考えは作家から笑われるでしょうか。
秋声論のつもりでは決してないのですが、こういう小説の書き方だと、作者が人間について知つて
いる限度だけ守つて、それ以上に踏み出すまいという意識が強過ぎるんじゃないか。作者の意識が多
少あいまいな人間というもの、その未知の領域に一步踏みこんで行く、そういう冒険心が少しも感じ
られないでしょう。(これもすでにいわれたことでしょうが。)これ以上書けば通俗小説流のこさえも

のなるといった否定意識のみ強く感じさせる小説です。通俗小説に陥るまい、そういった危懼が、日本の現代小説家には一般に強過ぎるのでしよう。あまり理屈っぽい小説論が横行するせいかもしれない。小説はつくりごと、といった氣持をもつと大胆に持ってもいいと思いますが。

これも先日、「白痴」の佛訳本を読んだのですが、その序文をメルキオル・ド・ヴォギエが書いている。御承知のように「ロシア小説」の著者で、ロシア文学をフランスへ早く紹介したひとりです。しかし、かれはフランス人らしくドストイエフスキーばかりはほとんど理解できなかったので、この序文にもかなりおかしいことが書いてある。その中に、「白痴」はすいぶん妙な小説だが、これはエジエヌ・シエーの小説手法をつくりとり入れていたようなことを言っています。シエーは「バリの祕密」の有名な通俗小説家です。「レミゼラブル」もその模倣だといわれている。ヴォギエの言うことをそのまま承認しないでもいいが、ドストイエフスキーがそういう通俗小説的アンツックの小説の組み立てなどは確かにまねたに違いない。これを逆にいうと、ドストイエフスキーは通俗小説の技巧のようなものでも恐れず駆使していたわけです。日本では通俗小説の手法というと頭から軽蔑されるが、人物を大きく動かすためには、そういう手段だって軽蔑しないので、バルザックやドストイエフスキーを抹殺するならとにかく、そういうものに感心するなら、少しこのへんのことを考えてもいいでしょう。余談ながら、日本で興味本位の動きの多い小説が軽蔑されるのは、そういう種類の作品がうまくないということもあると思う。レニエの小説などで、組み立ての実に緻密な、うまくできた小説など読むと、そういう氣がしてならない。

自然主義派の人々が漱石の小説を高等学校生のおとぎばなしだと言っていたのをわれ／＼は知っています。しかし、私は自分がそういう学校教師を長年していたからひいきするんじゃないが、高等学校生の趣味をそう軽蔑すべきではありませんよ。あ、いう若い連中が好んで外国小説を読む、これも確かに年齢相應のおとぎばなしがほしい意味はあるでしょうが、文学においておとぎばなしの要素は軽蔑すべきではありませんまい。私なんか、お恥すかしいが、長年文学に親しんでも、いっそうそういう氣持がなくならずに文学を読んでいるひとりです。子供の時夢中だった読書、あの氣持が一脈続いていて、それを満足させるのが外国小説だとすると、やはりおとぎばなし読者の興党かと思つています。外国小説ばかり読まず、日本の小説も、そういう若い人たちは読んでいますが、とにかく、この東西二つの文学にはっきり差異を感じていることがわかります。そういう人たちに話しかけられる文学談も、二つの違った文学の性質を若い頭脳でどう統合するか、その問題が常なのです。

小説というものをと大胆に、西洋流に、つくりごとと考えていいのじゃないかと思つています。人間の書き方も変わると思つています。多少通俗小説流になるかもしれないが、そういうところから出なおすのもいいでしょう。「足跡」や「縮図」流儀に考えると、バルザックでもスタンダールでもドストイエフスキーでも、「こしらへごと」が多過ぎて甘いでしょう。現に今小説を書いている私くらいの年配の作家が、一体バルザックとかスタンダールなんて原文でもあんなものですか、どうもまずい、と言つていた人がありました。

つくりごとといえは、外国小説の人物などたいていこしらへたことばでしゃべつてゐる。写實的といわれる近代小説でも、あれで決してふだんのまゝしゃべつていませんね。われ／＼日本の小説を見

ると、現実でありそうなこととそうでないことが一瞥で区別できるので、これはこしらえごとだという。が、西洋小説だと少しおかしいことが書いてあっても、西洋人はこうなんだろうくらいで大目に見る。すなおに読みます。だが西洋人だって日常生活動作はあんなものでは決してないはずのことばだってそうだ。「ボヴァリー夫人」をこらんなさい。あの中の会話には芝居でやるようなせりふがすいぶんあります。藥劑師など、モリエールの舞台でしか見られない人物です。同じ作者の「感情教育」の主人公は最も平凡な自然主義的人物で、どうしてあんな感興をひかぬ人間を描いたかと当時非難され、フロベール自身もこの小説が藝術的に平板であり過ぎたことを認めているほどですが、あの主人公ですら、相当異常の人物です。やはり一つの Hero でしょう。こういうふうで、西洋小説の主人公というものは、普通の生活人より大きく考えられていて、全体の遠近法を支配している中心になっている。こゝに小説の祕密があると思われます。はじめに言った古代文学の血脈をひいているのかどうか考えてみるべきでしょうが。

最後に一つ、日本の文学と私生活の關係のことです。私生活のことを書いたって悪いとは言わないが、どうもわれわれは他人の私生活に関心を持ち過ぎるようですね。文藝雑誌にもたいていそういう記事が一つ二つはある。もう少し人間に対する興味が一般的な、普遍的なものになった方がいい。作家の私生活の日記のようなものも、そこに何か思想的な内容があるとか、公的な性質を持つものならいいのですが、どんなさかなを食ったとか、だれが尋ねて来たといった記事の日記を、れいれいしく文学雑誌に掲げるのは、世界に例のないことと思います。そういうことにわれわれが興味を持つとしても、それはその人の死後に、好事家のせんさくに任しておけばいいので、生きている間から発表する

ことではありますまい。個人のゴシップ種類似のことを小説として発表する習慣も以前にはよくあったことで、自然主義派ばかりでなく、その反対の立場の人までそういうものを書いた。それが現代小説集という本にちゃんと収まっています。こういうものを小説と呼ぶ習慣をやめたいものです。

以前から私は言っているのですが、小説とエッセイふうの作品をはっきり分けてほしいと思う。小説とかロマンという呼び方は歴史的にあいまいなもので、したがってあいまいなものを小説と称していても、原理的には悪くないのですが、実際の見地からそれを分けるといい。日常身辺記事ふうのものは、多少潤色がしてあっても、すべてこれをエッセイと称するのがいいのです。発表する時もそうしてほしいのです。随筆とかエッセイという小説より待遇が悪いのなら、一つそれを逆にしたらどうでしょう。エッセイ作家を誌上で大いに優遇して、巻頭に載せるなり、わくをつけるなり（愚劣な趣味ですが）すればいいでしょう。小説などは二段組みでもよろしい。私のところにある古い N・R・F を見ますと、ジッドの小説や、アラン・フルニエの「グランモーヌ」など、当時評判だった小説がみな、日本でいえば大号活字のようなので小さく組んで載せてありますよ。もつと分量も多い。これでもおもしろければ読みます。小説を書きたい人は書くでしょう。まずこういうふうにはジャナルの別を明らかにした上、日本の小説といわれる文学は新聞の連載のもののような作品ばかりで、あとはすぐれたものは随筆・エッセイの類のみである、ということになれば、それらはつきりしていると思いますが、いかが。

(雑誌「人間」)

- 一 日本の小説では、人間が風景描写のように描かれているということは、どのようなことをいっているのか。自分の読んだ小説について、そのことを考えてみよう。
- 二 現代のヨーロッパの小説家は、「何かわれわれの見慣れた小説人物よりも少し大形の雄大な人間を念頭に持っているような感じ」がするという。みんなの読んだことのある小説についてこのことを考えてみよう。
- 三 西洋文学に共通する「人間一般」という考へとは、どのような事実をさしているのか。
- 四 日本では、文学でも人間観でも、その他のことでも、いつも特殊へと向かう求心力のよくなものが支配しているという。具体的にはどのようなことをいうのか。
- 五 「一般と特殊のバランスが破れることは、藝術のために致命的である。」ということの意味について考えてみよう。
- 六 「西洋では、現代小説でも主人公というも

のはやはり hero である。」ということの意味について考えよう。

- 七 「多くの出入りする人物の間に遠近法的処理が欠けている。」とか、「主人公の動きがつまらぬ詳細のために消されている。」とかいうことばを、実際の作品について考えてみよう。
- 八 「その職業の性格的なものがとらえてなければ、その人間の日常動作がいくらたくさん書いてあっても、小説人物としての役目をしていないのです。」ということばを、実際の作品について考えてみよう。
- 九 「人間生活を作者の意識で濾過して書かなければいけない。」とは、どういうことか。
- 十 「小説の造型性」ということについて考えてみよう。
- 十一 「通俗小説」とは何か。これに対する小説は何か。
- 十二 秋声の作品と漱石の作品とを読んで、両者の違いを考えてみよう。前課の漱石論とこ

十六 小説とエッセイとの違いは何か。それぞ

れの作者で特にもしろいと思つたものについて感想をまとめよう。

十七 この文章で筆者の言おうとしていることを簡単にまとめてみよう。

十八 この中に出て来る文学作品・文学思潮について調べてみよう。

こに見える漱石論とを比較してみよう。

十三 西洋の小説と日本の小説とで、特に著しい相違点は何か。

十四 小説における「つくりごと」の意義を考へてみよう。

十五 日本の文学と私生活との関係について、考へてみよう。

〔三〕 作歌けいこの思い出

斎藤 茂 吉

歌を作りはじめてから、もうだいたいふ年がたった。それにこのごろ、すっかり歌ができなくなつて、その情氣を破ろうとする心のきおいも薄らいでしまつてゐる。ぼくの今滞在している所は、佐賀縣の山中の温泉場である。そこで毎日沈黙していると、過去のことなどは、そう顧慮しないでも済む。そこへ東京の友の尾山篤二郎君から、何か思い出すことがあるなら書いてみないかと言つて來た。そう言われてみると、なるほど思い出すことがないでもない。夜の川べに來れば、流れるような月光が川の水上を照らしている。こおろぎの声も消え入るようだ。友のことばが縁になつて、ぼくが歌を習いはじめたころのことが、糸のように細々と意識の上に浮かんで來た。その一つ二つを、こゝに書こうというのだ。

ぼくが、正岡子規の「竹の里歌」という歌集をはじめて読んでひどく感動して、一つ歌を作り習つ

てやろうと思ひ立つたのであるが、ぼくは子規の晩年の歌の妙味は当時わからなかつた。その当時はかりでなく、だいぶあとまでわからなかつた。たとえば、

はんの木にからす芽をかむころなれや雲山をいでて人烟を打つ

明治三十一年作

人みな箱根伊香保と遊ぶ日をいほにこもりてはへ殺すわれは

明治三十一年作

岡の上に黒き人立ち天のがは敵の陣屋に傾くところ

明治三十二年作

こういう歌はぼくにすぐわかつた。わかつたばかりでなく、ぼくの氣性に合つたせいも、模倣することができた。この「模倣」ということは、当時のぼくにはたいせつなことだったので、模倣しようとして非常に努力して、いろ／＼の方法を採つたものである。今の少年がぼくの歌をらく／＼と模倣するというような、そういう容易なことはぼくにはできなかった。けれども、これらの歌の模倣はできた。しかるに、

龍岡に家居る人はほと／＼ぎす聞きつといふにわれは聞かぬに

明治三十四年作

くれなゐの梅散るなべにふるさどにつくし摘みにし春し思ほゆ

明治三十五年作

色深き葉廣がしはの葉を廣みもちひぞつゝむいにしへゆ今に

明治三十四年作

赤羽の堤におふるつく／＼しのびにけらしも摘む人なしに

明治三十五年作

こういう歌になると、どこに妙味があるのかわからなかつた。妙味がわからないから模倣しようとしてもしなかつたのである。そこで当時手抄しておいた帳面を見ると、晩年の歌は除いてある。これらの小事の思ひ出も、ぼくには興味があるので、子規の初期の歌は、俳句から悟入した一種の見方と技法とがあつて、見方が細かく、洒脱しやうたつで小氣せうきがきいて、びり／＼と刺激するようにできている。それが徳川

晩期の歌人、たとえば曙あけぼのとか言道ごんごとかの作に散見するような一種のいやみ、こしゃくみを持つていない、一種の洒脱みなのである。子規という人は、結核症でなくなつただけであつて、あの若さでも、それからあゝいう周囲の文壇を持つていても、よく「いやみ」のいかんのわかつた人である。けれども、初期の作には、いわゆる俳諧趣味がまつわつていた。ぼくの好いたのは、つまりその趣味であるらしい。ところが晩年の作になると、歌がらがもつと大きくなって、もつと單純になつて、小氣味とつやがとれて行つて、一種蒼古そうこのにおいのあるものがある。そういうのをぼくはわからなかつたのである。

こんなぼくの歌がある。

月落ちてさ夜ほの暗くいまだかも彌勒みらくはいでず虫鳴けるかも

明治四十年作

月がもう落ちて、夜が暗い。そして彌勒の出現もまだである。その夜の暗がりに虫がしきりに鳴いている趣で、これは傳説や書物にはない。ぼくが虫を聞いているうちに、勝手にそんな氣がしたのである。

この歌は、空想的で写生的ではない。そしてこういう空想的の歌は、ぼくの初期の歌の一つの特徴をしていて、実はこういうものはいくらでもできたのである。それゆゑ、某々氏らの天分豊かな空想歌などは、ちつとも響かないばかりでなく、見え透いた空想の技巧がいかに薄に響いてしかたがなかつたものである。そこで空想の歌というものは、どんなに奇抜でも、どんなに豊富でも、つまりはだめだと思つて、だん／＼遠ざかろうと努めたのである。今の少年のかた／＼から見たら、こんな見やすい道理がなせわからなかつたらうと不思議がるかもしれないが、今の人々が容易に理解しうる

のは、それは時運のたまもので、多くの歌人が苦しみもがいたあげくの、幾多の犠牲を拂った後に、今のよな時代を作ってくれたのである。ぼくが自分の空想歌のためなことに氣づいたのは、自然派の作物論議からでなく、子規の作歌の経路からの影響である。そしてそのためなことを最も痛切に感じて、悲しみ、はがゆく思ったのは、「赤光」を編集している時である。

ぼくが近ごろ「写生」のことをうんぬんしている。しかし多くの歌人はそれに同情を有しないことである。そして写生のことなどはとうの昔に卒業してしまつたときおもちであるが、ぼくのよくないろく／＼な欠点を持っている者が、その経路において、写生のことを痛切に思うことを、世の歌を学ぶ少年少女は軽々に看過しないがいい。

ぼくは「万葉調」ということをだいたいおぼしげ／＼言つた。言つたのみでなく、万葉集の歌調をまねた。この模倣がなか／＼容易にはできない。実をいえば、万葉集を読んでも、どのことばを採つていいか、どの調子を採つていいかわからないものである。そこで試みに子規の歌とか根岸派の先輩の歌とかを見ると、うまいぐあいに万葉集のことばなり調子なりを採つてある。そうするとはじめて、なるほどこうして採用するのであるというがてんが行く。このようにして根岸派の歌から模倣して、それから眞淵・実朝、しまいに万葉集というぐあに行つたのである。しかし、今までこんなことはだれも正直に告白しないで、すぐ万葉集から出発したようなおもちでいる者もないとも限らぬが、昔の不便な時代ならありうるが、今の歌集発行・雑誌発行の便利な世の中では、ぼくのような経路を取つて、万葉調を模した者の方が多くはあるまいか。元氣のいい少年諸君の前に、ちよつとこのことをも言つておこう。

(童牛漫語)

研究

- 一 子規の歌の「酒脱み」「俳諧趣味」をその歌について研究してみよう。
- 二 子規の歌の「歌がらがもつと大きくなって、もつと單純になつて、小氣味とつやがとれて行つて、一種蒼古のおいのあるもの」というのはどういふ歌か、その歌について研究してみよう。
- 三 茂吉の「空想的」な歌とはどういふ歌か。その歌について研究してみよう。
- 四 茂吉の「写生」について研究してみよう。
- 五 「万葉調」ということを研究してみよう。
- 六 作歌における「模倣」の意義について研究してみよう。
- 七 「時運のたまもの」ということを他のいろんなことがらについて考えてみよう。
- 八 昔の「不便な時代」で、先人がなした苦勞を他のことがらについても考えてみよう。

〔四〕 伊丹万作論

北川冬彦

一 伊丹万作の思想

伊丹万作は、「私は本質的には熱心なる平和主義者である。」と言つているが、確かにそうだ。伊丹万作に「武道大鑑」といふ作品がある。筋立ての詳細は忘れてしまつているが、ある小藩に對して、島津公がその城を見て「握りつぶせそうだ。」と口走つたのに對し、その藩ではいきりたち、あわや一戦に及ぼうとする時、小藩の方に一武士あつて、その肚と機知とによつて、その戦いは起らず終る

という話である。また、「赤西蠣太」はその結果でめでたしめでたしとなるが、それはハッピーエンドとしたという類のものでなく、それは演出者伊丹万作の願望としてそうなされたものと受け取れるのである。このようなことは、伊丹万作の作品によって、幾つも立証されることに違いない。

伊丹万作は、昭和九年九月一日号の「キネマ旬報」の伊丹万作座談会の中で、「ぼくは良心からいって、醜悪なものは避けます。たとえばストロハイムという人が、犬の死骸が流れているところをどうしてもほしいと言って撮ったというのを聞きました。ぼくは犬の死骸を流そうとは思わないのです。一匹の犬を殺さなければならぬというのは、ぼくにはちょっと困る。どうしても殺さなければならぬということは困ります。『ベン・ハー』の時に、ゴシップでデマかかれませんでした。戦車の競争のところで死傷者があつたというようなことがぼくの耳にはいつているのです。あの映画を見てみると、なるほど出そうです。あゝいう撮影なら出たのはうそじゃないと思う。そうすると、その瞬間から写真を見るのはいやになるのです。たかが一夕の敏をあがなうためのあの程度の娯楽映画を作るために、死傷者を出すことはないと思うのです。」と言っているが、このことはをもつても、伊丹万作が心の暖かいヒューマニストであつたことがわかるだろうと思う。

この伊丹万作の微温的なヒューマニズムには、おそらく不満を覚える向きもあるであろう。私もそのひとりであるけれど、現在の日本人にとって伊丹万作の作品ほど、人々の慰めとなるに好適の作品は他にあるとは思えない。いかにもびつたりと来る作品である。それに、伊丹万作には諷刺の目がある。機知がある。今の日本の社会現実には、その目と頭とをきかせるべき事象が充満しているのだから、なおさらである。もう取り返しはつかないけれど、ほんとに惜しい人を失つたものである。

昭和八年四月号の「中央公論」に、私は「日本映画のにない手」という小論を書いたが、その中で伊丹万作を次のように書いた。

「伊丹万作は、日本映画の監督の中で、たゞひとりの物を考える人だ。物を考えるとは、時に鋭い映画論の片鱗を諸雑誌に示すことではない。伊丹万作が映画で物を考えることをいうのである。伊丹万作こそは、映画を作るとは、画面や字幕を通して作者の思想を伝えることだと、はっきり自覚している人だ。伊丹万作は、一作一作と主人公にいろ／＼な性格を與え、その性格と生活環境とがつくり出す相剋図を描くことにより、自我の追究を旨ざしている。

ある感想文で、すさまじい猛獣映画の魅力は事実のそれだが、しかし、自分たちのつくる映画は人為的に作ったものの魅力だ、だから猛獣映画ほど藝術映画が人々をひきつけないのは当然である、といった意味のことを書いている。自らを知り、自らを守る者のことばだ。伊丹万作は、観客にこびようとしない。しば／＼おかしなことを描くが、それはおかしがらせようとしているのではない。かれがおかしいと思うからかくだけのことなのだ。

一言でいえば、伊丹万作の精神は懷疑にあるのだろう。そしてそれは、否定を通しての肯定的精神となつて、作品の中に結実するのだ。——こゝから『諷刺』とか、『反抗』とか『諦観』とかが引き出されるのである。」と。

二 伊丹万作のスタイル

飯田心美は、「伊丹万作を思う」(「スクリーン・アンド・ステージ 昭和二十一年十月一日号」)で、「かれの作はごつ／＼手荒らく、一見不愛想であつたが、それでいて、どこともいえず一種の滋味をたゞえて

いた。」と書いているが、一言で伊丹万作のスタイルをよく言い表わしている。ごつ／＼手荒らいというのは、プロザイックなことではない。それは伊丹万作が、物事を考えるところから来ている。文学のことはでいえば、「散文」の眞髓を体得しているところから、つまり伊丹万作が散文精神の把握者であるところから来ているのである。そして、滋味をたゞえるのは、その抒情をよく抑制しえたところから来るのである。伊丹万作に、「テンポということについて」という小論がある。こゝでリズム論が否定されている。カットのこま数が映画を生かすものではないと言っているのである。「一つの画面が突如として消滅する。他の画面が俄然として出現する……。消滅や出現は單なる視覚的現象であつて、決して運動ではない。」と言っている。そして「映画のカットはどんなに短くても内容を含んでいる。」と言っているが、伊丹万作の画面がごつ／＼して流れないのも、その根拠は深いのである。どの監督もがサイレントからトーキーへ移る際、とまどいし、数歩の退却を余儀なくされたものだが、伊丹万作はなんのさしさわりもないかのごとく、サイレントの時と同じ歩調でトーキーへはいつて行つた。むしろ、サイレントよりもトーキーの方が作りやすいかの感さえあつた。というのは、「片方は口がきけないが、片方は口をきく。サイレントは不具で不完全なもの、形態としてトーキーが完全なもの。」と、はつきりしたトーキーに対する信念を持っていたからである。

伊丹万作の作品は、サイレントの場合でも、スポークン・タイトルははつらつと生きていた。その置き場所に異常な神経が使われていた。口のきけない片わ者に、どうしたらその言わんとするところをはつきりと表現せしめうるかに苦心が拂われていたのである。「軍兵衛という悪貸元の怒つたアツプ、」ついに爆發して「――ふざけるな。」というタイトル、そのあとに出て来る画面は、そうどなつ

た軍兵衛の姿ではなく、そうおこられている吉松である、というぐあいである。「赤西蠣太」、これまた日本トーキーとしての傑作であつた。この作におけるトーキー効果を一つ二つ例をあげると、鶴千代がうばに、「松前に会うたら、早う来るように言つてくりゃ。」と言うが、そこでうばは返事をしない。その代わり、カットになつて、向こうから雪の中をかごが軽く「はい／＼。」とやつて来るのである。このつなぎは、うっかりしていると氣づかないほど、しつとりしたものであつた。また、蠣太が國表へ帰る。伊達の殿様は、蠣太が侍女に付け文して、それが面目なくて去つたと思ひ、おかしいと言つて笑う。宴を開いて、みんなで、「わは／＼。」と笑う。その時蠣太に浴びせかけた笑ひは、不思議に笑っているかれら自らを笑う声となつて、観客席へ響いた。伊丹万作はかね／＼、藝術は人工のものだ、映画作品はそのすみ／＼をまで意識して作らるべきものだと言張っていたが、このところはどうかと私が尋ねると、「あれは偶然でした。」と答えた。これも作者がぎり／＼に押しつめる散文精神の果てに與えられるものなのである。

伊丹万作の散文精神のよくうかがわれるところが、サイレント映画「花火」にある。

この作で、主人公の友人が、父の碁争いがもとで、あだ討ちの旅に出ねばならなくなつたのを見て、自分の父もそんなはめに陥つて空想する。そしてあわてて外出先から、家へ飛んで帰つて來、友人の父のようになつてはと、おちからやつている碁をやめてほしいと父に頼む。すると、「あんな、碁争いで切りあひを、ばかな。」と父は相手といつしよに高笑ひして鼻にもかけない。そこで観客はひよつとしたら同じようなことが起るかもしれないと思つていたがそうでなく、ほつ／＼としていて、やがてそのことが事実となるのである。こゝのところ主人公があわてて心配して帰つて來るところ、

普通の監督なら、いきなり父のやっているへやのふすまをばつと開く、すると、父とその友人とが碁を囲んでいるとやるに違いないのであるが、伊丹万作はこの時、むすこがあわてて自分のへやへはいつて来る、するとカメラをひかし、むすこが見る前に、観客に、父とその友人がなんの変わりもなくなごやかに碁を打っているところを見せ、それから、むすこにそのさまを見せるのである。

三 伊丹万作とシナリオ

伊丹万作は、演出をする前、シナリオを書いていた。そのシナリオを私は読んでいない。私が読んだのは、「忠治賣り出す」「闇討渡世」「無法松の一生」「木棉太平記」の四本だけである。「無法松の一生」もよいにはよかったが、「忠治賣り出す」にはほと／＼感心した。題材に対する解釈に異色がある。表現が実到的確である。そして構成が緻密なのである。伊丹万作の映画をあとになって頭にかべるのは非常に困難だ。それはシナリオなり映画なりが、きわめて「映画的」にできている証拠なのである。「あなたがはじめての監督の時、めんくらわなかったですか。」と問われて、「たいしてめんくらわなかったです。」と伊丹万作は答えているが、それというのもシナリオがしっかりしていればこそなのだと思う。そういうシナリオ構成をどこから学んだのか知りたいのであったが、それがかれにもわからないというので困ってしまう。伊丹万作は、伊藤大輔と中学時代からの友だちで、はじめ絵をかいていたが、絵では食えないのでおでん屋をやったが、これも食えないので、伊藤大輔の世話で映画界にはいったというが、その間、見た映画はブルー・バード時代からロン・チャニー・チャールス・レイたちが活躍していた時代だという。「その時分の写真で、自分が後に監督や脚色をするようになって影響を受けたものはありませんでしたか。」と問われても、「大して影響はないでし

う。」と言う。「好きな監督はだれか。」と問われて、「クレール・ルビッチュ」と答えるだけであった。クレール・ルビッチュは、相当万作に影響しているのだと思われる。「監督という仕事は脚色に比べどうですか。」と問われて、「それはらくですね。監督はスポーツです。一番は原作、それから脚色、監督という順でしょう。」「原作はなるべくやりたくないです。からだがちびて行くような気がします。」この返事を聞いた時、異様な感を受けたが、今ではそのことはよく了解できるところだ。

私が伊丹万作に会う機会があった時、はなはだ幼稚なことだが、「一体、シナリオはどういうふう書いて行くのか、シーンとシーンのつなぎ目はどうしてつくるのか。」と私は質問したところ、「一つのシーンができる、するとその次に必要なシーンを持って来る。一つのシーンの内容が次のシーンを呼ぶのだ。」と答えてくれた。このことばで、私はつかめたのであった。

それから、私はシナリオに映画テクニクを記入することをきらって、映画テクニクの記入がなく、しかも映画的イメーヂの浮かぶごときものをシナリオの地の文章としたいと考えていたが、そのことを言うと、伊丹万作は、きわめて適切な例を示した。

「久保田万太郎の句にこんなのがあります。

まはりをるいたるところに旋風機

いたるところにまはりをる旋風機

この二句を視覚化する場合、それ／＼違った表現をとるでしょう。

前者だと、まず一つのクローズアップで出して、そのうしろの方に小さくあちらにもこちらにも、というふうにとるし、後者だと、あちらこちらに同じくらいのものそんなに大きくないのとると、いう

ことになるでしょう。だから、文学的にすぐれた表現ならば、映画テクニクの指定がなくとも、監督は、十分なイメージを浮かべることができるはずですよ。それができなくては、監督の資格はないでしょう。」

とのことであつた。

四 伊丹万作と俳優

「伊丹さん、俳優の演技といつても、監督に規定されるのではないですか。」と聞かれて、「そうじゃない。演技に関しては監督の力の及ぶ範囲は実に狭いものです。ある程度以上はどうにもしようがないですね。」と答える。また、

「役者が、どうにもへたで、まるで感じの出ない時は、熱心に演技指導はやらない。私は冷淡に、苦笑して見ている。すると、役者の方で反省して、少しは感じを出して来る。」とも言っている。これは心理的方法だ。

俳優ではないが、「赤西蠣太」で、赤西が玄関にしゃがみこみ、菓子品の定めをしている時、小ねこが、ひょっと赤西の肩へ乗ったが、実にいい。どうしてあんなにうまくやれたのかと尋ねてみると、ねこというやつは強情でしょう。一つ所にいるやつをわざと別の所へ持って行くと、もとの所へ、きつと帰りますね。一度そんなことがあり、こりゃいけると思い、赤西の肩の上へ乗せておいて、そこからおろして下に置くと、はたして、あんなふうにもとへもどつたのです。」とかれは答えた。興味深く、ためになる話である。

伊丹万作の手にかゝると、俳優は不思議にはつらつとする。いずれも新しい生命を吹きこまれた感じがあつた。

五 人物瞥見

伊丹万作は、寡黙だが、よく氣のつく人だ。非常に暖かい心を持っている。しかしその出し方に癖あるのだ。「赤西蠣太」のできたころ訪れたつ、まじやかな、つたのからまった玄関には、「執筆中称三不在。」と書いてあつた。面会謝絶としてこれほど行き届いた表現は今まで知らない。断られた方もりっぱに顔の立つ表現で、これには感心させられた。

その時、伊丹万作は写真帳を見せてくれたが、縁側の見える庭に、かれは突っ立っている。その写真に、かれ自ら書いたらしい句が書いてある。その句は、文字通りどうしても思い出せないのだが、何でも、出て見ればへんなおやじが立っている、といった意味のユーモアたっぷりのものであつた。

これは写真ではないが、かれは乳飲み子を、がら／＼いうおもちゃであやしていた。その姿は「武道大鑑」の終りそつくりの感じであつた。「武道大鑑」のあの子は、「私の長男を使ったのでした。」とのことである。

六 結語

伊丹万作は、「赤西蠣太」の後、「権三と助十」をつくつたが、「権三と助十」以後の作品は、いずれも昔日の生彩を失い、脊梁がくずれた感が深い。これは一体どうしたことかと思つていると、病にたおれた。祖師が谷の家へ見舞に行くと、やせ細り、ほおひげ・あごひげをはやした顔には、聖者のおもかげがあつた。「ゴルフにやられた。」とのことである。何を話したか忘れてしまつて記憶にないが、その言うところはしゃんとして、重病の人とは思われない。しかし、その姿は痛々しい。その後、

二、三回見舞ったが、その姿、私の見るに耐えうるところではない。私は雑誌に書くかれの文章だけに接することにした。他のところにも書いたことだが、伊丹万作の演出者としての生涯は、「赤西蠟太」をもって終っていると見なければならぬ。「権三と助十」以後のストランプがあるだけに、このストランプを乗り越えて行かせたかった。肉体労働を要件とする演出の仕事のことだから、八年前病にたおれた時にそのことはあきらめていたではあろうが、無念なことである。シナリオの仕事にしても、戦時中のこととして思うに任せなかつたであらう。ただ「静臥雜記」以下の文章があるだけだ。死の間近の日まで筆を執っていたということだが、悲壯なことである。

私のけげんに思うことは、伊丹万作の助監督の中から、ひとりもその後継者の出ていないことであるが、それは、かれが後継者を出すべくあまりにも独自の、個性の強烈な映画作家であつたからなのであらう。

（雑誌「映画春秋」）

研究

- 一 一 たかが一夕の欲をあがなうためのあの程度の娯楽映画を作るために、死傷者を出すことではないと思うのです。」とは、どういうことか。
- 二 「伊丹万作の精神は懐疑にあるのだろうか。そしてそれは、否定を通しての肯定的精神と

なつて、作品の中に結実するのだ。」とはどういうことか。

- 三 伊丹万作のスタイルは、どのようなものか。
- 四 「藝術は人工のものだ。映画作品はそのすみずみをまで意識して作らるべきものだ。」とはどういう意味か。

てみよう。

- 五 伊丹万作の散文精神とはどういうものか。
- 六 シナリオの「題材」「表現」「構成」とは、どういうことか。
- 七 映画的とはどういうことか。
- 八 「シナリオは、どういうふうを書いて行くのか。」この間に対する伊丹万作の答を味わっ

- 九 伊丹万作の演技指導について考えてみよう。
- 十 伊丹万作の作品を見たことがあるか。もしあるなら、それについて感想文をまとめよう。
- 十一 見た映画について、感想文をまとめよう。
- 十二 シナリオを書いてみよう。

〔五〕 シューベルト

河上徹太郎

ドイツローマン派文学はなやかなりし時代に、「天才の恣意」ということばがある。つまり、天才に生まれた者の特権として、その情熱のおもむくところ自由奔放な生活をするのが許される、という思想である。すなわち道徳的に見れば、個人主義の極致みたいなものであるが、それだけ藝術家の感興が拘束なく伸びて行くのを認めた、ローマン的な考え方である。そしてこのことばが最もよくあてはまる音楽家を求めるなら、第一にフランツ・シューベルトに指を屈せねばならない。

シューベルトは、古今の大音楽家の中でも最も変わった人のひとりである。他の天才は、モツァルトのように素朴な人でも、ベートーヴェンのようにがむしゃらな人でも、結局普通の音楽家のやっつてゐることをひとまずやっつてゐる。しかし、シューベルトのようにかたよつた「天才の恣意」に身をゆだねた音楽家はないのである。それには、かれが実に靈感にあふれた、即興的な作家であつたことが第一の理由で、そのため十分な理論的な勉強もなしに、おのが感興のおもむくままに、傑作を次々に

書きなぐって行ったためである。かれは三十一歳の短い生涯のうちに、一千近くの曲を書いた。その中に歌曲が六百もあり、歌劇が十九もある。聞いただけでもむだな話であって、その中には實際駄作があり、一つあれば済むような同じような作がまたある。その代わり、傑作と來たら反対にわずか二、三十小節の曲で優に古今の大交響曲に匹敵するようなものが珍しくないのである。

シューベルトは実に濫作をした。一日に歌曲を数曲書くなんてやさしいことであつたらしい。そのため、器楽曲で傑作でないものは冗長じやうちやうなものが多いのである。たとえば交響曲を九つ書いたうち、今日われ／＼が演奏会で聞けるものは、第八のロ短調（未完成）と、第九のハ長調の二つだが、この第八の方でも、傑作でありながら冗長という氣がする。

シューベルトが濫作した一つの結果として、かれには未完成の曲がかなりある。有名な未完成交響曲をはじめ、ピアノ・ソナタに五つもある。この現象は、かれの氣まぐれな、思いつきで興のまゝに筆を執り、興が去れば途中で見向きもなくなるためにほかならないが、また一つには、第一樂章・第二樂章に全力を注いでそこに全曲のための樂想を出きつてしまい、ためにあとが続かなくなるというふうにも考えられる。たとえば、未完成交響曲にしたつて、形式的にはとにかく、内容的にはこれで十分で、完結しているとは考えられないだろうか。あの美しい第二樂章が靜かに消えて行つたあとで、どんなメニュエットとフィナーレが必要なのだ。そんなものはなくもがなである。つまりこの曲は、「未完成」のために十分得をしているのである。そう考えると、冗長な交響曲や弦樂四重奏曲で、第二樂章までだつたらと思うのがよくある。女性的な、つまり曲の形式的構成に不得手で無関心なシューベルトに、未完成は当然つきものである。

シューベルトの作曲の重要なものは、いうまでもなく歌曲である。かれの名が一般に知れわたっているのも歌曲のせいだが、音樂史の上から見ても、やはり歌曲作者として最も重要な位置を占めているのである。ドイツローマン派音樂における歌曲の地位を定めたのもシューベルトの功績である。リードリードといえば英語のソング、フランス語のシャンソンにあたる最も普通の歌という語に違いないのであるが、シューベルトのリードリードといえは、何か特別の範疇ちゆうぶを示すことばで、日本でも訳さないで使うごとくに、英語でもフランス語でもそのまゝ用いているのも、シューベルトの功績である。

シューベルトが歌曲を書く傾向を育てた一つの切實な理由は、私はかれの人間的な氣質から來るのだと思う。かれの時代はローマン派のはなやかなりし時代で、そこでは青春を歌い、恋を歌つた。そして若い友とち連れて野や森を放浪して感激を歌い、酒亭で杯をあげて藝術を語り、人生をたゞえした。こういう生活の中に音樂がはいりこむとなると、やはり直接で親しみやすい歌曲が一番適切に違いないのである。こういうことは、つまらない理由のようで、シューベルトの場合には決してそうではない。かれの歌詞の選び方を見ても、決して詩としてりつばなものを選ばずに、放浪とか水車小屋の美しい娘とか、とにかく自分の実生活上の氣持にびつたりしたものを選んでゐる。そしてそれを若い親しい友だちのグループで歌いあうといった目的がどうしても先に立っているのである。

人なつこく、感激しやすいシューベルトの周囲には、俗に「シューベルト組」と呼ぶなかまがいて、画家や詩人や音樂家などのボヘミアンぞろい、だれかが金を持っていれば集まって飲み且つ歌い、常に清貧に甘んじて藝術に奉仕するといった生活であつた。したがつてシューベルトの作曲も、半分はこのなかまの生活のためと言つてもいい。そのも一つの証拠に、かれの作曲には、ピアノ連弾曲が多

いが、この連弾という子供っぽい、非「藝術」的な形式も、かれが実生活で友人たちと演奏して楽しむために使ったので、そういうところにシューベルトの「大衆的」な面目が躍如としてゐる。

したがってかれの歌曲も、名歌手が舞台の上で技巧を凝らして歌うためのものではなく、感激に満ちた若人が、あるいは野で、あるいは酒場で、興に乗って歌うためのものである。当時の声楽といえは、イタリア歌劇の傳統による精練された歌い方を聞かせるためのものであったが、これに対し、シューベルトのリードは全く平民的な、だれにでも歌えるものだったわけである。

かれの歌曲は、初期の「魔王」や「つむぎ車のグレートヘン」のごとき譚詩的なものも傑作であるが、最も美しく、また最も親しいのは、晩年の「冬の旅」と「水車小屋の美しい娘」の二曲集である。もともと、初期とか晩年とかいっても、シューベルトのごとき天才的即興的な人には、たとえはベートーヴェンに見るごとき音楽の発展の上の相違はあまりないのだが、それでも幾分の違いはある。初期の方が描写的で、旋律は大げさではなやかで、伴奏が舞台の背景のごとく大道具でできあがっているが、晩年のものは心理的になつていて、伴奏も旋律も一つになり、小さく渾然とまとまつている。全くどれもこれも互に劣らず、宝玉のごとく愛らしい歌曲である。

音楽史的に言えば、シューベルトはベートーヴェンの後継者であり、ローマン派の初期の代表者である。かれのベートーヴェンの影響はたいしたもので、ソナタ形式の器楽曲の芝居がかった構成は全くその先例にならつたものである。しかし、魂においてかくも隔たつたふたりは、内容的に全く対照の位置にあり、テーマの取り扱い方の一方は厳正、一方は抒情的という相違があるのは、前述の通りである。だからシューベルトのことを「女性的なベートーヴェン」と呼んだシューマンは、全く正しい。

いといわねばならない。このふたりはお互に相手の樂才を認めあい、死んだのもベートーヴェンが一年先だっただけで、墓地も今は並んで葬られている。

(音楽と文化)

研究

- 一 この文章に出て来る音楽上の術語を研究しよう。
- 二 「リード」ということを、日本のみならず英國でもフランスでも、そのまま用いているのはどういふわけか。あわせて外来語・翻譯語の問題を考えてみよう。
- 三 シューベルトをして、特に歌曲を書かせた理由について、この文の作者はどう考えているか。
- 四 シューベルトの歌曲の傾向がきわめて平民

的であるのは、どういう事情にもとづくか。

- 五 シューベルトのことを「女性的なベートーヴェン」とシューマンが言つたというが、どういふ意味か。
- 六 シューベルトの人と作品との關係を考えてみよう。
- 七 シューベルトの傳記をもつと研究して、この文の筆者の言ふところと比較しよう。
- 八 シューベルトの作品を鑑賞したことがあるか。レコード・コンサートを開いて味わおう。

五 俳句俳文

俳句は元來、連歌の第一句である発句が独立したものである。はじめはこつけいを主とした遊戯的のものであったが、これを文学の域に高めたのは、元祿の芭蕉であった。芭蕉

五 俳句俳文

の門には、いわゆる蕉門の十哲をはじめ、多くの才士が集まって、すぐれた作品を示したが、その後は次第に活氣を失って行った。あるいは平俗に墮し、あるいは奇怪をもてあそぶようになった俳壇は、やがてそこから反動的に復興の氣運を招いた。天明の蕪村はその中心人物であった。復興期の俳人たちは、枯淡な芭蕉晩期のものよりは、むしろ芭蕉の早期の壯麗な俳調を目標にして起ったと見られるが、主観的傾向よりも客観的傾向が強くなっているようである。

こゝには、芭蕉並びにかれを中心とする人々の句とともに、蕪村の有名な「春風馬堤の曲」を採録した。蕪村がこれを作った動機は、その前書きに明らかであるが、俳句に始まり、漢詩や長句をまじえて、こゝでは漢文式になっているところを、特になまじり文に書き改めておいた。きわめて特殊な形式をとっている。しかもそれらは、よく調和して、その構想・格調ともにすぐれている。

次に俳文の一例として「奥の細道」から抜粋した。

俳文とは、俳人特有なものの方と、かれらが、俳諧においてみがきあげた簡潔な表現法とによって一種独特な文体を作りあげたものであるが、中において「奥の細道」は、群を抜いている。

「奥の細道」は、芭蕉が元禄二年三月二十七日、門人曾良を連れて江戸を立ち、奥州か北陸道にかけての行脚を続けた時の記録であって、前後七箇月、道程六百里に及ぶ大旅行記である。わが國、紀行文学の傑作の一つである。

なお、「批評と解釈」は、たまたま俳諧に関するものであるから、こゝに収めたのであるが、これによって、廣く文学一般の理解に資するようにしたい。

〔一〕 蕉風二十句

芭蕉

梅が香にのつと日の出る山路かな
春雨やはちの巢つたふ屋根の漏り
くたびれて宿かるころやふぢの花
清滝や波に散りこむ青松葉
六月や峰に雲置く嵐山
名月や門にさしくる潮がしら
びいと鳴くしり声悲し夜のしか
この道や行く人なしに秋の暮れ
塩だひの齒ぐきも寒し魚の店
旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる
越後屋の絹さく音やころもがへ
声かれてさるの齒白し峰の月
ぬれ縁やなづなこぼる土ながら
ま夜中やふりかはりたる天の川

其角

嵐雪

〔二〕春風馬堤の曲

うごくとも見えて畑打つ男かな

湖の水まさりけり五月雨

うぐひすや茶の木畑の朝月夜

さびしさの底ぬけて降るみぞれかな

灰汁桶のしづくやみけりきりふす

長々と川一筋や雪の原

去來

丈草

凡兆

研究

- 一 句ごとに季題を指摘しよう。
- 二 切れ字について調べよう。
- 三 配合の効果について研究しよう。
- 四 写生みの勝った句はどれか。
- 五 主観的な句はどれか。

六 靜的な感じ、動的な感じのよく現われて

いる句はどれか。

七 繊細な感じのよく現われているのはどれか。

〔二〕春風馬堤の曲

與謝蕪村

余一日耆老を故園に問ふ。澗水を渡り、馬堤を過ぐ。たま／＼女の郷に帰省する者に逢ふ。先
後して行くこと数里。あひ顧みて語る。容姿嬋娟として癡情あはれむべし。因りて歌曲十八首を
製し、女に代はりて意を述ぶ。題して春風馬堤の曲といふ。

やぶ入りやなにはをいでて長柄川

春風や堤長うして家遠し

堤より下りて芳草を摘む。荆と棘と路をふさぐ。荆棘何ぞ妬情なる。裙を裂き且つ股を傷つく。

溪流石点々。石を踏んで香芹をとる。多謝す水上の石、われをして裙をぬらさざらしむ。

一軒の茶店の柳老いにけり

茶店の老婆子われを見て感慙に無恙を賀し、且つわが春衣をほむ。

店中二客あり。よく江南の語を解す。酒錢三縑をなげうち、われを迎へて榻を譲りて去る。

古駅三両家。猫兒、妻を呼べども妻來たらず。

雛を呼ぶ籬外の鶏。籬外、草、地に満つ。雛飛んで籬を越えんと欲すれども、籬高うして落つる

こと三、四。

春草、みち三叉、中に捷徑あり、われを迎ふ。

たんぼ、花咲けり、三々五々。五々は黄に、三々は白し。記得す、去年この道よりす。

あはれみとるたんぼ、茎短うして乳をあませり。

むかしむかし、しきりに思ふ慈母の恩。慈母の懷抱、別に春あり。

春あり、成長してなにはにあり。梅は白し、浪花橋辺財主の家。春情学び得たり、なにはぶり。

郷を辞し、弟に負いて、身三春。もとを忘れ、末を取るつぎ木の梅。

故郷春深し、行き／＼てまた行き行く。楊柳長堤、道やうやくくだれり。

矯首、はじめて見る故園の家。黄昏、戸による白髪の人。弟をいただき、われを待つ、春また春。きみ見すや、古人太祇が句。やぶ入りの寝るやひとりの親のそば

(夜半樂)

研究

一 原文では、漢文・漢詩、ならびに漢文調の長句、および俳句の形式のものがまじっている。どこがどれであるか。それ／＼について考えてみよう。

二 原文を調べてみよう。

三 これは、原文の漢文式のところはすべてかなまじり文に書きくだしたものであるが、かなまじり文と漢文との違いを考えよう。

四 「澗水」「馬堤」「行くこと数里」「江南の語」などは、それ／＼どういう意味か。なぜこのような語を用いたのか。

五 この一編を通じて感ぜられる作者の氣持はいかなるものか。

六 これを、口語体の詩に作りなおしてみよう。

七 一年の教科書に入れた蕪村のところを更に読み返してみよう。

〔三〕奥の細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやます。海浜にさすらへ、こそぞ秋、江上の破屋にくもの古巢を拂

ひて、や、年も暮れ、春立てるかすみの空に白河の関越えんと、そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きに会ひて取るもの手につかず、も、引きの破れをつゞり、かさの緒つけ替へて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

表八句を庵の柱に懸けおく。やよひも末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、上野・谷中の花のこすゑ、またいつかはと心細し。むつまじきかざりはよひよりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそゞく。

行く春や鳥啼き魚の目はなみだ

これを矢立てのはじめとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、うしろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

そも／＼ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江のうち三里、浙江のうしほをたゞふ。島々の数を盡くして、そばだつものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重に重なり、三重にたゞみて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、いただけるあり、兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その氣色蒼然として美人のかんばせをよそほふ。ちはやぶる神の昔、大山づみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、ことばを盡くさん。

雄島が磯は地続きで、海にいでたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木陰に世をいとふ人もまれ／＼見えはべりて、落ち穂・松かさなど打ちけぶりたる草のいほりしづかに住みなし、いかなる人とも知られずながら、まづなつかしく、立ち寄るほどに、月海に映りて、晝のがめまたあらたむ。江上に帰りて宿りを求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲のうちに旅寝するこそ、あやしきまでたへなるこゝちはせらるれ。

松島やつるに身をかれほとゝぎす 會 良

予は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。旧庵を別るる時、素堂松島の詩あり、原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解きてこよひの友とす。且つ杉風・濁子が発句あり。

江山水陸の風光数を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北の方、山を越え、いそを傳ひ、いさごを踏みて、その際十里、日影や、かたぶくころ、潮風まさごを吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に横索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、あまのとま屋にひざを入れて、雨の晴るるを待つ。

その朝、天よく晴れて朝日はなやかにさしいづるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老い木、西行法師のかたみを残す。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干満珠寺といふ。こゝに行幸ありしこといまだ聞かず。いかなることによ。

この寺の方丈に座してすだれを巻けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天をさへ、その影う

つりて江にあり。西はむや／＼の関路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道はるかに、海、北にかまへて波打ち入るる所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、おもかげ松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を悩ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花
汐越やつるはぎぬれて海涼し

(奥の細道)

研究

- 一 「舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者」とは、何をさすものか。
- 二 「江上の破屋にくもの古巢を拂ふ」とはどのようなことか。
- 三 「草の戸も」の句には、芭蕉のどのような感じが現われているか。
- 四 「またいつかは」という語の下の省略について考えてみよう。
- 五 「行く春や」の句意を説明しよう。
- 六 「矢立てのはじめ」とはどういうことか。
- 七 松島の大観を敘した部分につき、文章表現としてすぐれている点を説明しよう。

五 俳句俳文、

- 八 「松島や」の會良の句について説明しよう。
- 九 「袋を解きてこよひの友とす。」とはどういうことか。
- 十 「数を盡くす。」「方寸を責む。」などの意味について考えよう。

- 十一 「花の上こぐ」の典故、西行の作という「象潟の櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟」の歌を味わおう。
- 十二 「象潟や」の句の趣を、その故事を調べて考えてみよう。
- 十三 この文は省略が多い。適当に補って、平易な口語文に書き換えてみよう。

十四 俳文の特徴はどのような点にあるか。この

文章の性質から考えてみよう。

〔四〕 批評と解釈

能勢朝次

蕉門の間でよく問題とせられている事項に、「治定」がある。治定とは、その句において、他の語をもつて代入することを許さぬだけの詩的確定性があることをいう。しからざるものは、これを「動く」といってしりぞけたのである。芭蕉の作品について、この論が起った実例が「去來抄」に見えている。それは、芭蕉の「行く春を近江の人と惜しみける」という作について、

先師いはく、尙白が難に、「近江」は「丹波」にも、「行く春」は「行く年」にもなるべし、といへり。なんぢいかゞ聞きはべるや。去來いはく、尙白が難当たらす。湖水朦朧として春を惜しむにたよりあるべし。ことに今日の上にはべると申す。先師いはく、しかり。古人もこの國に春を愛すること、をさゞ都に劣らざるものを。去來いはく、この一言心に徹す。行く年近江にゐたまはば、いかでかこの感ましますさん。行く春丹波にゐまさは、もとよりこの情浮かぶまじ。風光の人を感動せしむること、まことなるかなと申す。先師いはく、なんぢや去來、ともに風雅を語るべきものなりと、ことさらに喜びたまひけり。

という話がしるされている。尙白が芭蕉に批評を求められた時、かれはこの句を、治定性において欠けるところがありはしまいかと批評したのである。すなわちこの句は「行く春を丹波の人と惜しみける」としてもよく、「行く年を近江の人と惜しみける」としてもさしつかえない。したがって、「近江」という語にも「行く春」という語にも、治定性が乏しく、いわゆる「動く句」であると考えたのであ

る。芭蕉は更に去來に批評を求めた。去來尙白の非難を不当であるとして、風光感動論をもつてし、芭蕉は更に詩歌傳統論をもつてこれを補ったのである。

去來が尙白の難を不当に感じたのは、かれが実景・実情と句作との関係に深い修練を重ね、苦心した体験を持つていたためであると思われる。「湖水朦朧として春を惜しむにたよりあるべし。」と言ひ、「ことに今日の上にはべる。」と言つた去來は、句から直ちに実境へと詩心を向け、その実境がいかに作者の句心を触発したかという点に考えをめぐらして、一句の詩情をまず自分の心に感じ取ろうとしている。こうした作品の味わい方は、作者の身になり、句の心になって、及ぶ限りこれを高い詩境において鑑賞しようとする志向の現われである。芭蕉が「なんぢや去來、ともに風雅を語るべきものなり。」と満足の意を表したのは、去來のこうした敬虔な態度を称揚したものである。また芭蕉が、「古人もこの國に春を愛すること、をさゞ都に劣らざるものを。」と述べているのは、かれが古典の世界、古人の風雅の世界というものをもつて、常に自己の作品の背景たらしめようと志し、古人が近江の國において春を愛した作品の数々を残していることを意識し、そうした作品の数々を自己の作の背景に置いていることを告げる。したがつてかような作は、鑑賞者が句の表現面だけを見ても感心するだけの價値を備えるとともに、もし鑑賞者が古典的な傳統詩情の上に立ち、古典の背景を自覺して味わうならば、更に深く幽玄な詩味を味わうるわけである。

去來が芭蕉の作をかくのごとくに味わひえたのは、かれが、「及ぶ限り、作品を高き詩情において鑑賞しよう」と志向したこと、の現われであるが、そうした実例は、去來がまた芭蕉から示されたところ

でもあった。それは、去來の「岩はなやこゝにもひとり月の客」という句に対して、芭蕉の下した解釈である。「去來抄」に、右の句をあげて、

去來いはく、酒堂はこの句を「月のさる」と申しはべれど、予は「客」の字まさりなんと申す。いかゞはべるや。先師いはく、さるとは何事ぞ。なんぢこの句をいかに思ひて作せるや。去來いはく、明月に山野を吟歩しはべるに、岩頭一人の騷客を見つけたると申す。先師いはく、こゝにもひとり月の客と、おのれと名乗りいでたらんこそ、いくばくの風流ならめ。たゞ自称の句となすべし。この句はわれも珍重して「笈の小文」に書き入れけるとなん。予が趣向はなほ二、三等もくだりはべりなん。先師の意をもて見れば、少し狂者の感もあるにや。退いて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者のさまも浮かみて、はじめの句の趣向にまされること、十倍せり。まことに作者その心を知らざりけり。

としるしている。まず酒堂が「月のさる」とした方がおもしろいと言ったのは、明月に浮かれて、とある岩はなまでやって来て、そこでどんぶんに月の美を賞しようと思つたところ、その岩はなには、さるがすでに明月を賞しがおに、うすくまうて空を仰いでいるのを見つけた、という構想である。明月の美しさには、さるも浮かれ出ている、というので、芭蕉の「初しぐれさるも小みのをほしげなり」と同じような作意に出たのである。しかし、去來は、岩頭にひとりの風雅人が、すでに明月を賞しつゝあるのを見つけた、という自分の構想が自然であつてよいと主張した。酒堂にはユーモアはあるが、作爲に過ぎるきらいのある点が、去來の同感するところとならなかつたのであろう。芭蕉は「さるとは何事ぞ。」と酒堂の案を一蹴し、去來の作意を聞いた上で、岩頭に月を賞している詩客を自分に

して、おりからそこへやって來た月の客に対して、こゝにもひとり月に浮かれている人間（私）がいますよ、と名乗りいでた方が、ばるかに風流である、だから自称の句とするがよい、という解釈を與えたのである。去來は、師のかような解釈を聞いて、さすれば、おのれと名乗りいする者に、風狂人（風雅に狂する人物）のおもかげも感じられて來、風流・風狂のおもしろさよりいへば、自分の作意にまさること十倍である、と師翁の解釈の深さに感服したといふのである。

この話は、去來は、自己の作つたこの一句に対する師の解釈の深さ、ということがらとして語つてゐるのであるが、われ／＼の立場としては、一般に文学作品の解釈といふことの上に、大きい問題が投せられてゐることを感するのである。その問題といふのは、「文学作品の解釈は、当該作者の表現意図に復歸し、作者の心持になりきること、作者の創作体験を、作品を通して、読者が追体験することである。」と一般に考えられてゐるのであるが、「作者の意図にのぼらなかつた解釈、作者と別個の解釈」といふものも、その存在を強く主張しうる可能性が、こゝに提示せられてゐることである。したがつて、当然それに引き続き起る問題は、「そのいずれを正しい解釈とすべきであるか。」といふことである。この岩はなの句を、去來の考えていたごとき場合の光景と解釈することは、作者の心に復歸した解釈であつて、正しいものと認めることは、ほとんど常識である。もしそれをもって正しいとすれば、芭蕉の「自称の句とすべし。」という見方は、行き過ぎた解釈だと言わねばならない。しかし、われわれは芭蕉の下したこの句の解釈に、去來のものよりも、更に深いものを感じるのであるから、芭蕉のそれを誤りと断じることができないのである。

以上のことから、われ／＼は、「作品の解釈といふものは、たとい原作者の意図にのぼらなかつた

解釈でも、もしそれがその作品を藝術的價值において高めるような解釈であれば、それをもって正しい解釈と認めてさしつかえない。」という結論に導かれるわけである。この立場に立つ時に、われわれはまた、「作者は、作品としてそれを発表した以後は、その解釈に関しては、自己の意見を提出して鑑賞者の参考に資することは許されうが、自己の創作の時の考えと異なつた解釈を下す者があつても、それを誤りであるとして抗議する権利はないものである。」ということを用いるわけとなる。つまり作者は、自作を発表すると同時に、その解釈を社会に委譲するものであり、社会は、その作の表現を通して、作品に解釈を加える権利を持つこととなる。したがつて、偉大なる鑑賞者によって、作品は作者の感じた以上の深みのある解釈を與えられる場合もある。それは、その表現において、それだけの解釈を可能とするよさがあつたためである。また、偉大な批評家によって、作者の意図したより以下に價値づけられる場合もある。それはその作品が、作者の意図をに足るだけの表現を持つていなかったことによるのである。この岩はなの句は、かような問題を提示する点において、われわれに大きい興味を起させるものである。

(芭蕉の俳論)

研究

- 一 「行く春や」の句に対する、尙白・去來・芭蕉のことばを比較し、味わってみよう。
- 二 「行く春や」の句に対して、このような味わい方の違いが出て来るのは何によるのか。

- 三 われわれは、どのような準備をもつて、句の鑑賞に向かわなければならぬか。
- 四 「岩はなや」の句に対して下した芭蕉の解釈を味わってみよう。

- 五 「風流」「風雅」という語について調べてみよう。
- 六 「治定」とはどういうことか。これが作品の批評とどのような関係を持つか。
- 七 「作品の解釈」ということはどういうことか。

- 八 筆者がこの文において言おうとしていることは、どのようなことか。
- 九 こゝに説かれていることを頭に置いて、前出の蕉風の句についてみんな話してあげよう。

六 歴 史

こゝには、一般学生の歴史研究の意義と價値とを論じた論文、歴史上における恣意と偶然の支配を認めなかつた福沢諭吉の歴史観を論じた論文を載せた。これらの内容を理解し、更に學術論文・歴史論文の読み方を知り、歴史学の術語にも慣れよう。

人間は、自然の中に社会を形作っているだけでなく、歴史の中に社会を形作っている。その社会はだん／＼大きくなり、互の関連を深めている。しかも、社会は自然に変化するだけでなく、その社会の人間の力によって質的に發展して行く。われわれは、自らの社会を自らの力によって世界的関連を持つたりつばなものとして質的に向上發展させて行こう。

われわれは、歴史とはどういうものであり、歴史とはどういうふうに見えるべきであり、歴史書を読むことにはいかなる意義と價値とがあるかを知ると同時に、自らの社会を、世界歴史の進展に遅れないような近代的な社会として打ち建てて行くよう努力しよう。

〔一〕 歴史への関心

河合榮治郎

われわれが歴史を研究するという場合の歴史とは何であるかというに、周知のごとく歴史という語には二つの意味があつて、第一は客観的の意味でできごとのことであり、第二は主観的の意味でできごとに対する記述のことである。ドイツ語の *Geschichte* (歴史) とは *geschehen* (生起する) と語源を同じくすることが、歴史の二つの意味をよく表現しているといわれる。歴史を研究するとは、直接にはできごとを研究することであるが、できごとを研究するには、主観的意味の歴史すなわち記述によるのほかはないから、結局は記述された歴史を研究することになる。そして専門の歴史家でも歴史専門の歴史学生でもない一般学生にとっては、研究とは史料にまでさかのぼることではなくて、歴史書を読み、そして思索することである。

さて歴史の研究の意味と価値はいかにというに、もし歴史の研究が一つの科学であるとするならば、歴史の研究の意味と価値は、科学一般のそれと変わらない。そこで問題は、歴史学はたして科学か否かということにあるが、科学の本質が原因・結果の関係を明らかにするにあるとすれば、歴史学もまた自然科学や社会科学とともに科学である。たゞ後者の因果関係は、いかなる場合にも適用される普遍性を持つが、歴史学における因果関係は、たゞその特殊のできごとについて一回限り適用されるという点が異なるだけである。たとえばAという原因がフランス革命を結果し、フランス革命がBという結果をもたらしたならば、この一列の因果関係は、フランス革命を中心とする前後の事実だけに適用されるにとゞまって、他の事実には適用されるのではない。これだけの差異があればと

て、因果関係を明らかにする点は同じであるから、歴史学もまた科学の一種である。したがつて科学一般の意義と価値すなわち、第一には知識を得ることそのことがわれわれの人格を成長させ、第二はわれわれの目的に対する手段を提示することがそのまゝ、歴史学にも、妥当するわけである。だが歴史学は科学であるとともに特殊科学であるがために、このほかに特殊科学としての特殊の意義と価値とがなければならぬ。否、科学一般の意義の一つである、目的に対する手段の提示ということが、歴史学の特性上少しく他の科学とは異なる内容を持つこととなる。そこでわれわれの問題は移つて、歴史学研究の特殊意義は何かということになるのである。

歴史研究の第一の意義は、自己を理解するに役立つことである。こゝに自己とは、社会または個人を意味するので、社会ならば社会の自己を、個人ならば個人の自己を理解することである。ベルンハイムは歴史の段階を三分して、物語史・實用史・発展史とし、発展史ははじめて科学となるに至つたという。歴史を科学たらしめた発展という概念こそ、まことに人間の思想上における画期的のものであつた。これは十八世紀から十九世紀のはじめにかけてはじめて生まれたので、その以前には存在しなかつた。十八世紀以前にも歴史はあつた。ヘロドトス・ツキデイデス以来ハラム・ギボンに至るまで、卓越せる歴史家はあつたが、発展の立場に立っては歴史は書かれなかつたのである。発展の概念の生まれたのは、自然科学が物理学・化学から生物学に拡張された時だといふ。今までも変化という概念はあつた。しかし変化とは一定の時間の中における場所の移動を意味したので、同一の主体の異なる時間の中における変化が意識された時、はじめて発展の概念は生まれたのである。たとえばAなる場所にあつた玉がBなる場所に移つた時の変化と、Cなる植物なり動物なりが、同一

主体性を持続しつつ、きのうのCからきょうのCとなることは、異なる変化であつて、後の変化を
発展という。発展という概念が生まれてから、科学・哲学のあらゆる方面に重要な影響を及ぼしたが、
その一つとして、歴史はこゝではじめて科学となるに至つた。物語史や実用史は物語や実用の必要を
満たせば足りるので、歴史は断片的な非連続体であつた。ところが発展史たるに至つて、過去の社会
と現在の社会とは、同一主体の変化であるので、切斷を許さない連続体となつた。過去は現在をはら
み、現在は未來をはらみ、現在の中に過去があり、未來の中に現在がある。したがつて現在の社会を
理解せんとする者は、過去の社会を、すなわち歴史を見なければならぬ。個人は社会の部分である
から、個人と社会とは同一ではないが、部分である限りにおいて現在の社会を理解することは、現在
の個人の理解にも必要である。これ私が歴史が自己理解に役立つというゆえんである。社会や個人の
理解のためには、歴史が唯一のものではない、歴史を超越した解剖・分析が別に必要ではあるが、具
体の個性の姿において自己を理解するには、歴史にまたねばならない。そして自己の進歩成長にまず
必要なことは、眞実の自己を理解し認識することではなければならないのである。たゞに現在の自己理
解のために、歴史が必要ばかりではない。現在は未來をはらむものであるがゆえに、やがて跳躍せ
んとする未來の理解のためにもまた必要である。社会科学の各分科の中に歴史学派なるものが生まれ、
また各特殊歴史がそれ々の分科に應じて発達したということは、未來に政策を実現せんとする場合
に、いかに歴史の研究が必要であるかを物語るものである。こうして歴史は、ともすれば抽象の理論
に走りやすい人々の足を、どっかと大地にすえさせて、眞実と具体と特殊とに目を注がしめる。青年・
学生の時代に歴史研究の特に必要なゆえんは實にこゝにある。

第二に歴史の研究は、われわれの目を全体に注がしめ、総合に向かわしめる。歴史の中に発展の概
念が入りこむ以前は、歴史は政治史であつた。また歴史のほかに倫理学・宗教学・経済学・政治学等
の学問があつて、それ々の文化の特殊領域を占有していた。ところが発展ということが自覚される
や、いかなる変化が起つたであろうか。発展とは同一主体の異なる時間内の変化であるから、発展の
主体たる社会に注意が注がれた。社会はそれ々異なる側面を持ち、これをしばらく抽象して宗教と
言い、倫理と言い、政治・経済と称することは許されるとしても、それは要するにしばらく許された抽
象の結果であつて、眞実の社会は、宗教でも倫理でも藝術でも学問でも政治・経済でも、すべてを一
体とした総合体にはかならない。かくして今まで政治史であつた歴史が文化史となつたとともに、今
まで一つ々抽象して考えられた文化の各領域は、全体としての文化の一部であり、これらの部分が
総合して社会の全面を構成するものなることが意識されるに至つた。したがつて、歴史とはこうした
総合した文化の各部分が、全体と部分との間に、また部分相互の間に、複雑な相互連関のもとに、発
生する変化の跡をたどるのである。これらの文化のいずれの部分も優越的な重要性を有するかにつ
いて、歴史哲学者の間に見解の相違が現われ、かくして各自の史観なるものが生じるのである。たと
えば経済に優越性を置く所に唯物史観が生じ、意識形態に優越性を置く者が觀念史観を信するがごと
くであり、また文化史の中でも政治史に偏する場合としからざる場合とが起るのである。今私はこれら
のそれ々の史観を批判する余裕を持たないが、要するに社会は一つの文化に包攝されるのではなく、
あらゆる文化の総合であり、歴史はこうした総合した文化の全体を対象とするのである。今日、文化
史のほかに政治史・経済史・宗教史・道徳史等々の特殊歴史があり、また政治学・経済学・宗教学・

倫理学等々の特殊科学がある。これらはそれ／＼文化の一部をしばらく抽象して自己の対象とするので、それはそれとして必要を認められるが、これらの特殊科学や特殊歴史に没頭する者は、ともすれば全体を忘却し、部分相互の複雑性を無視することに陥りやすい。この弊を是正して、われ／＼の目を全体と総合とに注がしめるのは、文化史たる歴史の研究の重要な意義でなければならぬ。

次に歴史の研究はわれ／＼に遠近法(Perspective)を教える。天上の星辰をながめ暮らしている者は、日常生活のさゝいなくせくから脱却することができるが、これは尨大な空間に比して、あらゆる他のものが小さく見えることから来るのであろうが、同じように、数千年の長い時間についた社会興亡の跡をたどっている者には、ともすれば現在に踞踏し、取るに足らぬことに焦慮することの愚を悟ることが出来る。またある時代には、しばしば人心を動かしたことが、後代から見れば齟齬にかけられるに足らないことであり、その時には多くの人から看過された事件の中から、後代を震撼する事件が生まれたりする。史を読む者は、数々のこうしたことに接するであらう。そしてかれは大きな事と思われる事を懷疑し、小さな事と思われる事の中に、何ものか潜んではいないかと検討の目を鋭くする。われわれの日常生活において、いかに、あるべき価値が隠され、あるべからざる価値が目をおうことが多であらう。眼前の百尺にも足りない小山は、一万二千尺の富士山をもわれ／＼の目から隠すことができる。その時、偶然の錯覚からわれ／＼を救って、眼前の小山と隠された富士山とを、それ／＼の高さに評價して誤たざること、これが歴史から来る遠近法のためものである。

歴史の研究の最後の――しかし最大の――意義は、われ／＼に人生や社会に対する指針を與えることである。これに対して人は直ちに言うかもしれない。かゝる立場こそ、歴史をして発展史から再び

実用史へと逆轉せしむることではないかと。しかし実用史の非なることは、実用の意図をもって歴史の因果関係の連鎖を左右することにある。科学たる歴史は眞をしてのみ左右せしめねばならない。だが眞をもって記述された歴史から、何をくみ、何を教えられようとも、それは歴史を実用史たらしめることではない。歴史を実用史たらしめる危険があるとの錯覚から、歴史の意義と価値とを無視する者は、理想なくして人生を送る者の、無意義な彷徨と逍遙に過ぎない。

歴史は過去のできごとの摸写ではない。過去のあらゆるものが平等無差別に歴史の対象となるのではなくて、選択されたものだけが歴史の中に採り入れられる。また、ある結果の原因が何であり、ある原因の結果が何であるかは、外界に存在する事実ではなくて、一にわれ／＼の判断に係るのである。歴史が過去の変容であることは、他の科学が具体的事実を扱うのでなくて、抽象された一般的的事実を扱うのと似ている。いずれも具体的事実の摸写ではないという点において。しかし、一般科学は普遍化された因果関係を明らかにし、歴史は個性化された因果関係を明らかにする。この点において歴史は藝術(たとえば文学)と似るところがある。いずれも個性と特殊とを重んずる。そして藝術が創作であって事実の摸写でないことも歴史と似ている。たゞ藝術は創作に重点を置くが、歴史は事実即ち離れないことに相違がある。では歴史は何によって過去を選択するかというならば、現在の目をもって、現在における重要性をもってである。したがって歴史は單なる過去の記録ではなく、現在からながめられた過去の記録である。歴史がしば／＼書き改められるというのは、過去をながめる現在の目がしば／＼変化するからである。しかし、過去をながめる現在は、未來に接続する現在であり、未來へと跳躍せんとする現在である。したがって言を換えれば、歴史は未來からながめた過去

の記録である。回顧は未来になすき老人の閑事業ではない。未来を展望するはつらつたる青年の活事業である。だが、現在から、また未来からながめられた歴史は、過去から現在に至る因果必然の関係を明らかにすることにより、現在のわれわれを身動きならぬ拘束に置くかのごとくに思われやすい。しかし、自然科学の因果必然の関係を説明することが、われわれの自然を駆使する実践の意欲から始まったと同じく、歴史の因果関係の解明もまた、未来へ跳躍せんとする実践の意欲から始まったのである。実践の意欲——自由を前提とする——が必然を認識してこれを駆使せんとする。たれか言う、歴史の必然がわれわれの自由を否定すると。必然を認識する科学は歴史学をも含めて、因果必然の関係を構成した人間の精神の、自由の、勝利の結果であり、凱歌の記録である。

私は現在の目をもって過去をながめると言ったが、現在の目とははたして何を意味するか。それは現在という時において、未来の展望の上に築いた「人生観」を意味する。この人生観が過去の雑多なできごとから価値あるものを選択させ、発展を促す因素のどれが重要であるかを判断せしめる。歴史家は必ずしもこうした人生観を意識しているとは限らない。しかし、これを意識し体系化し、一筋の目をもってくまなく歴史を貫徹する時に、われわれはこれを偉大なる歴史家という。そしてその把握する人生観の異なるにより、そこに異なる史観が生まれるのである。かくて歴史家は哲人でなければならぬし、歴史は哲人の偉業である。では歴史学と哲学とはいかに異なるのかというならば、哲学は時間と場所との制約を脱して、あらゆる時あらゆる所に妥当する人生観を教えるが、歴史学が前提とする人生観は普遍妥当のそれではない。現在という特定の時間に制約され、特定の社会という場所制約された限りの人生観である。哲学における人生観が普遍的であり抽象的であるに反し、歴史

学におけるそれは、特殊的であり具体的である。更に、歴史学における人生観は単に前提であって、この前提の上に立って、歴史家は過去のできごとを選択し、発展の動力たる因素を検索する。しかも選択された後においては、あくまでも事実に即してこれを離れない。これが科学たる歴史学の哲学と異なる点である。だが歴史のできごととは人間の行動の結果である。人間の行動は、多かれ少なかれ意識的であれ無意識的であれ、かれの持する人生観の表現でないものはない。こゝにおいて歴史家は往々にして史上の人物を批判する。この場合の批判とは、当事者の人生観とこれを実現する手段の巧拙を批判することである。こゝでは歴史家は人生観を単に出発の前提とすることとせしめて、批判の中に於いて前面に躍動せしめるのである。

では歴史を研究する者は、何を歴史から獲得するかというに、かれは歴史家が記述の前提とした人生観を把握することができる。しかもこの理想は哲人の與える抽象的な普遍的なそれではない、歴史家の現在におけるそれである。もしこの人生観が史上の人物の批判に現われているならば、人はこれをとらえることが容易であろう。しかし、たとえ単に前提としてのみ用いられた人生観であるとしても、眼光紙背に徹する者は、史中にひらめく人生観をとらえることができるだろう。更に常人に看過されやすい事実の中に、未来をはらむ萌芽を見いだした鋭き洞察に、人は歴史的眼光を学ぶであろう。歴史はわれわれに知識 (Knowledge) を與えるだけではない、実にあの貴重な知恵 (wisdom) を與えるのである。人はあるいは言うかもしれない、たとえ偉大な歴史家から人生観を教えられようとも、また史上の事実に対する鋭き洞察を示されようとも、その歴史家もその事実も、かつてありしものであり、たゞ一回限りあるものではないか、異なる時間と空間との間にあるわれわれに何の役立つことがあ

ろうかと。だか、一回限りあるものなればこそわれ／＼に役立つのである。自然科学の因果関係は、普遍的であるがゆえに、あらゆる場合に妥当する代わりに、個々の場合に適用するには距離がある。一回限りの歴史上の理想や事実は、個性的であり特殊であるだけに、われ／＼の現在との比較が可能であり、類推が容易である。この点において歴史は傳記と似ている。人間の理性が自然科学の普遍的因果のほかに、歴史学の個性的因果を構成したゆえんは、過去の理想と批判とを容易に現在に類推せしめうるためであろう。それなればこそ、いにしえの中國人は、「殷鑑遠からず。」ということができたのである。

要するに歴史学は科学化された哲学であり、哲学化された科学である。人間の成長に関心を持つ者は、机上常に史書を離してはならないと思う。

(学生と歴史)

研究

- 一 歴史と自然科学とはどういう点が違うか。
- 二 「発展」という概念は、「変化」という概念に比べて、なぜ重要な意義を持っているか。
- 三 「現実と具体と特殊」に目を注ぐということは、われ／＼の日常生活についていえばどういうことをさすか。
- 四 人間は各自の史観を持っているという史観

とは何か。

- 五 「遠近法」というのは絵画で使うことばであるが、本課でのこの術語の使い方を考えてみよう。
- 六 歴史を実用史とするとはどういうことか。また、実用史はなぜいけないのか、科学と「真」との関係について考えてみよう。

七 藝術と歴史とはどう違うか、作者のことばを中心にして、みんなで話しあおう。

八 「歴史はしば／＼書き改められる。」と筆者は言っているが、それは科学としての「真」に矛盾しないであろうか。しないとすればそれはなぜか。

九 「必然」とは人間の力で左右できるものであろうか。

十 「人生観」を持つことは、必要であるか。われ／＼は歴史をどんなふうに使えば、人生観を學び取ることができるだろうか。

〔二〕 福沢諭吉の歴史観

小泉 信三

福沢諭吉の歴史観は、明治八年の「文明論之概略」、明治九年の「旧藩情」、明治十二年の「民情一新」によって見ることが出来る。これ以外にも参考すべきものは諸所にあるが、おもなるものは右の通りである。

十九世紀の終り、ドイツの史学革新論者ランプレヒトが創唱して以来、歴史上の個人主義および集團主義(コレクティヴィスム)という術語が廣く行われるようになった。ランプレヒト自身は後者を奉ずるものであるが、福沢の歴史観もこの概称のもとに属する。そも／＼史学の任務いかんとの嚴密なる議論はしばらくおき、歴史家の興味が事物の変化・変遷に向かつて動かされることは争いがたい。全然不変恒常なる事物は歴史家の興味の対象とはならぬ。そうして、その変化の顯著なるものは、戦争・変乱等の事件であるから、歴史家の注目がまずこの種の事件およびこれをひき起した(と見られる)人物に向けられるのはきわめて自然のことである。しかし、もし歴史を、全く過去および周囲と

切り離された特殊人物のほしきまゝに造り出したものと見るなら、それによつては何物も説明あるいは理解せられず、歴史は学たることを放棄するにも等しいこととなる。突如としてひとりの家康が現われて三百年泰平の基を開き、突如としてひとりのビスマルクが現われてドイツ統一は実現されたというごとき歴史の敘述が、今日もはや何人をも満足せしめないことはいうまでもない。たゞ歴史上、特殊人物と、それを載せまたそれに動かされる時勢や環境と、そのいずれにどれだけの重量を附すべきかという点については、今日なお依然として定則と認むべきものはない。今かりに歴史家の主題を、治者と被治者、政治と文化（または生活）、戦争と平和、事件と状態（または制度）、個人と大衆、というふうにあい対照させてみると、学者により学派により、おのずからそこにさまざまの度合においてそのいずれを重んずるか、の偏向は示される。いわゆるコレクチヴィストは、常にこれらの対照の後者に重きを置くものである。そうしてこれらの前者よりも後者に重きを置けば、——すなわち、平時における被治者大衆の日常生活の状態に重きを置けば——戦争とか革命とかの非常事件や、これらの事件に際しての帝王・將帥・政治家の行動に着目する場合に比して、はるかに恣意と偶然の支配は少なく、そこにはるかに多くの共通的、法則的なもの認められることは争われぬ。更に、かりに歴史家の興味は特殊と変化とに向けられ、科学者の興味は共通と不変とに向けられるものとすれば、史上上のコレクチヴィストは歴史家よりも科学者——とまではいわずとも、歴史家たるとともに科学者たらんことを期する度強いものだと言ひえらるるであらう。福沢は明らかにそのひとりであつて、在來の歴史がたゞ「國王歴代の系図を詮索し、」あるいは「戦争勝敗の話をしるして講釈師の軍談に類するもの」にはかならぬことに強く不満の意を表し、以上のごときことを暗記、暗誦しても、「天下古

今人事の成り行きを知らず、その互にかゝはりあふ因縁を知らざれば、」それはたゞ無益の骨折りに過ぎぬと言つたのである。

福沢は、数学と独立の精神を鼓吹することに力を傾けた。数学とは、あえて数学といふのでなく、理と数とを重んじ、事実の証拠を求める学問、すなわち科学である。福沢が西洋科学を知り、その的確と精密とに傾倒したのは、大阪で緒方洪庵の塾で蘭学を勉強した時に始まるであらう。洪庵は蘭方医であり、その塾には十冊足らずながらオランダ語の医書・物理書があつた。福沢はそれを読んでその精妙に感嘆し、更に某大名所藏の物理書を借りて、安政三、四年（一八五六、七年）のころ、早くもファラデーの電気理論を知りえたことを語っている。更にさかのぼつて考えれば、福沢が小さいの迷信に遠く、常に実証・実験を重んずる傾向が強かつたのは、一には天性に出たものと見られるが、同時にかれが、当時諸藩の下級士族一般と同じく、扶持米の不足を補うため内職の手工労働に従事して、日常、労働用具を手にし、各種の生産材料を取り扱つたその体験が、おのずからその興味を支配し、その観察を緻密・精確ならしめたものと考えられる。後にはじめて大阪から江戸に下つた時、市中にはいつてます驚いたのは、江戸の工藝の発達であつたと自傳に語っている。かれを驚かした事実というのは、芝の田町あたりの路傍の店で、小僧のこぎりのやすりの目をたゞいて作つたことである。金物細工をする上には何よりもやすりがたいせつである。福沢は体験によつて痛切にそのことを知っている。ところで、たゞのやすりはわけなくできる。しかし、のこぎりのやすりはむずかしい。これを作ることは夢にも考えなかつたところ、それを子供が平氣でやっている。江戸にはいつてますこのことが目に着いたのである。はなはださういのように見えるが、この一小事も、福沢

の興味・観察・思考の方向について、何物かを語っている。福沢自身、後に青年時代の旧知人に興えた手紙の中に、その時代の体験を回顧し、さまざまの手工技術を学んで「刀剣の小道具、金・銀・銅・鉄の性質を知り、自宅にてはげたの内職などいたし、家用をけの輪替へ、せつたのなほしまでかひがひしく働きたるは、生涯の一大所得に御座候」と言っているのは、氣を留めてみてよいことである。この興味と傾向が、福沢をして西洋の科学、ことに物理学・化学にひき着けたと言いうると思う。

物理・化学に驚嘆した後、福沢は英(米)書によって西洋の人文科学を知った。まず知ったのは経済学、次いで倫理学であった。西洋理学によって知りえた自然は、嚴密なる法則の支配する世界であった。次いで知りえた経済学は、人文科学の中では法則科学たる性質の最も濃いものである。ことに福沢が読んだ通俗的、教科書的経済書は、素朴なる態度をもって、自然法則に比すべき経済法則の支配を説いた。理と教と証拠の重んずべきを痛感した福沢にとっては、社会・人事もまた動かすべからざる定則の支配を受けるとの説は、必ず大なる魅惑であつたであらう。その驚喜の情は、後年そのころを回顧した演説の中に、「絶妙の大法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るるに至れり。」とか、「ポリチカル・エコノミーは実におもしろく、その精密なること着々意表にいで、あたかもわれ／＼に固有する漢学主義の心事を顛覆したり。」とか言つたことばに現われている。

これが幕末から明治へかけてのこととて、慶應義塾の旧記録によれば、福沢は慶應四年すなわち明治元年には、アメリカ書ウエーランドによつて経済学を、翌明治二年には同じウエーランドによつて倫理学を塾で講じている。

しからは歴史はどうか、むろん、福沢が歴史と自然科学を同一視したと言ふべきでなく、また歴史

上において物理・化学等におけるがごとき、嚴密なる必然の事前断定を下しうるとは考えなかつたであらう。しかし、少なくとも消極的に、これだけのことは言ひうるであらう。すなわち歴史を單に恣意と偶然とのみが支配するところと見ることに甘んじないこと、これである。すでに福沢のごとく、事物の「理と教と」証拠を求めんと欲する者は、歴史をさかのぼつて、たとえばたま／＼ひとりの家康によつて徳川幕府は定められ、たま／＼ひとりのビスマルクによつてドイツ統一は遂行されたといふごとき説明には満足せぬであらう。そうして何ゆえに、いかにして、との間に対し、家康は家康なるがゆえにかの事を成し、ビスマルクはビスマルクなるがゆえにこの事を成したと言へば、それは何も答えないに等しい。因果必然の連鎖をたどらなければ承知できない者は、必ず家康(またはビスマルク、その他その他)を促してかの事(またはこの事)を成さしめたものは何か、かれらをしてよくそれを成し遂げえさせた条件は何か、を問うであらう。また更にこれらの事情や條件は、はたしてかの特定的人物以外の者には同じ事を成さしめなかつたらうかとの問を含む。この考察は、当然人を導いて普通に通に世の大勢と称せらるる一連の働因に思い至らしめる。世の大勢に注目することは、必ずしも歴史上ににおける特定個人の役割を否認せしむるものではないが、歴史の考察上、恣意と偶然の支配の承認を甘んじない者は、特定の個々人よりも、世の大勢に、より多くの興味を感じるの自然である。福沢は早く多くの史書を読んだ。少年の時中津藩儒白石常人に從學して、歴史は史記をはじめ前、後漢書、晋書・五代史・元明史略等を読み、ことに左傳は最も愛好して、全十五卷およそ十一たび読み返して、おもしろいところは暗記するまでになつていたが、すでに一たび西洋科学の門をくゞつた福沢をもつて見れば、これらの史書は満足しがたいものであつたらう。先に王室系図の詮索または講釈師の軍談

に類するものと評したのは、かつて自ら愛読した史書類に対する福沢の批評とも聞くべきである。福沢のこの傾向を助長する上に最も有力であったと思われるのは、けだしトーマス・バッケルの「英國文明史」の影響であつたろう。それは「文明論之概略」について指摘することができる。もちろん「文明論之概略」は独立の見識に富み、ことにその最後の章における國家独立擁護論は純然たる日本人福沢の主張であつて、むしろバッケルの思想基調とあい隔たるものであるが、しかもこの書の歴史観に関する部分には、明らかにかれに得たと見るべきものが多く、著者自身バッケルの名をあげてその説を引いているところもある。

英國文明史第一巻は、一八五七年に出た。わが安政四年、すなわち福沢が大坂から江戸に出た前年である。バッケルは歴史を進めて法則科学の域に達せしめんとした。この書は、著者の文明の進歩に対する確信と、保守主義に対する攻撃と、暢達自由なる文章などにより、科学信賴の風潮にも投じて出るとたちまち好評を博し、各國語に翻譯せられて、ロシア農民の小屋にさえその訳本が見られたというほど廣く行われた。この文明史がいつごろ日本に渡來したかは今尋ねられないが、慶應義塾では明治四年（一八七一年）ごろから、月六回、福沢のギゾー・バッケル両文明史の講義が行われ、ことにバッケル講義はすこぶる精彩に富んだものであつたと傳えられている。

バッケルはこの書で、歴史を一つの科学に高め、ことに統計的方法によつて文明進歩の法則を打ち立てんことを期した。かれは往々歴史を左右する自然的條件の力を説いたものと見られているが、それは説の半分である。歴史の働因は自然と精神の二つであるが、自然の威力の寛嚴ともに過ぎたるどころでは、精神は發達せず、ひとりその適度なるヨーロッパにおいて、精神が自然を支配するといふのである。精神のうち、人類の進歩は徳と知とそのいずれによるかといへば、徳は靜止して動かぬものであるから、ひとり知の変化と進歩とによる。人類總体の行動は、人類の有する知識の總体の左右するところに任せられる。個人の努力は歴史の経過全体の上から見れば言うに足らず、英雄も時代の産物たるに過ぎぬ。文明の進歩は疑い究めんとする心に正比例し、「輕信」すなわち既成の信仰と慣習を吟味なく保守せんとする精神に反比例する。これがその要旨である。

「文明論之概略」を見ると、明らかにこれに受けたと思われる章句がある。第四章に、人心の変化は統計法によつてよくその定則が立てられるというのがそれ。同じ章で、國の治乱興廢は二、三人のよくするところにあらず、「全國の勢いは進めんとするも進むべからず、とゞめんとするもとゞむべからず。」というのがそれ。第六章に、徳義のことはいにしえより定まりて動かさず、知恵はすなわちしからず、「日に進みて際限あることなし。」というのがそれ。第七章およびほゞそれと同じく書いた「學問のすゝめ」に、「信の世界に偽詐多く、疑ひの世界に眞理多し。」西洋諸國今日の文明は「疑ひの一点よりいでざるものなし。」というのがそれである。

しかし、やゝ専門的にわたる統計法うんぬんは別とし、その他の諸條はあえて他人の教えをまつまでもなく、すでに上述の傾向に徴し、福沢としては十分單獨に考え至りうるところであり、これをバッケルに得たというよりは、バッケルを借りてその胸中の所懐を吐露したと見るべきところも多分にある。福沢のバッケル講義が引例縦横、氣焰万丈のものであつたと傳えられるのは当然であろう。バッケルの原書は一世の好評を博したにかゝわらず、専門歴史家の間にはしろうと論として冷やかに遇せられたきらいがあり、あるいはオーギュスト・コントの歴史観に学んでこれを偏頗に誇張したと評

する者もある。そうしてその批評にも相当の理由があるが、それにもかゝらず、英國文明史は、やもすれば帝王將相の功業の記録にもっぱらで、往々「太鼓とラッパ」の記事に過ぎなかった在來の歴史に對し、十九世紀の科学主義の立場から發せられた不満と批評の表明として十分に有意義の著述であり、在來の史書とは違った別の視角、別の史料の扱い方を、ことに一般讀者層に示して、確かに世論を動かした。「文明論之概略」のわが國における貢獻も、まさにこれに比すべきものがある。よし多くの知識をかれに仰いだとしても、その氣魄・識見・文章に至っては、福沢もとよりバックルに譲るものではない。たとえば、その新井白石の「読史余論」を引き、天下の大勢九変して武家の世となり、武家の世また五変して徳川の代に及ぶと言ったのを評して、九変というもひっきょうたゞ同じ治者階級の内部において政權担当者が変わったというに過ぎず、治者が治者であり、被治者が被治者であることは少しも変わっておらぬ。「概していへば、日本國の歴史はなくして日本政府の歴史あるのみ。學者の不注意にして、國の一大欠点といふべし。」というがごときは、評せらるる人、評する人とその論旨とをあわせて、これをわが學問史上の一壯觀と稱すべきものと思う。

國の治乱興廢は二、三の人のよくするところにあらずという議論も、今なお読むべきものがある。こゝで福沢は、時にあうあわぬということの眞義を論じて、「時勢」とは何かを説いている。孔子も孟子も菅原道眞も楠正成も、みな時にあわなかつた人々であるが、その不遇というのは、しからば何か。帝主諸侯、二、三の人の心にあわなかつたということか。もしも周の諸侯の心がたま／＼孔孟を喜び、後醍醐天皇がたま／＼正成の策を用いたなら、かれらははたして千載一遇の大功を成したであろうか、決してそうではない。周の諸侯に孔孟を用いさせなかつたもの、正成をして死地に陥らしめたものは、

別にある。それがすなわち「時勢」、すなわち、「その時代の人民に分賦せる知徳のありさま」である。こゝで福沢は、政治家と時勢とを航海者と汽船とにたとえ、いかなる人物が現われても、船にその馬力以上の速力を出させることはできぬ、航海者の職掌はたゞこの汽船の機関の力を妨げないで、運轉作用をたくましくせしむるにあり、航海者はいかに巧みであつても、本來その船が持たない力を造ることはありえない、と言っている。

「世の治乱興廢もまたかくのごとし。その大勢の動くに当たりて、二、三の人物國政を執り、天下の人心を動かさんとするも決して行はるべきにあらず。いはんやその人心にそむきてひとりおのれの意に従はしめんとするものにおいてをや。——いにしへより英雄・豪傑の世に事を成したりといふは、その人の技術をもつて人民の知徳を進めたるにあらず。たゞその知徳の進歩に当たりてこれを妨げざりしのみ。」

この説は今日の學者を十分満足させぬであらう。時勢なるものを船長・船員の意志・能力と離れて別に物的に限定せられた船の馬力にたとえることも、嚴格に言えば、不当であらう。この問題、すなわち歴史上における時勢と個人の問題は、今日もまだ論じ盡くされてはおらず、更に多くの嚴密なる実例的、理論的吟味を必要とする実狀にある。私自身のごときも、もとより素朴なる個人主義を取らず、また反対に、單純なる集團主義の偏頗に、なお多くの批評すべきものがあることを感じ、数度の機会にそれをもちしたこともある。しかし、明治八、九年のころ、政府の歴史があつて國の歴史なく、歴史家のしるすところは、系図調べか軍談に類するもののみ多かつたその当時において、これだけの議論が吐かれたことの、學問上、警世上の意義は没すべからざるものであると思う。

そこで、治乱興廢を結局において定める「時勢」なるものは右の通りであるとして、時勢はひっきりよりの衆民の人心のいいであるが、この時勢すなわち民情は、いかにして動くものか。それは単独自発的に、動かんと欲する方向に向かって自ら動くか。あるいは人心は、人心以外、別にこれを動かして、とどまることあたわざらしめる原因があつて動くのか。「文明論之概略」ではそこまでは論じられてないが、四年後の「民情一新」ではこの点に及び、社会を顛覆し、民情を一新するものは蒸氣船・車・印刷・郵便という四つのもの（あるいは言う、究極は蒸氣の一方）の發明くふうであることを強調して説くようになった。しかし、この四者が人心を動かすといつても、四者そのものはいずれも人心の所産にはかならぬと言ふかもしれない。まことにその通りである。たゞ人間は、その自ら産み出したもののために役せられていかんともなしえなくなるというのである。

福沢はこゝで單に十九世紀における民情の急激なる変化を取つて、これを上記四發明に歸しているのであるが、更にこの議論を拡充すれば、一般的にあらゆる時代を通じて、民情すなわち時勢の変化と新技術發明との關係に對して歴史的通則を結論しうるであらう。歴史上における恣意と偶然の支配の容認をがえんじない福沢としては、こゝに至つてその理論の確定地盤に到達した観がある。

この一段の進展において、福沢はだれか西洋學者に示唆を得たかどうかといふことは、興味ある問題である。私の考証しうる限りでは、それは全くない。福沢としてはいわばその思考の当然の結論に到達したといふべきであらう。福沢が蒸氣力に着目したのは早い。慶應二年の「西洋事情」初編でも蒸氣機関・蒸氣船車およびその發明者について語り、この書のとびらには「蒸氣濟人、電氣傳信」の標語を掲げたくらいであつたが、ようやくその考察を進めて、ついに右のごとき理論に到達したので

ある。すでに蒸氣船車の發明にかくのごとき人心變動の作用があるとすれば、更に蒸氣に代わるべき動力の利用が可能となつたら、やはりそのために民情一新すると考へるべきであらう。福沢は後（明治二十六年）に水力發電法の發明採用を見て、「ゆゑ、しきできごと」と言つたことがある。また、將來飛行機が發明せられたら——福沢の生前まだ飛行機なし。——社会的變動の上にならざる効果があるだらうかと想像推究し、箇條を立てて人の意見を求めた書簡（年時不明）が一通残っている。それはいずれも断片的着想以上のものではなかつたが、社会的事物の考察において、福沢の興味・注意がいずれの方向に鋭かつたかを語っている。「鄙事多能」は、福沢のしばしば口にして自ら誇るところであつたが、多能であるとともに、かれはよく鄙事に注意した。洋行すれば、すぐ「西洋衣食住」（慶應元年）を著わした一事にも現われているごとく、かれは常によく衣食住および衣食住の生産に注目する人であつた。「民情一新」を蒸氣力利用法の發明に歸する議論は、二十余年以前、大阪から江戸に下つて来て、到着早々、路傍の家で子供がのこぎりやすりをこしらえているのを見てまず驚嘆したといふ福沢にとっては、当然の歸結であつたと言へるのかもしれない。

福沢は、物的生産力の發展が社会形態をも思想形態をもいやおうなく変化せしめるといふ理論には、必ず異常の興味をもつて耳を傾けたらうと察せられる。但し、常に足の地を離れぬ福沢は、蒸氣力以下の發明採用に上がる民情不満に對しても、これに処すべき対策としては、英國流の議會政治を勧め、爲政者が適時に口滑に更代し、「政權の席上に長座するの弊」なきを期すべしと言つた。

「民情一新」で蒸氣船車等の發明による人心変化といふ場合、福沢は交通便利の増進によつて思想の傳達普及の急速となる一事を念頭に置き、機械發明による經營形態の変化、したがつて階級的對立

の深化、失業の発生、労働の虐使等に及んでいないのは批評を免かれぬところであろう。しかし、当時における西洋文明導入の第一人者であった福沢が、世をあげてこれを謳歌せんとしつつある時に、進歩は混乱とあい伴なうことを同胞に戒めたのは、先覚者の名に恥じなかつたと言いうるであろう。

(雑誌「人間」)

研究

- 一 歴史観上の個人主義・集團主義とはどういうことか。
- 二 「恣意と偶然の支配」とはどういうことか。
- 三 歴史家と科学者とは、興味の向け方はどういうふうに違っているか。
- 四 福沢諭吉の鼓吹したのは、どういう学問精神か。
- 五 かれのいう「数学」とは、どういうものか。
- 六 かれが数学を重んじたことと、その歴史観とはどういう関係にあるか。
- 七 「英國文明史」はどのような歴史観に立っているか。
- 八 福沢諭吉の歴史観と英國文明史とは、どういう関係にあるか。
- 九 「人心の変化は統計法によってよくその定則が立てられる。」とはどういうことか。
- 十 「十九世紀の科学主義」とはどういうことか、よく研究してみよう。
- 十一 かれのいう「時勢」とはどういうものか。「不遇」に対する考え方と結びつけて考えてみよう。
- 十二 時勢を動かすものは何か。
- 十三 民情すなわち時勢の変化と新技術発明との関係に対して、福沢諭吉が歴史的通則を結論したのは、西洋の学者の影響を受けたものか、また、かれ独自の思索の結果か。

十四 全体の文章を大小の段落に分けて整理し

てみよう。

七 源氏・平家・西鶴

こゝには、源氏物語・平家物語・西鶴諸國ばなしの一節を抄出して、わが國の物語・小説が發展して行く姿の一端を示した。

源氏物語は、今から約九百五十年前、ダンテよりも三百年、シェークスピアよりも六百年、ゲーテよりも八百年以前に成った五十四卷の長編小説である。

五十四卷のうち、最後の十卷を除いて、はじめ四十一卷は、光源氏を主人公としてはなやかな生涯を描き、次の三卷は、後継者である薫君らのおいたちを描いている。最後の十卷は、薫君を中心としてその失意の半生を描き、背景を宇治川附近にとっているところから「宇治十帖」と呼ばれる。

十一世紀のはじめごろ本書が生まれるまでには、物語の祖といわれる竹取物語をはじめとして、伊勢物語・大和物語のような歌物語、宇津保物語のような長編小説、落窪物語のような、やゝ写實的な物語が現われていた。源氏物語は、そういう先行作品の影響を部分的に受けたいわけではない。だが、よくそれらを越え、單調な貴族社会を題材として人生の内面的觀察に進み、心理の変化を写している。いつの世にも変らない人間性を描き、同

時に、時に自然の美しい描写をまじえて、人と自然との調和した美を感せしめ、「物のあはれ」によって代表されるほの／＼とした情趣の世界がみごとに展開されている。

作者紫式部は、歌人・学者として令名のあった藤原爲時の娘で、幼いころから才学にすぐれていた。二十二歳のころ、藤原宜孝と結婚したが、結婚生活二、三年で夫と死別したので、数年間未亡人としてさびしく送った後、三十歳ごろ一條天皇の中宮彰子に仕えた。源氏物語は、この年若くして未亡人になったたぐいまれな才女によって、夫を失った悲しさ・さびしさを紛らすために書き出されたのであろうといわれている。

本文に採用したのは、第二卷帚木の巻の有名な「雨夜の品定め」の一節である。

平家物語は、平安時代の公家の勢力が次第に衰えて、鎌倉幕府が創設され、武家政治が確立するまでの間に介在する平家二十年の興亡という歴史的事件に題材を取った歴史小説である。十二巻から成る。武家の争いが主として描かれているので、軍記物語と呼ばれる。軍記物語には保元物語・平治物語・太平記などが含まれる。

この書は、鎌倉時代の初期に作られたものであるから、過渡期における社会の変動・混乱がそのまゝ、作品に反映している。優雅と豪壯、情緒と力、貴族と武士、崇文と尙武、傳統の尊重と否定、このような対立したものが雑然として同居しており、全編人生無常の思想をもって貫ぬかれている。しかして、一読、それらが、生き／＼と浮かび上がってわれわれに迫って来るのを感じる。

文体も、漢文と和文とが織り交せられた和漢混濁文であって、必ずしも整ったものではないが、平安時代の物語とは違った力強さがあり、ことに流れるようなリズムは人を引きつけずにはおかない。

作者は明らかではないが、原作に数人の者が修正増補を加えて現在のようになつたといわれている。これを台本として盲法師たちが琵琶を伴奏として節をつけて語つたのであって、朗読文藝（語り物）として、鎌倉時代から江戸時代にかけて、長く庶民の間に親しまれた。

本文に採用した小督の一節は、平家物語中、古來最も愛された部分であって、哀艶の情趣は、行文の流麗とあいまって、平家の一つの特徴を遺憾なく示している。

「西鶴諸國ばなし」は、「近年諸國咄大下馬」略して「大下馬」ともいわれている。五冊、短章三十五話から成る浮世草子である。諸國を巡行した作者が、旅に得た傳説をもととし、これに中國の傳説や文献に傳えた傳説をまじえて、それらの珍説怪談を文学化したものである。

作者井原西鶴は、本名を平山藤五といい、大阪の有福な町人であつたといわれる。はじめは談林派の俳人として知られたが、四十一歳の年、小説に筆を染め、以後、五十二歳で没するまでの約十年間に、多くの作品を矢継ぎ早に出して、小説作家として不朽の名声をかちえた。

かれの作品は、その生きた時代の社会世相を巧みにとらえて、さまざまな人間の精神、生活を描写したところに特徴がある。こういう元祿前後に現われた小説を浮世草子という

が、かれはその第一人者であった。かれの作品に接する者は、その文章が律語的、印象的、連想的であり、難解であることを感ずるであろうが、そこに人間性の眞実をうがちえいることを発見するであろう。

本文に採用したものは、卷一の一節である。

〔一〕 雨夜の品定め

紫 式 部

つれづれと降り暮らして、しめやかなるよひの雨に、殿上にもをさく人少なに、御宿直所も例よりのどやかなるこちするに、大殿油近くて、ふみどもなど見たまふ。近きみ厨子なる、いろ／＼の紙なるふみどもを引きいでて、中將わりなくゆかしがれば、源氏「さりぬべき、すこしは見せむ。かたはなるべきもこそ。」と、ゆるしたまはねば、頭中將「そのうちとけて、かたはらいたしとおぼされむこそ、ゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、ほど／＼につけて、書きかはしつゝ、も見はべりなむ。おのがじし、うらめしきをり／＼、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見どころはあらめ。」と怨ずれば、やむごとなく、せちに隠したまふべきなどは、かやうにおほざるみ厨子などに、うち置き散らしたまふべくもあらず、深くとりおきたまふべかめれば、これは二のまぢの心安きなるべし。かたはしづつ見るに、頭かく、さま／＼なるものどもこそはべりけれ。」とて、心あてに、それか、かれかなど問ふ中に、言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、をかしとおぼせど、言少なにて、とかく紛らはしつゝ、取り隠したまひつ。

源「そこにこそ多くつどへたまふらめ。少し見ばや。さてなむ、この厨子もこゝろよく聞くべき。」

とのたまへば、頭「御覽じどころあらむこそ、かたくはべらめ。」など、聞えたまふついでに、頭「女の、これはしもと難つくまじきは、かたくもあるかなと、やう／＼なむ見たまへ知る。たゞうはべばかりの情に、手走り書き、をりふしのいらへ、心得てうちしなどばかりは、ずぶんによるしきも多かりと見たまふれど、そも、まことにその方を取りいでむ選びに必ずもるまじきは、いとかたしや。わが心得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をばおとしめなど、かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、おひさきこもれる窓のうちなるほどは、たゞかたかどを聞き傳へて、心を動かすこともあめり。かたちをかしくうちおほどき、若やかにて紛ることなきほど、はかなきすさびをも、人まねに心を入ることもあるに、おのづから一つゆゑづけてしいづることもあり。見る人おくれたる方をば言ひ隠し、さてもありぬべき方をばつくりひて、まねびいたすに、それしかあらじと、そらにかゞはおしはかり思ひくたさむ。まことかと見もて行くに、見劣りせぬやうはなくなむあるべき。」と、うめきたるけしきも恥づかしげなれば、いとなべてはあらねど、われもおぼし合はすることやあらむ、うちほゝゑみて、源「そのかたかどもなき人はあらむや。」とのたまへば、頭「いとさばかりならむあたりには、たれかはすかされ寄りはべらむ。取る方なく口惜しききはと、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそはべらめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠ること多く、自然にそのけはひこよなるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたる趣も見えて、わかるべきこと、かた／＼多かるべき。下のきざみといふきはなれば、ことに耳立たずかし。」とて、いとくまなげなるけしきなるもゆかしくて、源「その品々やいかに。いづれを三つの品に置きてか分くべき。もとの品高く生まれながら、身は沈み、位短くて、人げなき、

また直人の上達部などまでなりのばり、われは顔にて家のうちを飾り、人に劣らじと思へる、そのけちめをばいかゞ分くべき。」と問ひたまふほどに、左の馬頭、藤式部の丞、御物忌にもらむとて参れり。世のすきものにて、物よくいひ通れるを、中將待ち取りて、この品々をわきまへ定め争ふ。いと聞きにくきこと多かり。

さま／＼の人の上どもを語り合はせつゝ、馬頭「おほかたの世につけて見るにはとがなきも、わがものとうち頼むべきをえらむに、多かる中にも、えなむ思ひ定むまじかりける。をのこのおほやけに仕うまつり、はか／＼しき世の固めとなるべきも、まことのうつはものとなるべきを取りいださんには、かたかるべしかし。されど、かしこしとても、ひとりふたり世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上になびきて、事廣きにゆづらふらむ。せばき家のうちのあるじとすべき人ひとりを思ひめぐらすに、足らはであしかるべき大事どもなむ、かた／＼多かる。とあればかゝり、あふさきさるさにて、なのめにさてもありぬべき人の少なきを、すき／＼しき心のすさびにて、人のありさまをあまた見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは、わが力いりをし、なほしひきつろふべきところなく、心になふやうもやと、えりそめつる人の、定まりがたきなるべし。必ずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契ばかりを捨てがたく思ひとまる人は、物まめやかなりと見え、さてたもたる女のためも、心憎くおし測らるるなり。されど、何か、世のありさまを見たまへ集むるまゝに、心に及ばず、いとゆかしきこともなしや。きんたちの上なき御選びには、ましていかばかりの人かはたぐひたまはむ。たゞひたぶるに子めきて、柔らかな

らむ人を、とかくひきつろひては、などか見ざらむ。心もとなくとも、なほしどころあるこゝちすべし。げにさし向かひて見むほどは、さてもらうたき方に罪許し見るべきを、立ち離れて、さるべきことをもいひやり、をりふしにしいでむわざの、あだごとにも、まめごとにも、わが心と思ひ得ることなく、深きいたりなからむは、いと口惜しく、頼もしげなきとがや、なほ苦しからむ。常はすこしそば／＼しく、心づきなき人の、をりふしにつけて、いでばえするやうもありかし。」など、くまなきものいひも、定めかねて、いたくうち嘆く。

馬頭「今はたゞ品にもよらじ。かたちをばさらにもいはじ、いと口惜しく、ねちけがましきおぼえだになくば、たゞひとへに物まめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし・心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、すこしおくれたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけきところだに強くば、うはべの情は、おのづからもてつけつべきわざをや。」など言へば、中將うなづく。頭「さしあたりて、をかしたもあはれとも、心にいらむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ、大事なるべけれ。わが心あやまちなく見過ぎさば、さしなほしてもなどか見ざらむとおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくもたがふべきふしあらむを、のどやかに見忍ばむよりほかに、増すことあるまじかりけり。」と言ひて、わが妹の姫君は、この定めになかひたまへりと思へば、君のうちねぶりてことばませたまはぬを、さうざうしく心やましと思ふ。馬頭、物定め博士になりて、ひゝらぎむたり。中將は、このことわり聞きはてむと、心いれて、あへしらひわたまへり。

馬頭「よろづのことによそへておぼせ。木の道の工匠の、よろづの物を、心に任せて作りいだすも、

臨時のもてあそび物の、その物と、あとも定まらぬは、そばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつゝ、さまを変へて、今めかしきに移りて、をかしきもあり。大事として、まことにうるはしき、人の調度の飾りとする、定まれるやうあるものを、難なくしいづることなむ、なほまことの物のじやうずは、さま異に見えわかればべる。また絵所ゑどころにじやうす多かれど、墨がきに選ばれて、次々に、更に劣りまさるけぢめ、ふとしも見えわかれず。かゝれど、人の見及ばぬ蓬萊ほうらいの山、荒海あらかうみのいかれる魚いさなの姿、唐國たうこくのはげしきけだもののかたち、目に見えぬ鬼おにの顔などの、おどろおどろしく作りたる物は、心に任せて、ひとときは目おどろかして、実じつには似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたゝすみ、水の流れ、目に近き人の家居いけありさま、げにと見え、なつかしくやはらびたる形かたちなどを、静かにかきませて、すくよかならぬ山のけしき、木深こぶかく、世離れてたゝみなし、け近きまがきのうちをば、その心しらひおきてなどをなむ、じやうずはいと勢いきほひことに、わるものは及ばぬところ多かめる。手を書きたるにも、深きことはなくて、こゝかしこ点長に走り書き、そこはかとなくけしきばめるは、うち見るに、かどくしくけしきだちたれど、なほまことの筋をこまやかに書きえたるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一たび取り並べて見れば、なほ実になむよりける。はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりてけしきばめらむ、見る目の情をば、え頼むまじく思うたまへてはべる。そのはじめのこと、すきくしくとも申しはべらむ。」とて、近くゐるれば、君も目しましたまふ。中将いみじく信じて、つらづゑをつきて向かひわたまへり。法の師の、世のことわり説き聞かせむところのこゝちするも、かつはをかしけれど、かゝるついでには、おのゝむつごとくもえ忍びとゞめすなむありける。

(源氏物語)

研究

- 一 「かたはなるべきもこそ」「かたはらいたしとおぼされむこそ」の下に、適当に語句を補ってみよう。他のところでも適当に語句を補って読んで行こう。
- 二 「おしなべたるおほかたのは」はどこに続いて行くか、どの語句の目的語にあつてゐるかなどについて考えてみよう。他のところでも、主語・述語・目的語などの関係をはつきりさせて読んで行こう。
- 三 「と怨ずれば」は下に続いて行くか。続いて行くとすればどこに続いて行くか。次の途中にさしはさんだ語句はどこまでかを考えてみよう。
- 四 「をかしとおぼせど」の主語はだれか。
- 五 「やうく／＼なむ見たまへ知る。」の「見る」「たまふ」はどういう意味か。また「たまふ」は何活用か。

- 六 「おひさきこもれる窓のうちなるほどは」はどういう意味か。長恨歌の「楊家有女。初長成。養在深窓。人未識。」を参考して考えよう。他の部分でも引き歌やふまえた詩を研究しておこう。
- 七 「うめきたるけしきも恥づかしげなれば」の「恥づかし」はだれの氣持か。「恥づかしき人」などの例を参照して考えてみよう。
- 八 「おほかたの世」の「世」はどういう意味か。現在も用いる古語には、現代の意味で考えてはならないものがある。よく辞書を引いて調べよう。
- 九 「次々に、更に劣りまさるけぢめ」の「次に」の下に適当な語句を補って考えてみよう。
- 十 「かゝれど、人の見及ばぬ」の「かゝれど」はどこに続いて行くか。「人の見及ばぬ」の

以下の部分は、どこまでが途中にさしはさんだものか考えてみよう。

十一 各段における馬頭の意見を簡単にまとめてみよう。その理想の女性はどのようなか、

簡単にまとめてみよう。

十二 四 「二」の「漱石の作品に現われた女性」の女性観とこゝの女性観とを読み比べてみよう。

〔二〕小 督

平家物語

ころは八月十日余りのことなれば、さしもなくまなき空なれども、主上は御涙に曇らせたまひて、月の光もおぼろにぞ御覽せられける。や、深更に及んで、「人やある人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。や、あつて、彈正の大弼仲國、その夜しも御宿直に参りて、はるかに遠うさぶらひけるが、「仲國。」と御いらへ申す。「なんぢ近う参れ、仰せ下さるべき旨あり。」と仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ参じたる。「なんぢもし小督が行くへや知つたる。」と仰せければ、「いかでか知りまわらせ候べき。」と申す。「まことや、小督は嵯峨のへん、片折り戸とかやしたる内にありと、申す者のあるぞとよ。あるじが名をば知らずとも、尋ねてまゐらせてんや。」と仰せければ、仲國、「あるじが名を知り候はでは、いかでか尋ね会ひまゐらせ候べき。」と申しければ、主上げにもとて、御涙せきあへさせまします。仲國つく／＼物を案するに、まことや、小督の殿は琴ひきたまひしぞかし。この月の明かさに、君の御事思ひいでまゐらせて、琴ひきたまはぬことはよもあらじ。内裏にて琴ひきたまひし時、仲國笛の役に召されまゐらせしかば、その琴の音はいづくにても聞き知らんするものを。嵯峨の在家幾ほどかあらん。うちまはつて尋ねんに、などか聞きいださであるべき

と思ひ、「さ候はば、あるじが名は知らず候とも、尋ねまゐらせ候べし。たとひ、尋ね会ひまゐらせ候とも、御書など候はずば、うはの空とやおぼし召され候はんすらん。御書を賜はつて、参り候はん。」と申しければ、主上、げにもとて、やがて御書あそばしてぞくだされける。

「寮の御馬に乗りて行け。」と仰せければ、仲國、寮の御馬賜はつて、明月にむちを揚げ、西をさしてぞ歩ませける。「をじか鳴くこの山里」と詠じけん嵯峨のあたりの秋のころ、さこそは哀れにもおぼえけめ。片折り戸したる屋を見つけては、この内にもやおはすと、控へ／＼聞きけれども、琴ひく所はなかりけり。み堂などへも参りたまへることもやと、釈迦堂をはじめて堂々見まはれども、小督の殿に似たる女房だにもなかりけり。むなしう帰ら参りたらんは、参らざらんより、なかく／＼おしかるべし、これよりいづちへも、迷ひ行かばやとは思へども、いづくか王地ならぬ。身を隠すべき宿もなし。いかゞせんと案じわづらふ。まことや、法輪はほど近ければ、月の光に誘はれて、参りたまへることもやと、そなたへ向いてぞあくがれける。龜山のあたり近く、松の一むらある方に、かすかに琴ぞ聞えける。峯のあらしか松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、こまを早めて行くほどに、片折り戸したる内に、琴をぞひき澄まされたる。控へてこれを聞きければ、少しもまがふべうもなく、小督の殿のつま音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫をおもうて恋ふと読む想夫恋といふ樂なりけり。仲國、さればこそ、君の御事思ひいでまゐらせて、樂こそ多けれ、この樂をひきたまふことの優しさよと思ひ、腰より横笛抜きだし、「ちつ。」と鳴らいて、門をほと／＼とたけければ、琴をばやがてひきやみたまひぬ。「これは、内裏より仲國が御使に参りて候。あけさせたまへ。」とて、たゞけどもたゞけども、とがむる者もなかりけり。や、ありて、内より人のいづる音しけり。

うれしう思ひて待つところに、錠をはづし、門を細めにあげ、いたいけしたる小女房の、顔ばかりさしいだいて、「これは、さやうに、内裏より御使など賜はるべき所でもさぶらはす。もし門違にてぞさぶらふらん。」と言ひければ、仲國、返事せば、門たてられ錠さされなんすことや思ひけん、是非なく押しあけてぞ入りにける。

妻戸のきはなる縁にゐて、「何とて、かやうの所に御渡り候やらん。君は御ゆるにおぼし召し沈ませたまひて、御命もすでに危ふくこそ見えさせまし候へ。かやうに申さば、うはの空とやおぼし召され候らん。御書を賜はつて参りて候。」とて、取りいだいて奉る。ありつる女房取り次いで、小督の殿にぞ参らせける。これをあけて見たまふに、まことに君の御書にてぞありける。やがて御返事書いて引き結び、女房の装束一かさね添へてぞいだされたる。仲國、「御返事の上は、とかう申すに及び候はねども、別の御使にても候はばこそ。ちぎの御返事承らでは、いかでか帰り参り候べき。」と申しければ、小督の殿、げにもと思はれけん、自ら返事したまひけり。「そこにも聞きたまひつらんやうに、入道あまりに恐ろしきことをのみ申すと、聞きしがあさましさに、ある夜ひそかに忍びつ、内裏をば紛れいでて、今はかゝる所のすまひなれば、琴ひくこともなかりしが、あすより、大原の奥へ思ひ立つことさぶらへば、あるじの女房、こよひばかりのなごりを惜しみ、今は夜もふけぬ立ち聞く人もあらじなど勸むるあひだ、さぞ昔のなごりもさすがゆかしくて、手慣れし琴をひくほどに、やうも聞きいだされけりな。」とて、御涙せきあへたまはねば、仲國もそごろにそでをぞ絞りける。やゝあつて、仲國涙をおさへて申しけるは、「あすより大原の奥へおぼし召し立つこと候は、さだめて、御さまなどもや替へさせたまひ候はんすらん。しかるべうも候はず。さて、君をば何

とかしまゐらせたまふべき。ゆめ／＼かなひ候まじ。あひかまへて、この女房いだしまゐらすな。」とて、供に召し具したる馬部、吉上などとぞめおき、その屋を守護せさせ、わが身は寮の御馬に打ち乗つて、内裏へ帰り参つたれば、夜はほの／＼とぞ明けにける。仲國、やがて寮の御馬つながせ、女房の装束をば、はね馬の障子に打ち掛けて、今はさだめて御寝もなりつらん。たれしてか申すべきと思ひ、南殿をさして参るほどに、主上は、いまだゆふべの御座にぞまし／＼ける。「南にかけり北に向かふ、寒温を秋のかりにつけがたし。東にいで西に流る、たゞ瞻望を曉の月に寄す。」と、御心細げにうちながめさせたまふところに、仲國、つと参りつ、小督の殿の御返事をこそ参らせけれ。主上、なめならず御感あつて、「さらば、なんぢやがて夕さり具して参れ。」とぞ仰せける。仲國、入道相國のかへり聞きたまはんところは恐ろしけれども、これまた勅諭なれば、人に車借つて、嵯峨へ行き向かふ。小督の殿、参るまじき由のたまへども、やう／＼にこしらへ奉りて、車に乗せ奉りて、内裏へ参りたりけり。

(平家物語)

研究

一 「南にかけり」の詩は、その文章にどうい
う効果を與えているか。和漢朗詠集に「南翔
北鸞、難_レ付_二寒温_一於秋鴻」。東出西流、只寄_二
瞻望_一於曉月。」と出ている。

二 朗読して文章の調子を味わおう。
三 七五調・五七調の交錯を分析して考えよう。
四 従来名文といわれているものについて研究
しよう。

〔三〕 大晦日はあはぬ算用

井原西鶴

かや、かちぐり、神の松、やまぐさの賣り声もせはしく、もちつく宿の隣に、すゝをも拂はず、二十八日までひげもそらず、朱鞆の反を返して、「春まで待てといふに、せひに待たぬか。」と、米屋の若い者をにらみつけて、すぐなる今の世を横に渡る男あり。名は原田内助と申して、隠れもなき浪人、廣き江戸にさへ住みかね、この四、五年、品川のふち茶屋のあたりに店借りて、朝のたぎぎに事を欠き、夕べの油火をも見ず。これは悲しき年の暮れに、女房の兄、半井清菴と申して、神田の明神の横町に薬師あり。このもとへ無心の状をつかはしけるに、たび／＼迷惑ながら見捨てがたく、金子十兩包みて、上書に、「貧病の妙薬金用丸よろづによし。」としるして、内儀の方へ送られける。内助喜び、日ごろ別して語る浪人なまへ、「酒一つ盛らん。」と呼びにつかはし、さいはひ雪の夜のおもしろさ、今まではくづれ次第の、しばの戸をあけて、「さあこれへ。」と言ふ。以上七人の客、いづれも紙子のそでを運ね、時ならぬ一重ばかり、どこやら昔を忘れず、常の礼儀過ぎてから亭主まかりいでて、「私、しあはせの合力を請けて、思ひまゝの正月をつかまつる。」と申せば、おの／＼、「それはあやかりもの。」と言ふ。「それにつき上書に一作あり。」と、くだんの小判を出せば、「さても軽口なる御事。」と、見てもまはせば、杯も数重なりて、「よい年忘れ、ことに長座。」と、千秋樂をうたひ出し、爛なべ・塩辛つばを手ぐりにしてあげさせ、「小判もまつ、おしまひ候へ。」と集むるに、十兩ありしうち、一兩足らず。座中みなほり、そでなど振るひ、前後を見れども、いよ／＼ないにきはまりける。あるじの申すは、「そのうち一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覚え違へ。」と言ふ。「たゞいままで確か十兩見えしに、

めいよのことぞかし。とかくはめい／＼の身晴れ。」と、上座から帯を解けば、その次も改めける。三人めにありし男、澁面つくつて、ものをも言はざりしが、ひざ立てなほし、「浮世には、かゝる難儀もあるものかな。それがしは、身振るふまでもなし。金子一兩持ち合はすこそ因果なれ。思ひもよらぬことに一命を捨つる。」と、思ひ切つて申せば、一座口をそろへて、「こなたに限らず、あさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらず。」と申す。「いかにもこの金子の出所は、私持ちきたりたる徳乗の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩式歩に昨日賣り候こと、紛れはなけれども、をりふし悪し。常々語り合はせたるよしみには、生害に及びしあとにてお尋ねあそばし、かばねの恥を、せめては頼む。」と申しもあへず、革柄に手を掛くる時、「小判はこれにあり。」と、丸行燈の陰より投げ出せば、「さては。」とことを静め、「ものには念を入れたるがよい。」と言ふ時、内証より内儀声を立て、「小判はこの方へ参つた。」と、重箱のふたにつけて座敷へ出される。これは宵に、山の芋の煮しめ物を入れて出されしが、その湯氣にて取りつきけるか、さもあるべし。これでは小判十一兩になりける。いづれも申されしは、「この金子、ひたもの数多くなること、めでたし。」と言ふ。亭主申すは、「九兩の小判、十兩の僉議するに、十一兩になること、座中金子を持ちあはせられ、さいせんの難儀を救はんとために、御いだしありしは疑ひなし。この一兩わがたに納むべきやうなし。お主へ返したし。」と聞くに、たれ返事のしてもなく、一座異なものになりて、夜ふけどりも鳴く時なれども、おの／＼立ちかねられしに、「この上は亭主が所存の通りにあそばされてたまはれ。」と願ひしに、「とかくあるじの心まかせに。」と申されければ、かの小判を一升ますに入れて、庭の手水鉢の上に置きて、「どなたにても、この金子の主、とらせられて御歸りたまはれ。」と、お客ひとりづつ立たしまして、一度一度に

戸をさしこめて、七人を七度に出して、そのうち内助は手燭ともして見るに、たれとも知れず、取つて帰りぬ。あるじ即座の分別、座慣れたる客のしこなし、かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし。

(西鶴諸國ばなし)

研究

- 一 「すぐなる今の世を横に渡る男」という語句にはどういふおもしろさがあるか。ほかにもこういう表現がないかさがしてみよう。
- 二 「奥の細道」と読み比べてみよう。同じ俳文の系統でありながら、どういふ違いが感ぜられるか。
- 三 この文章の中に見える封建的な考え方を指摘してみよう。
- 四 この文章には非合理なところがありはせぬか、調べてみよう。
- 五 源氏物語・平家物語に比べて、内容上・表現上どういふ点に新しさが見られるか。

八 社 会

こゝには、ほんとうの人間として老漁夫を歌った詩、きのことりに現われた十年間の農村の推移を描いた小説の一節を載せた。

人間は、神の恵みを受けて、自然の一員として、家庭人・社会人として生活している。われわれは、その恩恵を受けるだけでなく、神の前にも悔いることのない、たくましい近代化された人間となり、そうすることによってあらゆる環境を民主化し、新しい社会を形作るように努力しよう。

〔一〕 老漁夫の詩

山村 暮鳥

人間を見た。

それを自分はこのとしよったひとりの漁夫に見た。

漁夫はなぎさにつつ立っている。

漁夫は海を愛している。

そしてこのとしになるまで、

どんなに海をながめたか。

漁夫は海を愛している。

いまもこの生きている海を……。

じつと目をすえ、

海をながめてつつ立ったひとりの漁夫。

このたくましさはよ。

海いっばいか。

海いっばい、

否、海よりも大きい。

なんというすばらしさであろう。

このすばらしさを人間に見る。

お、海よ。

自分はほんとの人間を見た。

この鉄のような骨節ほねぶしを見ろ。

このあかがねのような胴体を見ろ。

額の下でひかる目を見ろ。

あゝこのゆううつな額。

深く、深く、食いこんだその太い力強いしわをよく見ろ。

自分はほんとの人間を見た。

この漁夫のすべては語る、

かつて沖合いで見た山のような鯨を、

たけり狂った断崖がけのような波々を、
 それからおもわずひざまずいたほど、
 うつくしく且つおごそかであったよあけの太陽を。
 あゝこのおおくとしてみはてのつかない大青うなばら。
 大うなばらもこの漁夫の前には小さい。
 波はよせて来て、
 そこにだけ、
 漁夫のその足もとを洗っている。

研究

- 一 作者は、この詩において、どのようなことを言おうとしているのか。
- 二 それは、どのような語句に表現されているか。
- 三 この詩を読んで感じたことを文章にまとめよう。
- 四 山村暮鳥という人はどういう詩人か。

- 五 山村暮鳥の詩で、ほかにどんな詩を知っているか。好きな詩をあげよう。その詩についての感想をも述べよう。
- 六 この詩を朗読しよう。
- 七 自分で詩を作るなら、自作の詩の朗読もしよう。

〔二〕 生活の探求

島木健作

春から夏へかけて日照りが続いた代わりに、秋にはよく雨が降った。しかし百姓にとつてしあわせなことには、夜のうちに降って朝までには晴れるという日が多いのであった。そういうある朝早く、平藏のところの源次が誘いに來た。

「きのこ狩りに行きましょう。ゆんべはよいから降ったけに、きょうはきつとすばらしいですせ。」いつでもきみの都合のいい日に一度誘ってくれと、かねて駿介はかれに頼んでおいたのだった。

「雨あとの山はよくすべるから、足ごしらえはしつかりして行った方がいい。」と、源次が言うので、駿介はじかたびをはいてゲートルを巻いた。ゲートルは学生時代のが、よれよれになりながらまだ取ってあったのだった。源次もじかたびだった。

「晝の飯はどうする。」ときくと、

「欲張りだなあ。そんなにとる氣かね。一かたけぶんのきのこは晝飯前にはらくにとれっから。」と笑われた。それから、入れ物をどれにしようという／＼尋ねた末、あまり大きくはないが、深さはかなりなかごがあったので、

「これにしようか。しかしこれも欲張りの方かな。」と笑うと、

「慣れたもんなら、それに八分目はとりますせ。」と言うので、それを持って行くことにした。

かごのひもを腕に通して肩に掛け、落ち葉をかく時のためにもと竹のつえを持って、駿介は源次のあとに従った。

かれらは山にさしかゝった。家を出る時はまだ少し薄暗かったのが、そのころになつてすっかり明るくなる。遠くからはたゞ薄青く見えていた山が、日がのぼつたのと、こつちがだん／＼近づいて行くのと、見る／＼消えて行く青いもやのかげから、多彩な秋の色を現わしはじめた。針葉樹と闊葉樹がまじりあつていたので、色もまだらな美しさであった。まだ十月なので、くすれたようなところはなかった。それらが夜來の適度な雨にぬれて、しつとりとしていて、そうしてそこへ朝日がのぼって來たながめは、落ち着いた深い美しさであった。雨あがりの山の上からの風は冷え／＼として、洗われるようなすが／＼しさ、氣持のよさであった。

「駿介さんは食えるきのこ食えないきのことわかりますか。」と、山を登りながら源次がきいた。「たいていわかるつもりだがね。この山でとれるきのこといえば、どんなのがあつたつけなあ。名まえだけは一通り知っているつもりだが。まつたけは別として……はつたけ、いぐち、たまごだけ、しめじ、じごぼ、そうめんだけ……。」とあげて、そのあとにまだ何かあるように思い出せなかった。

「それから、ねすみだけ。」と源次が言った。「そう／＼、ねすみだけ。ねすみだけというのがあつたつけなあ。あれはどんなふうのだったかな。」「それ、幹が太くつてさ。色はちょっと赤みがかった紫色で、……ばかにでかいやつさ。ほうきだけつていう人もある。」

「そうめんだけとどつちが大きかったかしら。」

「比べものになるもんか。ねすみの方が大きい……第一、色が違う。そうめんは黄色だし。」

「あゝ、そうだね。」

忘れていたきのこの形や色や、手先に折れるもろい感触や、そのかおりまでが、かれの記憶の中に次第にはつきりして来た。

「駿介さんは、子供の時にはきのこ狩りに来たことはあるんだろう。」

「あるよ。よく来たがね。しかし、おれにはまつたけはとれなかった。みんなおとなのうまい連中にとられてね。——おれの子供のころには、でも、今ほどのきのこ狩りといってみんな騒がなかったように思うがな。」

「それだけせちがらくなつたのさね、世の中が。」と、源次はおとなびたことを言った。

ぬれた山道はよくすべつた。落ち葉がかなり道を埋めていたが、むき出しの赤土の所があつて、そこが特によくすべつた。かしゃくぬぎやちしゃの木などの落ち葉の上はそれほどではないが、松の落ち葉の上はよくすべるような気がした。

「じかたびよりや、わらじの方がよかつたかしれん。」

あやうくひざを突きそうになつて、踏みこたえながら、源次が言った。

道が狭くなつて、両側から木の迫っている所では、両側の木に渡しかけてあるくもの巢に、しばしば顔を引っかけた。そういう所では、道が暗いのでわからないのだった。あわてて逃げて行くくものはかなり大きくて、腹の黄色い、みな一つ種類のものであつた。

「どれ、代わろう。」と、駿介が先に立つて進んだ。かれはつえを持っていて、源次は持っていないからである。注意して見て、そのついでくもの巢を打ち拂い打ち拂い行くのであつた。廣々とした見晴らしのいい所へ出たので、ふたりは振り返つて見た。道がS字型に曲がりくねつて

いる、ちょうどそのまん中あたりに四、五人がかたまり、少し離れて二、三人が見える。かなり下で、人の姿も黒く見えるだけだが、いずれもきのこ狩りの連中であることに違ひはない。自分たちはずいぶん早く来たのだなと、駿介は思った。

そこからはまた源次が先に立つて、かれは今までよりもいっそう急ぎ足になつた。あとから続いて来る者たちのことが頭にあるのに違ひなかつた。そして、とある道の別れ目に来ると、

「こゝからおりよう。」と、山の腹を下へすん／＼おりて行つた。そこは北向きの谷で、そこをおりた所一帯が、この山でのきのこ狩りの場所として知られていた。松がかなりな林を成しているのはそこだけで、まつたけはそこ以外ではほとんどとれなかつたから、その松林を中心とする一帯が、自然きのこ狩りの場所にきまつたわけだ。

そこへおりて行つて、ふたりは意外な驚きを持った。なんとということだ。早いなどと思つていたかれらは最も遅れた方だつた。男・女・子供・年寄り、実にたくさんな人数が、向こうの木の下、その木の切り株のまわり、この灌木の根もとというふうに、思ひ／＼の所に、うすくまつたり、及び腰になつたりして、競つているのだった。

「こりや。」

源次はちよつとあつげに取られたふうで、そのさまをながめていた。

ともかく松林の方へ行つてみよう、ふたりはそこを横切つて行つた。途中、知つた顔などに会うと、源次は、

「おっさん、早いなあ。」などと笑いかけて、近づいて行つて、

「だいぶとったかね、もう。」と、手もとにおいてあるかごをのぞきこんだりした。しかし、言われた方は、「うゝ。」とか、「あゝ。」とかいうようなことを口の中でもぐぐぐ言うばかりで、ふきげんにむつりして、手は少しも休めなかった。かごの中をのぞきこむ源次の方を、険しい目つきでじろつと見る者もあった。

むろんそういうような者ばかりではなかった。普通にあいさつする者もあり、こつちが笑いかければ向こうも笑い、「たんととれましたか。」ときけば、「いや、きょうはいっこうだめで。」などと答える者もあったが、そしてそういう者の方がむしろ普通ではあったが、しかしそこにも何かのこだわりのようなものを感じないではいられなかった。決して淡白ではなかった。遅れて新しく加わって来た自分たちが、一種の目をもって見られていると感じさせられないわけにはいかなかった。

そういうことが三度、四度くり返された後には、源次ももうかれらには口をきかなかつた。青年らしく敏感なところのあるかれは、かれ自身もむつりした顔つきになって、ところどころ落ち葉や草に隠れて切れてしまっている細い道を、松林の方へとたどった。駿介もだまってそのあとから落ち葉を踏んだ。

「まつたけはきょうはもうだめかもしれん。」

松林の中へはいると源次は言った。

「もうみんなに荒らされてしまっているだろうから。」

それは駿介にもそう思えた。ほかのきのこはともかく、まつたけはこの山では豊かであるとはいえなかった。始終來慣れて、勝手を知っている者にでなければとれないといわれていた。それだけに、

それは人々に珍重された。今ふたりが来る途中に会った人々は、むろん松林を歩きまわったあとであらう。

松林の中は薄暗く、しめつぽかった。東の方があいているので、朝のうちは日がさすらしく、松の葉の間からの光がうすたかい落ち葉の上にちら／＼と細いしまを作つて美しかった。露が上からばらばらと落ちた。駿介はところどころ落ち葉の中につえを突っこんでみたりしながら行った。林の中は森閑として人影の見えないのは意外であった。

源次が「このあたりで。」と言う所へ足を止めて、あちらこちら落ち葉を掻き起しにかゝつた。一つも見つからなかった。菌糸で白くなっている所は、このへんこそと思つて、念入りに捜してみるが見つからない。まだ少し時機が早いのではないかと思われるほどだ。だれかがたつた今引つかきまわしたらしい跡がところどころにあった。

ふと人のけはいがしたので、ふたりは向こうを見た。男がひとり、十間ほど離れた木の陰に立っている。こつちに見られたと氣づくくと、かれはそ知らぬふうでそゝくさと立ち去りそうな様子を示したが、その時、源次が、

「やあ、兼助さん。おはよう。」と、声をかけて近づいて行つたので、かれは立ち止まった。

「早いな、兼助さんは。どうな、成績は。うまいとこだいぶやつたんやろう。」

「いや、なあに。」と、源次よりも、七、八つも上に見られるその青年は、愛想けもなくもつそりそこに突っ立っていた。

「どれ、まあ、一つ見せてつか。」と、源次は相手のそぶりにはとんじゃくなく、無遠慮に言つて、

かれが左手に下げているかごに手をかけて中をのぞいた。上に何か木の葉でもかぶせてあるとみえて、かごの中に手を突っこみながら、

「ほう、ある、ある。早いとこやりおつたなあ。——駿介さん、まあとつくと見たがええ。」と、こつちを振り返った。駿介はたゞ笑っていた。

「なんだな。兼助さんなんぞは、いい根太を知つとるけに、やっぱしわしらなんぞとは違うんだな。わしらはまだ慣れんもんじゃけに、いっこうに根太も見つかりやらん。——どうかな兼助さん。わしらは根太を教えてくれなれどそんなむちゃは言わんが、あんたの行くところさわしらもいっしょに連れてってくれんかな。そしたらわしらにも、どんな所をどう捜したらいいかがだいたいわかるによつて。」

源次はそれを言いながら、にや／＼笑っていた。

「根太なんて、わしは何も知りやせんだから。」と、兼助はぶつつりと言った。

「根太をきくことは禁物や。この山からまつたけが根絶えてしまつたらたいへんやからなあ。わしらはたゞおまえさんのあとからついて行かせてくれりや、それでいいんだ。」

「わしら、おまえさんら以上のことは何も知りやせん。」

「まあ、そう言わんと。」と、源次はしつこくからんだ。

「わしはきょうはこれでもう帰るんやけに、失敬するで。」

兼助は、そう言い放つて、道を林の出口の方へ向かつてさつさと歩きはじめた。それで源次はそれ以上はまといつかなくなつた。かれは去つて行く兼助のうしろ姿を見送つて、「ふん。」と言つて、なせ

かからかうような、あざ笑うような皮肉な笑いを浮かべていた。

ふたりはそれからなおも奥へ向かつて進んだ。源次がまず、根太の一つを見つけて出した。根太といふのは、まつたけのありかを、何のゆえか、この地方ではそう呼び慣らしているのである。まだかさを開かぬ、ちようどいい大きさなのが、ぞつくりとみごとなまでにそろつて、深々と落ち葉をかすき、ひっそりとしていた。これに氣をよくしてなおも掻き起している、今度は駿介が一つ見つけたが、それは大きさが一寸にも足らぬものから、まるで豆粒みたいなものに至る一群だつた。しかし源次が、

「そのくらいなのは、丸つこのまゝきじょうゆで煮て、きりつと煮しめりや、こななうまいものはそうたんとはないせ。」と言つたので、その豆粒みたいなものでたんねんに一々拾つた。

しかし、それからはどうしたものか、かれらはまつたけには全然めぐりあわなかつた。いいかげん疲れたし、あきらめて、もう外へ出ようかと思ひながら、なお未練があつて、もう少し、もう少しとねばつていた。よほど奥へはいつて、林の向こうの出口もま近かと思われた時、源次が、だまつてすうつと駿介のそばへ寄つて来た。笑いを忍んでいるような顔で、駿介のひじを突つた。そして、

「あれ、あれ。」とさゝやくように言つて、すつと向こうを指さした。

駿介が見ると、ひとりの男が、こつちにうしろ向きになつて、腰をかゞめている。「だれだろう。」と思うまでもなく明らかだつた。それはたつた今別れて来た、そしてもう帰つたはずの兼助であつた。じつとそのうしろ姿を見つめている源次の顔には、再びさつきの冷笑の色が浮かんだ。

「はゝゝゝ。」

突然、源次は大きな声で笑いだした。そばの駿介もびっくりさせられたほどの、兼助の手前、思わ

すはっとさせられたほどの大きな声であった。しかし、源次は明らかに兼助にあてつけたので、露骨なあざけりの心をこめて、「は、は、は、は」と、人をばかにしたような笑いをなおも続けていた。

兼助はびっくりしてうしろを振り返った。そうしてふたりを認めた。すぐにまたくるつと向こうを向いて、木と木との間を縫うようにして、こそ／＼とかれはどこかへ姿を消してしまった。

「ふん、あほうめが。」

源次は逃げて行くかれのうしろからの、しった。

「たかがまつたけぐらいになんじゃ、あのさまは。駿介さん、村のやつらはな、きのこ狩りにはみなあゝしたふうなんだぜ。ことにまつたけ狩りにはな。夜明け方に起きて、ひとりでこっそり山へ来て、大きなやつをとったあとには落ち葉をかぶせて、根太を絶対に人には知られんようにしておく。自分の見つけた根太は、ほかの者には、どんなに親しい者にも絶対祕密で、もしも人に教えたら、必ず一、二年の間にまつたけは山に絶えてしまう。——大まじめでそんなことを信じているんだから、ばか／＼しくって話にならないや。年寄りならともかく、青年が、あの兼助なんてやつまでがさ。あいつはあれでも青年團の分團長か何かなんだぜ。わしはそれを知っているから、さっきもあゝ言っておまえの行くところ連れてってくれて、いやがらせをやったのさ。いつかこんなことがあった。わしの東京にいるいとこ遊びに来たんだ。ちょうど今時分だった。町の者だからまつたけ狩りなどおもしろがるだろうと思って、本人もそう言うもんだから、しかしわしらはとんと根太は知らんし、せつかく遠くから来た者を失望させてはと思ったので、まつたけ狩りではくろうと言われているおやじに、いっしょに連れてってくれと頼んだんだ。くれ／＼もそう言って頼んだ。わしは用事があってそ

の日は行かなんだ。ところが晝になって帰って来たのを見ると、やつこさん、妙にぼんやりしている。つまらなそうにしている。かごの中を見ると、はつたけとしめじがほんのちよつびりだ。まつたけなんぞ一本だってありゃしない。話を聞いてみると、そのおやじめ、ひどいやつで、どうやら山の中でいところをまいてしまったらしいんだ。まつたけの松林まで行かないうちにさ。いとこはぐれた場所を動いちゃいかんと思つてそこにいた。そしたらよほどたつてから、ひょっこり現われて、けろつとして、やあこゝにいたのか、もう帰ろう、と言うんだそうだ。それできつねにたまれた感じで帰つて来たんだ。万事がそういったようなふうだ。秋の山のきのこ狩りっていえば楽しいはずのものが、互にじろ／＼人の顔をうかぶったり、こそ／＼と人から隠れたり、露骨にひじを突つ張りあつたりしてやっている。町の連中が遊山にきのこ狩りをやるのとは違つても、もう少しなんとか朗らかにやれんものかなあ。」

これは一体どういふことなのであろうか。

駿介は少年のころの山のきのこ狩りを、あまりはつきりとはないが、記憶している。

そのころからもちろんそれは遊山ではなかった。それは食うための仕事の一つに違ひなかった。しかし、それから十年を経た今日、かれが話に聞き、また実際に目にも見、感じもした事実・雰囲氣といふものは、当時は知らなかった。

当時からそうであつたのかもしれない、かれが知らなかったといふだけのことかもしれない。しかし、きのこ狩りといへば隣近所誘いあわしてたくさんそろつて行くのが普通で、とつたまつたけをその場で焼いて、みんなでにぎやかに酒をくんだなごやかな情景などが目に残っているところからすれば、今

とこのころと、そのまゝ同じであるとは決していえないであろう。

とって来たきのは塩水につけ、少しおいてから洗って水を切り、きじょうゆで、またはそれに砂糖を少し入れて煮る。これは百姓には非常に喜ばれる。百姓にとってはむしろせいたくな副食物だ。しかし、きのこをとるほんとうの目的は更にその上にある。塩水で洗ったものを乾燥する。そしてたくわえておく。これはしいたけの代用に使われるのである。正月に、盆に、祭に、法事に、何かの祝いに、人々が集まって食事をするとすれば、この地方ではまず五目ずしを作る。五目ずしはしいたけを要求する。そのための現金支出は決して少ないとはいえない。そうしてそのしいたけの代用品としてたくわえるには、決して少量のきのこであることはできない。さればこそ、かれらは互に競うのである。

このような意味を持つきのこ狩りが、百姓の生活の中において占める地位が、年ごとに重くなって来たものであろう。十年前には、なお余裕のある遊びの氣持で行われることを許されたものが、今日ではもはや許されなくなったのであろう。

許されなくした事情はいろ／＼であらう。現金支出が百姓の経済をいよ／＼重く圧して来たのであろう。山野に自生するものによつて、たとえ小さくても、現金支出の道の一つをふさぐ見こみが立つとすれば、そこへはもう一銭も出すことを好まぬのであろう。今まであまり山へは出かけなかつた者も、われもわれもと出かけるようになるだろう。きのこの産出は、相対的にも絶對的にも減少して来ずにはいなかろう。結果はかれら相互の競いあいとなり、かつては目立たなかつた微妙な感情の上からみあいも、そこには生じて来るわけだろう。十年間にいろ／＼なものが変わつてゐる。

農民生活の推移がこのよう小さな一点を通してものぞかれる。

何を見ても、聞いても、たゞ見過ごし、聞き過ごされるといふものがない。みな、さまざまな感想を刺激されることばかりである。

愉快に一日を過ごすためにやつて来た山のきのこ狩りも、駿介を單純にたゞ喜ばすだけというわけにはいかないのであつた。

(生活の探求)

研究

- 一 「遅れて新しく加わつて来た自分たちが、一種の目をもつて見られている。」と駿介たちが感じたのは、どうしてだろう。人々はどのような態度でかれらを迎えたのか。
- 二 人々が根太のあり場所を隠して他人から見られまいとしているのは、なぜだろう。どうして、そのような氣持になつてゐるのか。
- 三 駿介たちのきのこ狩りと村人たちのそれとは、その目的が違つてゐる。どのような点で違つてゐるか。そのような違いがどのような結果をもたらしたか。
- 四 きのこ狩りをするにしても、駿介たちの小さいころと、十年後の当時と違つて來てゐる。この小説に書かれてゐる当時の農村の狀態を考へてみよう。
- 五 「現金支出が百姓の経済をいよ／＼重く圧して來た」結果、百姓はどのようなことをすることになつたか。
- 六 「きのこの産出は、相對的にも絶對的にも減少して來ずにはいなかろう。」とは、どのようなことをいつてゐるのか。
- 七 この作品に現われた、農村經濟の十年間の變遷、また、現在われ／＼の見ることできる農村の現狀などについて、調べた結果を話

われわれの國語

三

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 13, 1950)

昭和二十四年六月二十七日
昭和二十五年十月十三日
再版發行

定價 金三十八円

私たちの國語研究会

代表者 佐藤正憲

東京都中央区銀座七ノ四

株式会社 秀英出版

代表者 有光次郎

東京都新宿区市谷加賀町一三

佐久間長吉郎

東京都新宿区市谷加賀町一三

大日本印刷株式会社

印刷所

印刷者

發行所

株式

秀英出版

東京都中央区銀座七ノ四
電話銀座(57)六八二五番

(二) 生活の探求

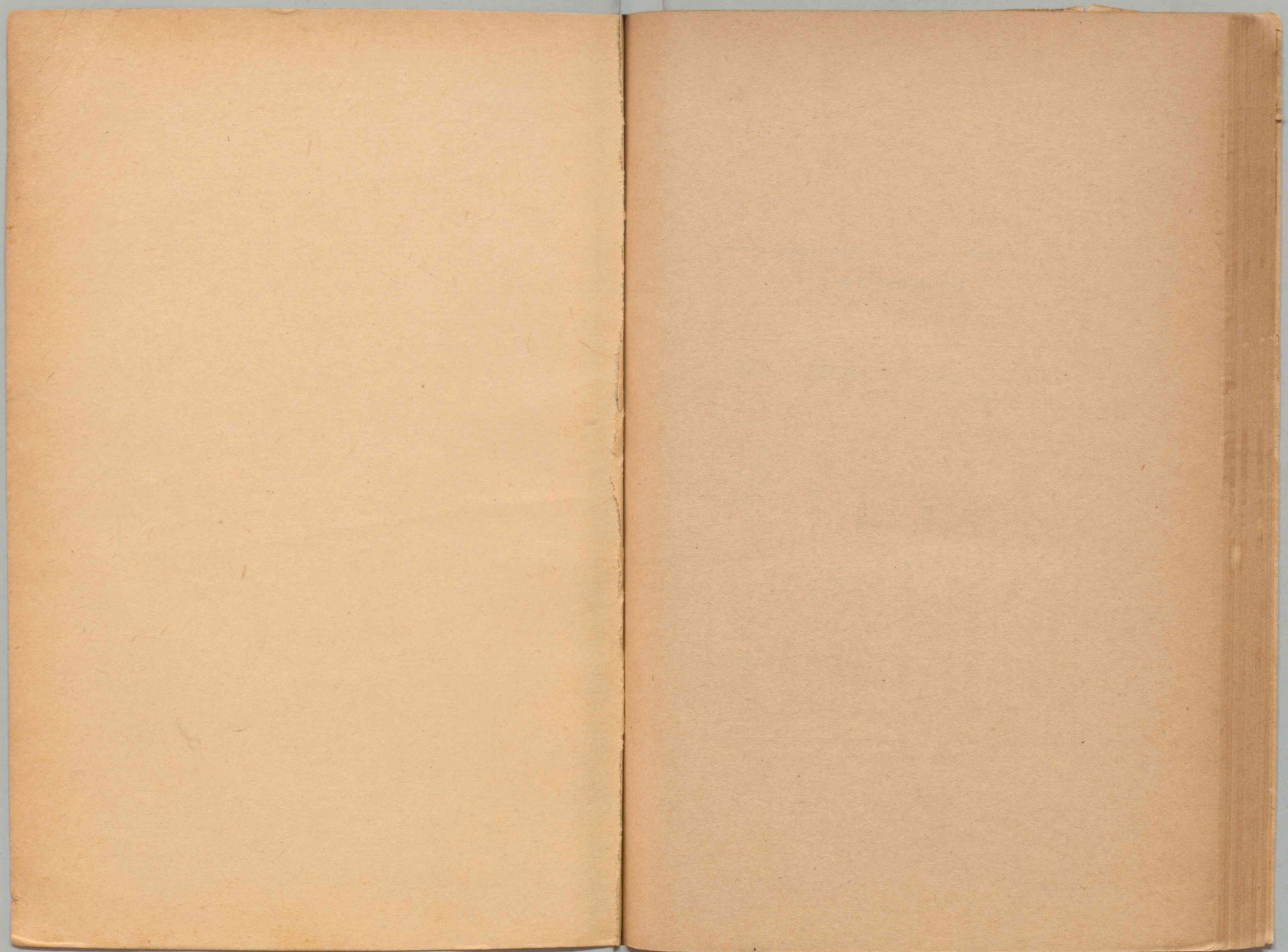
しあおう。

八 この文章に現われた方言について調べよう。
きのこの呼び名について調べよう。

百四十二

九 原作「生活の探求」をよく読んで感想を述べあおう。

十 作者島木健作について調べてみよう。





広島大学図書

0130449656



株式会社秀英出版